

津古牟田遺跡7

津古牟田遺跡7

小郡市文化財調査報告第340集

小郡市文化財調査報告第340集

2021

小郡市教育委員会

2021 小郡市教育委員会

津古牟田遺跡 7

小郡市文化財調査報告第340集

2021

小郡市教育委員会



10号墓棺人骨検出状況

卷頭凶版2



7号墓棺土层断面



10号墓棺土层断面



16号墓棺土层断面

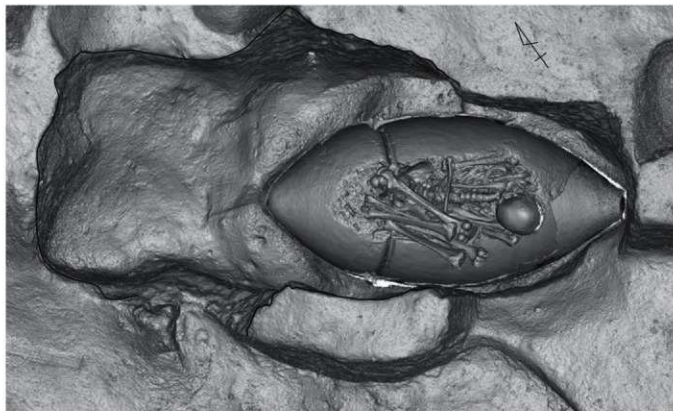


2号溝（祭祀溝）出土土器集合

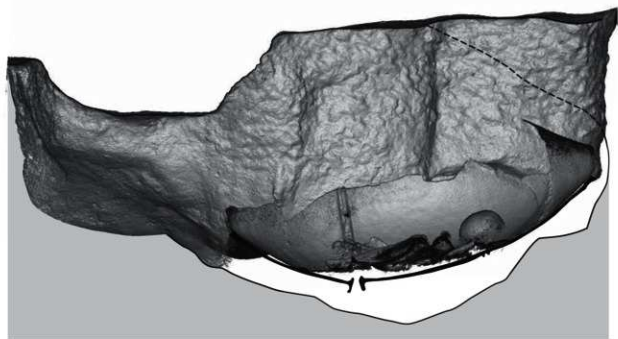


異種粘土使用土器
(左12号甕棺 右17号甕棺)

巻頭図版 4



37. 300m



3次元計測データに、手実測の平断面図から一部補足して図化した。
3次元計測には、CMAQ（九州文化財計測支援集団）の協力を得た。

<序 文>

本書は小郡市津古牟田遺跡7次調査の発掘調査報告書です。本遺跡が所在する小郡市北部の丘陵部は、これまでの調査で、弥生時代の集落が展開していたことが明らかになっています。本遺跡は筑紫野市との市境に位置し、筑紫野市隈・西小田遺跡と小郡市津古牟田遺跡では連続する弥生時代の甕棺墓が検出されています。本調査では、津古牟田遺跡4から連なる甕棺墓地を調査し、ほとんどの甕棺内に弥生人骨が遺存しており、歴史学だけではなく、形質人類学の観点からも貴重な調査となりました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和3年3月31日

小郡市教育委員会 教育長 秋永 晃生

<例 言>

1. 本書は、平成30年度に行った小郡市津古に所在する「津古牟田遺跡7」の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、株式会社嘉賀工務店から委託を受け、小郡市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は、平成30年10月9日から平成31年2月6日まで実施した。調査面積は、746.06㎡である。
4. 出土人骨の現地での実測・取り上げ作業及び保存処理・分析は九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに依頼し、第4章の報告文を執筆頂いた。
5. 遺構の実測は担当者のほか、久住愛子、林知恵、宮崎美穂子、佐々木智子、永富加奈子、山川清日、鳥根大学学生山田桃子が行った。遺物の実測は担当者のほか、久住、デジタルトレースは、宮崎が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木・永富・山川・牛原真弓が行い、遺物の撮影は(有)システム・レコに委託した。
6. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系(世界測地系)に拠る。
7. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。
8. 本書で用いた略号は、甕棺墓:ST 土坑:SK 溝:SD である。
9. 調査時には以下の方々をはじめ、ご指導を賜った。記して、感謝申し上げます。坂井貴志、田尻義士、石田智子、片岡宏二、永見秀徳、藤川智絵、神川めぐみ、岸田俊子、大庭孝夫、石川健、福永将大、秦憲二、岩永省三、李亭源、輪内遼、木原克(敬称略・来跡順)
10. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
11. 本書の執筆は第4章以外の執筆と編集は山崎頼人が行った。

<目次>

第1章	調査の経過と組織	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査の経過	1
	3. 調査組織	1
第2章	位置と環境	2
第3章	遺構と遺物	4
	1. 調査の概要	4
	2. 甕棺墓	4
	3. 溝状遺構	49
	4. 土坑	54
第4章	津古牟田遺跡7次調査の埋葬状態と形質の特徴 (星野宙也・米元史織・山下理呂・足達悠紀・諸岡初音・唐尚暉・永島さくら・出見優人・小高蒼大・ 松尾樹志郎・中野真澄・James Frances Loftus III・舟橋京子)	61
第5章	調査成果の分析	110

< 挿 図 目 次 >

第1図	津古牟田遺跡周辺遺跡分布図 (s=1/25,000)	3
第2図	津古牟田遺跡調査区位置図 (s=1/5,000)	3
第3図	津古牟田遺跡7全体図 (s=1/100)	5・6
第4図	1・2・3・5・6・9号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	8
第5図	4・11・15号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	9
第6図	7号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	11
第7図	8・17・20号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	12
第8図	10号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	13
第9図	12号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	15
第10図	13・24号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	16
第11図	14号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	18
第12図	18・22・26・35・36号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	20
第13図	16号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	21
第14図	19号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	23
第15図	23号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	24
第16図	25・28号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	26
第17図	27・29・33号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	28
第18図	30・37・38・40号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	30
第19図	31号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	31
第20図	32号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	32
第21図	34・39号甕棺墓 実測図 (s=1/20)	35
第22図	甕棺(大形棺) 実測図① [ST04・ST07] (s=1/10)	36
第23図	甕棺(大形棺) 実測図② [ST10・ST11・ST12] (s=1/10)	37
第24図	甕棺(大形棺) 実測図③ [ST13・ST16・ST19] (s=1/10)	38
第25図	甕棺(大形棺) 実測図④ [ST14・ST20・ST23] (s=1/10)	39
第26図	甕棺(大形棺) 実測図⑤ [ST24・ST25・ST27] (s=1/10)	40
第27図	甕棺(大形棺) 実測図⑥ [ST28・ST29・ST30] (s=1/10)	41
第28図	甕棺(大形棺) 実測図⑦ [ST31・ST32・ST33] (s=1/10)	42
第29図	甕棺(大形棺) 実測図⑧ [ST34・ST39・ST41] (s=1/10)	43
第30図	甕棺(中形棺) 実測図 [ST02・ST08・ST36] (s=1/6, ST08はS=1/8)	44
第31図	甕棺(小形棺) 実測図① [ST01・ST03・ST05・ST06] (s=1/6)	45
第32図	甕棺(小形棺) 実測図② [ST09・ST15・ST17・ST26] (s=1/6)	46
第33図	甕棺(小形棺) 実測図③ [ST18・ST22・ST35] (s=1/6)	47
第34図	甕棺(小形棺) 実測図④ [ST37・ST38・ST40] (s=1/6)	48
第35図	1・3号溝 実測図 (s=1/25)	50
第36図	2号溝 実測図 (s=1/25)	51
第37図	祭祀溝 出土土器実測図① [SD01・SD02] (s=1/4, 2はS=1/8)	52
第38図	祭祀溝 出土土器実測図② [SD02・SD03] (s=1/4, 9・14・15はS=1/6)	53
第39図	2・6・9・10号土坑 実測図 (s=1/40)	55
第40図	8・14号土坑 実測図 (s=1/40)	57
第41図	祭祀土坑 出土土器実測図 [SK10・SK14・SK15] (s=1/4, 8はS=1/6)	58
第42図	土坑出土土器実測図 [SK06・SK08] (S=1/10, 4はs=1/4)	59
第43図	男性頭蓋9項目による主成分分析	89
第44図	女性頭蓋9項目による主成分分析	89
第45図	ペンローズ形態距離による頭蓋比較(男性)	90
第46図	1・4・7号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	102
第47図	10・13号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	103
第48図	14・16号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	104
第49図	19・23号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	105
第50図	25・27号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	106
第51図	31・32号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	107
第52図	33・34号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	108
第53図	39号甕棺出土人骨 実測図 (S=1/15)	109
第54図	津古牟田遺跡・隈・西小田遺跡群の甕棺墓の分布 (S=1/1200)	110

<表 目 次>

第1表	津古牟田遺跡7出土土器観察表	60
第2表	出土人骨一覧表	61
第3表	主要頭蓋計測値の比較(男性)	87
第4表	主要下顎骨計測値の比較(男性)	87
第5表	主要頭蓋計測値の比較(女性)	88
第6表	主要下顎骨計測値の比較(女性)	88
第7表	主成分得点表(男性)	89
第8表	主成分得点表(女性)	89
第9表	四肢骨計測値比較(男性)	91
第10表	四肢骨計測値比較(女性)	92
第11表	推定身長の比較(男性)	93

<図 版 目 次>

図版1	津古牟田遺跡7全景 津古牟田遺跡7調査区全景
図版2	津古牟田遺跡7調査区西側甕棺群 津古牟田遺跡7ST10・ST16 津古牟田遺跡7調査区東側甕棺群
図版3	①1号甕棺墓 ②1号甕棺墓人骨出土状況 ③2・3号甕棺墓 ④4号甕棺墓 ⑤4号甕棺墓人骨出土状況 ⑥4号甕棺墓供献土器 ⑦5号甕棺墓 ⑧6号甕棺墓
図版4	①7号甕棺墓土層 ②7号甕棺墓土層詳細 ③7号甕棺墓検出 ④7号甕棺墓人骨検出 ⑤7号甕棺墓土層粘土固定 ⑥7号甕棺墓人骨出土状況
図版5	①8号甕棺墓 ②9号甕棺墓 ③10号甕棺墓発掘作業風景 ④11号甕棺墓 ⑤12号甕棺墓 ⑥12号甕棺墓人骨出土状況 ⑦13号甕棺墓 ⑧13号甕棺墓人骨出土状況
図版6	①10号甕棺墓土層 ②10号甕棺墓土層詳細 ③10号甕棺墓 ④10号甕棺墓粘土検出 ⑤10号甕棺墓 ⑦10号甕棺墓粘土詳細
図版7	①14号甕棺墓土層 ②14号甕棺墓接口部分詳細 ③14号甕棺墓人骨出土状況 ④15号甕棺墓 ⑤17号甕棺墓 ⑦18号甕棺墓土層 ⑧14号甕棺墓人骨実測風景
図版8	①16号甕棺墓土層 ②16号甕棺墓横穴部検出 ③16号甕棺墓人骨出土状況 ④16号甕棺墓横穴部土層 ⑤16号甕棺墓下層 ⑥16号甕棺墓接口部下層粘土 ⑦接口部下層地山掘り込み部
図版9	①19号甕棺墓土層 ②19号甕棺墓横穴部土層 ③19号甕棺墓人骨出土状況 ④19号甕棺墓人骨出土状況詳細 ⑤20号甕棺墓 ⑥22号甕棺墓 ⑦23号甕棺墓土層 ⑧23号甕棺墓
図版10	①23号甕棺墓人骨出土状況 ②23号甕棺墓粘土検出状況 ③24号甕棺墓 ④25号甕棺墓 ⑤25号甕棺墓人骨出土状況 ⑥27号甕棺墓 ⑦27号甕棺墓人骨出土状況
図版11	①28号甕棺墓 ②28・29号甕棺墓 ③29・30号甕棺墓 ④30・29号甕棺墓 ⑤29号甕棺墓下層粘土 ⑥31号甕棺墓土層 ⑦31号甕棺墓 ⑧31号甕棺墓人骨検出状況
図版12	①31・32・34・19号甕棺墓 ②32号甕棺墓土層 ③32号甕棺墓 ④33号甕棺墓 ⑤32号甕棺墓人骨出土状況 ⑥33号甕棺墓
図版13	①34号甕棺墓 ②34号甕棺墓上蓋出土状況 ③34号甕棺墓人骨出土状況1 ④35号甕棺墓 ⑤34号甕棺墓人骨出土状況2 ⑥37号甕棺墓
図版14	①38号甕棺墓 ②40号甕棺墓 ③39号甕棺墓 ④39号甕棺墓人骨出土状況 ⑤31号甕棺墓土層 ⑥41号甕棺墓
図版15	①1号溝土層 ②14号土坑・2号溝 ③2号溝土層 ④2号溝土器出土状況
図版16	①2号溝土器出土状況 ②2号溝土器出土状況 ③2号溝 ④3号溝 ⑤14号土坑上層 ⑥14号土坑下層 ⑦8号土坑 ⑧9号土坑
図版17	大形棺①[ST04・ST07・ST10・ST11・ST12・ST13]
図版18	大形棺②[ST14・ST16・ST19・ST20・ST23]
図版19	大形棺③[ST24・ST25・ST27・ST28・ST29・ST30]
図版20	大形棺④[ST31・ST32・ST33・ST34・ST39・ST41]
図版21	中形棺・小形棺①[ST01・ST02・ST03・ST05・ST06・ST08・ST09・ST15・ST17]
図版22	中形棺・小形棺②[ST18・ST22・ST35・ST36・ST37・ST38・ST40]
図版23	溝出土土器[SD01・SD02]
図版24	土坑出土土器[SK08・SK14・SK15]

第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯

本発掘調査は7次調査で、津古牟田遺跡5・6と一連の宅地造成によるものである。津古牟田遺跡5次調査時に、平成29年3月25日付で照会文書（事前審査番号16172）が提出され、申請地の試掘調査を実施した。その結果、宅地造成に伴う地形改変が一部に見られたが、地形改変を受けていない広範囲に遺構が存在することが明白であった。これにより、開発前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。宅地開発は開発協議の段階であり、着工が未定であること、開発に先立ち、道路敷設が地形改変を受けている範囲でのみ先行して実施されること、その後、遺構の存在する宅地内道路の敷設にかかること、これらの意見を調整後、開発の段階ごとに発掘調査区を設定した。津古牟田遺跡7は宅地内道路部分の調査で平成30年9月25日付けで委託契約を締結し、現地の発掘調査は平成30年10月9日に開始し、平成31年2月6日に終了した。

2. 調査の経過

調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

10月9・10日 表土剥ぎを行う。重機のバケットに壘棺が引っかかることもあり、表土を残しつつ進める。小児棺に頭蓋骨を確認。15日 人力掘削開始（周辺の草刈りと攪乱除去）。17日 壘棺等遺構掘削開始、壘棺墓塚の土層を観察する方針で臨む。24日 壘棺墓が調査区外に及ぶため、可能な範囲で西側調査区拡張。26日 本日は曇りで遺構検出がしやすい。壘棺が出てくるので西南隅調査区拡張。11月1日 調査区自体は広くなく壘棺墓掘削の手順を考え、作業員を3班に分けて2班ずつの交代勤務とする。5日 小郡市役所契約係来跡。7日 14号壘棺は割れて土砂が流入しているが、人骨が遺存する。8日 壘棺墓平面図作成開始。9日 雨が降って状態が良いので壘棺墓の再検出をかける。13日 本日から新規作業員にレクチャー、ベテラン作業員からも指導有、助かる。14日 基山町坂井氏来跡。19日 九州大学田尻氏、鹿児島大学石田氏来跡、九博説明ボランティア1名来跡。20日 本日は午前で現場を止めて開発業者と話し合い。午前中から調査区南側の未調査部分の土取りを開始。文化財課内で現地において掘削範囲の確認して、掘削工事中止の申し入れ。文化財課、開発業者、施工業者で協議を行い、①これまでの発掘部分と未調査箇所の確認を行う。これ以上の掘削は行わず、必要場合は事前に遺構確認のもと行う。②津古牟田遺跡6と7の間の箇所は今回できるだけ調査に含める。③今回の調査は人骨が出土しているため、1月まで期間が欲しいことを伝える。九博説明ボランティア2名来跡。21日 昨日の掘削により南側が崖面化しており、危険作業となった。本日も法面を作るために少し掘削が入る。土を捨てる場所がなくなる。26日 空掘前の清掃。周辺の草刈りも行う。九州大学舟橋氏、小郡市杉本と今後の人骨調査について現地打ち合わせ。27日 初めての作業員全員集合。夜半に雨が降ったが、気球による撮影を実施。午後は、埋文センター整理作業員に壘棺についてレクチャーを行う。行橋市歴史資料館片岡氏来跡（空掘中）。7日 調査区東側の検出を行う。15時から九博ボランティア6名遺跡案内。16時から筑後市永見氏による3次元計測。10日 本日より島根大学生 山田氏参加。13日 九歴ボランティア 11名遺跡案内。14日 人骨の検出・図面作成・取り上げのために九州大学院生富田氏、星野氏調査参加開始。九博ボランティア2名遺跡案内。15日 宇城市教育委員会7名遺跡案内。18日 埋文サポートシステムと打ち合わせ。26日 少し雨が降っていたが、空掘強行する。27日 九州大学舟橋氏人骨調査を始める。小郡市史跡案内ボランティア15名+資料室4名 遺跡案内。28日 九州歴史資料館 大庭氏来跡。1月7日 九州歴史資料館 秦氏来跡、九博ボランティア1名来跡。10日 史跡案内ボランティア1名見学11日 九州大学舟橋氏、石川氏、九大生2名人骨調査、九州大学総合博物館岩永氏来跡。九歴ボランティア1名見学。18日 九博説明ボランティア11名見学。19日 三国小学校 白木教諭、ご子息見学。22日 行橋市歴史資料館片岡氏来跡。2月1日 韓神中学校 李亭源氏来跡、福岡大学院生輪内氏、福岡大学生木原氏来跡。4日 九州大学 田尻氏 九州大学院生 福永氏来跡。6日 調査終了。

3. 調査組織

[平成30年度調査 令和元年度・2年度整理作業]

小郡市教育委員会	教育長	清武 輝（令和元年9月まで）
		秋永 晃生（令和元年10月から）
	教育部長	黒岩 重彦（令和2年3月まで）
		山下 博文（令和2年4月から）
文化財課	課長	柏原 孝俊
	係長	杉本 岳史
	技師	山崎 頼人

第2章 位置と環境

本遺跡は筑後平野と福岡平野を繋ぐ二日市地帯に西側にあたり、九千部山に連なる基山の東側に広がる独立丘陵である三国丘陵の北西部に立地する。小都市を南北に貫流する宝満川水系の宝珠川北岸の丘陵上に立地する。現地からは、南側に宝珠川と間折谷への眺望がきく。

津古牟田遺跡の調査はこれまで6次にわたって行われている。1次調査(第1・2図1)は、昭和62年に宅地造成に伴って実施し、弥生時代中期初頭から前半、中期末、古墳時代後期、奈良時代と断続的に営まれた集落が検出された。このうち、貯蔵穴は弥生時代中期末のものが11基検出されており、床面から炭化米が出土している。2次調査(第1図2)は、昭和63年に宅地造成に伴って調査を実施し、弥生時代中期初頭から前半にかけての甕棺墓や木棺墓、古墳時代中期末の古墳が検出された。3次調査(第1・2図3)は、平成3年に市道改良工事に伴って調査を実施し、弥生時代中期の甕棺墓3基が検出された。4次調査(第1・2図4)は、平成13年に医院建設に先立つ調査を実施した。隈・西小田遺跡第6地点(第1・2図9)の南西側隣接地である。弥生時代中期を中心とする甕棺墓96基、祭祀土坑9基、石蓋土壇墓1基、箱式石棺墓1基などが検出された。5次調査は最高所で標高48mを測る。北側は筑紫野市の住宅地となっており、隈・西小田遺跡群第6地点として調査が行われた。本調査区は同一丘陵上にあり、丘陵の南側尾根から南側斜面にあたる。検出された主な遺構は古墳3基、周溝墓2基、石棺墓4基、木棺墓3基、土壇墓7基、甕棺墓38基、貯蔵穴5基、土坑18基である。6次調査の調査区は長さ28.6m、幅3.2~4.4mの範囲で、津古牟田遺跡4・5と同一丘陵上の丘陵南西裾部にあたる。地形変化が著しく、西側は地形の落ちとなっている。検出された主な遺構は土坑状の遺構が3基である。

北側で隣接する隈・西小田遺跡群では筑紫野市教育委員会によって1982年から1991年にかけて中九州ニュータウン構想に基づく「隈・西小田土地区画整理事業」の発掘調査約52haが進められた。隈・西小田遺跡群からは弥生時代の集落・墓域、古墳時代では前方後方墳を含む古墳81基、横穴墓16基、周溝墓23基、須臾器窓跡5基のほか、集落の調査も行われている。膨大な遺構・遺物量であることから未だ、整理作業が未了である。

隣接する隈・西小田遺跡群第6地点では、津古牟田遺跡5次調査の最高地点標高48mから南北に伸びる丘陵と、これより北西に延びる南尾根がV字状となる独立丘陵である。調査では、古墳11基、周溝墓7基、甕棺墓109基、土壇墓38基、木棺墓7基、石蓋土壇墓5基、石棺墓1基、住居跡41軒、貯蔵穴100基、土坑98基、溝21条、堅穴15基等が調査された(筑紫野市史(考古資料(上))1991)。古墳群は1・2・9・10・11号墳が北尾根稜線上に、5号墳がその南側斜面に、6号墳が北側斜面に立地し、南尾根稜線上には3・4・7・8号墳が立地する。

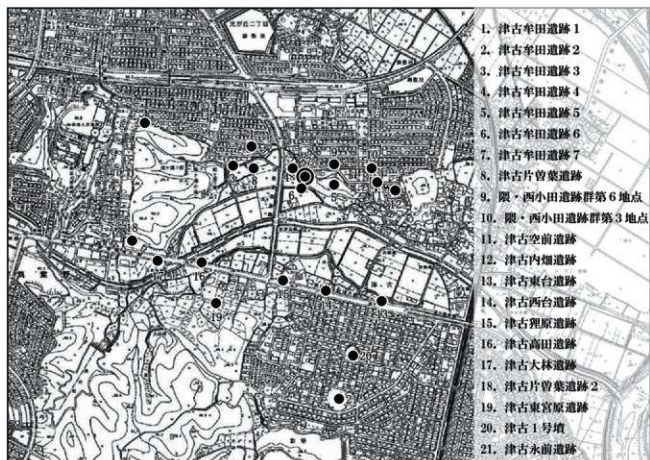
甕棺等の墓地群は丘陵頂部から東南に走る稜線を中心に甕棺墓が鉢巻状に埋葬される。また、丘陵尾根線上と、東に隣接する第3地点との陸橋部には土壇墓、木棺墓を中心とした小群がみられる。甕棺墓群は、中期後半から後期初頭の時期に盛行し、集中する頂部は甕棺墓の埋葬を始める前に地山を整形して平坦面をつくっている。平坦面の墓地群には標石と考えられる配石が認められ、これは津古牟田遺跡5地点でも同様であった。平坦面の北端に位置する77号甕棺墓は、中期後半の小児棺であるが棺内には成年男性の頭骨のみが納められていた。頭部のみは埋葬例は隈・西小田遺跡群第3地点、第10地点でも見られた。

集落跡は、主に弥生時代前期末~後期前半のもので、舌状丘陵の尾根線から北西の緩斜面に向かって広がっている。西の尾根は少数の貯蔵穴が分布するのみである。舌状丘陵の先端部に位置する12号住居からは中細形銅矛の銜型片が出土した。

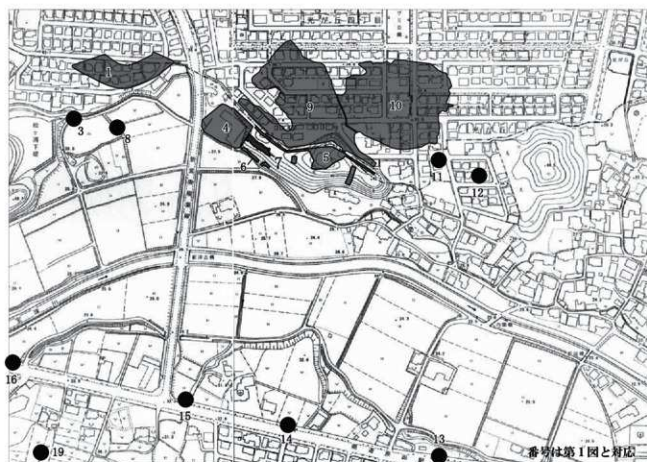
7次調査では、弥生時代中期の墓域が確認されている。甕棺墓群は列状に検出され、列に沿う形で祭祀土器が多く出土する祭祀溝、祭祀土坑があわせて確認された。津古牟田遺跡4次調査と7次調査箇所(北西-南東)に延びる丘陵斜面と隈・西小田遺跡群6地点と津古牟田遺跡5次調査東部で見られた南北にみられる丘陵尾根線上にのる甕棺墓群とは主体時期が異なる。これについては、後に詳しく検討する。

【参考文献】

- 小都市教育委員会1987「津古牟田遺跡」小都市文化財調査報告書第35集
- 小都市教育委員会1990「津古牟田遺跡Ⅱ」小都市文化財調査報告書第67集
- 小都市教育委員会1997「埋蔵文化財調査報告書2(津古牟田遺跡3)」小都市文化財調査報告書第116集
- 小都市教育委員会2003「津古牟田遺跡4」小都市文化財調査報告書第184集
- 小都市教育委員会2019「津古牟田遺跡5 弥生時代甕棺墓地編」小都市文化財調査報告書第325集
- 小都市教育委員会2020「津古牟田遺跡6」小都市文化財調査報告書第325集
- 筑紫野市史編さん委員会1991「筑紫野市史 資料編(上) 考古資料」
- 筑紫野市教育委員会1993「隈・西小田地区遺跡群」筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集



第1図 津古牟田遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 津古牟田遺跡調査区位置図 (S=1/5,000)

第3章 遺構と遺物

1. 調査の概要

本調査では、西側隣接調査区である「津古牟田遺跡4」から続く甕棺墓の列埋葬を検出した(第3図)。西側は地形が良好に残っており、遺構の残りも良かった。中央部から東側は近代以降傾斜面を削平して平坦面を造成しており、大きく地形が改変されている。その削平によって崖面となった部分(北壁)に溝状遺構が確認されており、調査を困難にしていたが、最終的には足場を確保して掘削して、甕棺墓列に伴う、祭祀溝となることが明らかとなった。

また、調査対象範囲の西端部は既に開発による掘削が進んでおり、その壁面から祭祀土器が露出して、開発側の遺物の回収のみで、詳細な調査は行えなかった。津古牟田遺跡5以降の一連の宅地造成に関して、開発側との十分な協議が出来ておらず、小郡市文化財行政の反省点である。

検出した遺構は、甕棺墓40基、祭祀溝3条、土坑10基(祭祀土坑3基含む)、倒木痕である。

2. 甕棺墓

甕棺墓は地形にそって北西から南東方向へ列状をなしている。調査区西端では墓群が集塊状に形成された箇所もみられた。列墓の北側ではそれらを区画するような祭祀溝、祭祀土坑が分布し、墓域を構成する。甕棺墓40基のうち、約半数の21基で埋葬人骨が確認され、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院へ人骨の調査を委託した。その成果は第4章に掲載しており、本章では人骨の報告は省略する。

1号甕棺墓(第3・4図 図版1)

調査区北西端、標高36.8mで検出した。上甕は機械掘削時に少し破損した。7号甕棺墓の北側をわずかに切っている。墓壇の検出規模は64×46cmの楕円形を呈し、深さは64cmである。接口式中児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、西壁で24cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-85°-Wで、埋地角度は42°である。人骨の一部が遺存していた。

甕棺(第31図 図版21)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。胴部下半～底部を欠損する。口径31.0cm、残存高33.3cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙～明黄褐色を呈し、焼成は良好である。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径32.2cm、器高38.1cm、底径8.1cmを測る。内面はナデ、外面は2種のハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

2号甕棺墓(第3・4図 図版3)

調査区北西側、標高37.1mで検出した。墓壇上部は削平を受けており、棺体も一部破損していた。3号甕棺墓の北側をわずかに切っている。墓壇の検出規模は116×62cmの楕円形を呈し、深さは46cmである。接口式中形棺で、墓壇は西側が一段深くになっている。甕棺の主軸はN-79°-Wで、埋地角度は-3°である。

甕棺(第30図 図版21)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径36.45cm、器高43.5cm、底径8.1cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙を呈し、焼成は良好である。底部外面に黒斑を有す。

下甕 中形の甕である。やや内傾して立ち上がる胴部に水平口縁が取りつく。口縁下に断面三角形の突帯を有す。口縁部から胴部を一部欠き、底部を欠く。復元口径41.2cm、器高49.7cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

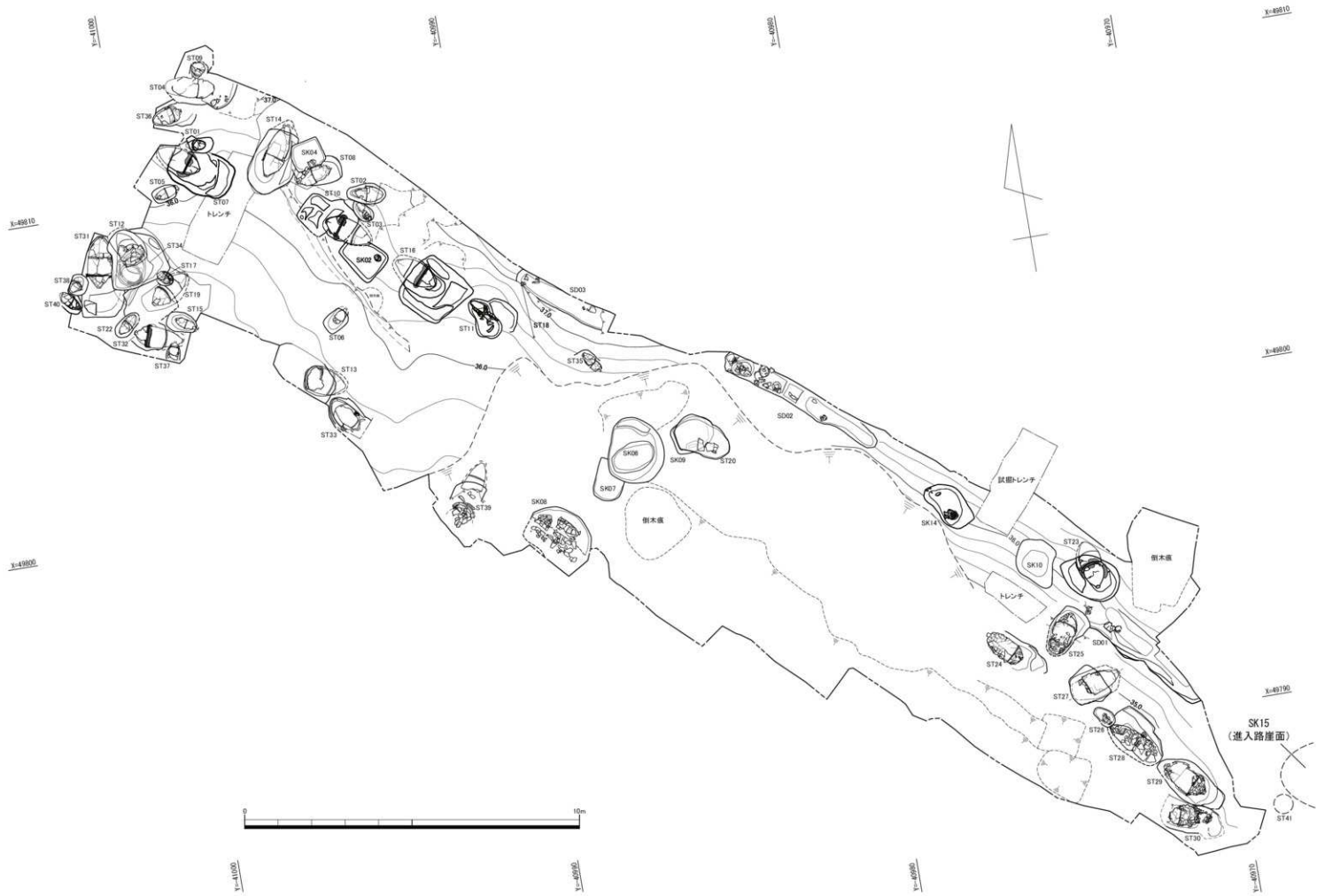
3号甕棺墓(第3・4図 図版3)

調査区北西側、標高37.1mで検出した。墓壇上部は削平を受けており、棺体も破損している。2号甕棺に北側の一部を切られている。墓壇の検出規模は76×46cmの楕円形を呈し、深さは26cmである。接口式中児棺で、甕棺の主軸はN-35°-Wで、埋地角度は不明である。

甕棺(第31図 図版21)

上甕 小形の鉢である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。口縁部、体部下部～底部を一部欠損する。復元口径29.95cm、器高19.75cm、復元底径10.0cmを測る。体部内外面は板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい橙～にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。体部外面下半に黒斑を有す。口縁部水平面にへら記号様工具痕で平行する2本線がみられた。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁でやや外側に垂れ下がる。胴部約1/8を欠損する。口径32.1cm、器高40.35cm、底径8.15cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。口縁部上面、底部外面に黒斑、底部外面にモミ痕あり。口径に対して器高が高い。



第3図 津古车站遺跡7全体図 (s=1/100)

4号甕棺墓 (第3・5図 図版3)

調査区北西端、標高37.0mで検出した。上甕・下甕ともに樹木により破損している。可能な限り調査区を拡張したが、樹木による攪乱も受けており調査は難航した。北側の端を9号甕棺墓に切られている。墓壇は2段掘りである。1次墓壇の検出規模は102×80cm以上の隅丸方形を呈し、深さは60cmである。西側の二次墓壇は、平面楕円形で104×56cm以上、深さ12cmの規模である。覆口式成人棺で、下甕は口縁部内側を打ち欠き、上甕は体部上半を打ち欠いて棺体としている。甕棺の主軸はN-81°-Wで、埋地角度は14°である。

棺内には赤色顔料の分布がみられ、1次墓壇の南側では広口蓋、高坏破片が出土した。壺は破損した状態で検出したが、土圧や上部の削平によって影響を受けている可能性も捨てきれない。人骨が遺存していた。

甕棺 (第22図 図版17)

上甕 大形の甕の口縁部から胴部上半を打ち欠き上甕としている。胴部最大径に高さのある三角形突帯を2条巡らす。粘土帯積みの幅は5~6cmである。残存高58.2cm、底径11.8cmである。内面はナデ、外面は板状工具がみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。胴部突帯付近に斜め方向に棒状黒斑と長円状の黒斑が並んでみられた。内面に赤色顔料がみられる。

下甕 丸みを帯びた器形である。口縁部上面はやや内側傾く面を持っている。本来は内側にもやや延びる水平口縁となっていた。内側口縁端部を打ち欠いている。胴部最大径には2条の突出度の高い突帯を巡らせている。粘土帯積みの幅は8cm前後である。口径50.4cm、器高87.2cm、底径11.6cmを測る。内面はナデ・板状工具ナデ、外面下位はハケメ、上位は板状工具ナデがみられる。胎土は粗く5mm以下の砂粒を含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。胴部中に楕円形の広い黒斑を持つ。内面に赤色顔料塗布がみられる。胴部下位に穿孔部がみられる。出土状況から根による攪乱の影響の可能性も考えられる。

5号甕棺墓 (第3・4図 図版3)

調査区北西端、標高36.6mで検出した。7号甕棺墓の南西に位置し、7号甕棺墓を意識した配置で後出すと考えられる。墓壇の検出規模は74×48cmの隅丸長方形を呈し、深さは34cmである。接口式小児棺で、墓壇はほぼ直に下がり、東壁で12cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-75°-Eで、埋地角度は-2°である。

甕棺 (第31図 図版21)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側にやや突出する逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径32.0cm、器高35.0cm、底径8.15cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部上面、底部外面に黒斑を有す。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側にやや突出する逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径31.9cm、器高35.0cm、底径8.35cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。器壁が厚く重量がある。

6号甕棺墓 (第3・4図 図版21)

調査区北西側、標高36.3mで検出した。付近は段造成がみられ、墓壇上部は削平を受けている。墓壇の検出規模は76×54cmの隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、北東壁で12cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-46°-Eで、埋地角度は27°である。

甕棺 (第31図 図版21)

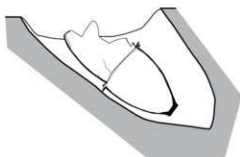
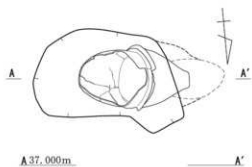
上甕 小形の甕である。打ち欠いた壺の体部を使用したもので、最大径付近に断面三角形の突帯が2条めぐり、体部最大径35.3cm、残存高21.3cmを測る。体部内面は板状工具ナデ、外面下位はヘラ削り後一部ハケメ、その後ヘラミガキ、中位はヘラ削り後ヘラミガキ、上位はヘラミガキがみられる。突帯間は暗文施文がみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。体部下半、内外面に黒色付着物がみられる。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出する逆L字口縁である。口縁部が約1/8欠損する。口径33.55cm、器高34.35cm、底径8.4cmを測る。内面はナデ、外面はかなり目が細いハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄橙～黄褐色を呈し、焼成は良好である。体部上半に黒斑あり。口径に対し、器高が高い。

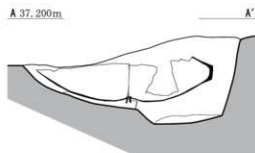
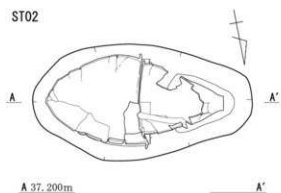
7号甕棺墓 (第3・4図 図版4)

調査区北西端、標高36.7mで検出した。墓壇の西側は一部削平を受けている。1号甕棺に北側の一部を切られている。墓壇自体に切り合いはみられないが、5号甕棺も7号甕棺墓を意識した配置であろう。墓壇は2段掘りである。1次墓壇の検出規模は196×130cmの隅丸長方形を呈し、深さは90cmである。北西側の二次墓壇は、平面長楕円形で190×100cm、深さ36cmの規模である。二次墓壇は緩やかに南西側に下り、壁を50cm程掘り込んでいる。1次墓壇底から二次墓壇へ至る北東部では大小のテラス面を複数持つており、階段状となっている。この部分が墓壇掘削時、甕棺挿入時の作業および入棺時の儀礼スペースと考えられる。土層堆積状況は甕棺の上位に比較的に細かい1mm以下の砂粒を含む淡赤褐色砂質土が薄くみられ、その後、何段階かに分かれて埋められている。必ずしも、一気に埋めたものではないことが看取できる。下位(6・8・12層)では砂質系土が多く、上位(2~5層)では粘質土が多い傾向にあり、特に3・5層では砂質土

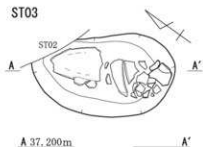
ST01



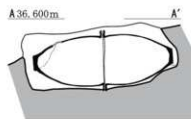
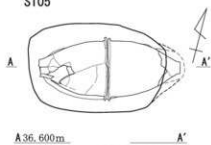
ST02



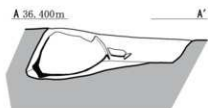
ST03



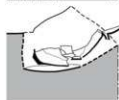
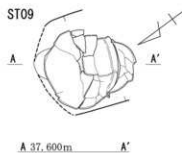
ST05



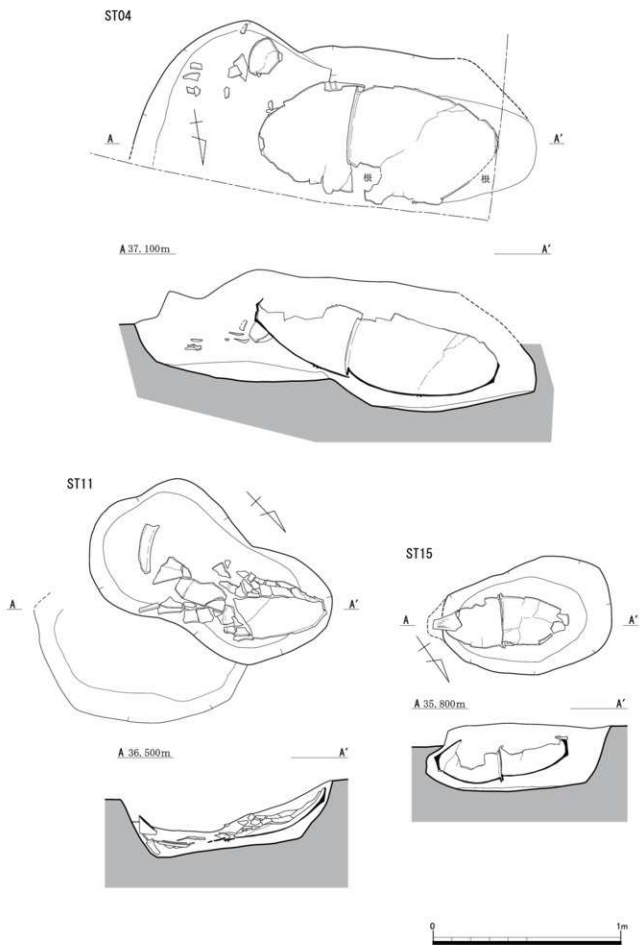
ST06



ST09



第4图 1·2·3·5·6·9号墓实测图 (s=1/20)



第5图 4·11·15号麦棺墓 实测图 (s=1/20)

と粘質土が互層状に堆積する。この互層状堆積は甕棺の上位に特徴的にみられるので、意識的に甕棺が壊れないように丁寧に土をのせていることが想像できる。一次墓壇側は大きな単位で埋めている（4・7層）。

接口式成人棺で、合口部の側面から上面にかけて黄褐色粘土で目貼りをしてしている。特に側面から側面下部にも粘土がみられ、墓壇と棺の隙間を充填するように黄褐色粘土を入れて棺の合口と姿勢を保持している。甕棺の主軸はN-55°-Wで、埋地角度は1°である。全身骨が良好な状態で遺存していた。

8号甕棺 (第22図 図版4)

上甕 大形の鉢である。口縁部は断面T字状を呈し、やや外側に傾く。内側端部が丸みをもって厚く、外側端部は狭い面を持っている。ほぼ完形で、口径63.15cm、器高37.85cm、底径10.0cmを測る。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。底部内外面に黒斑を有す。

下甕 大形の甕で砲弾型の器形である。口縁部は断面T字状を呈し、内側端部が丸みをもってやや厚く、外側端部は狭い面を持っている。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部から貼り付け粘土を充填している。胴部やや下位に一見M字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は5~6cmである。ほぼ完形で、口径65cm、器高99.1cm、底径10.75cmを測る。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は明黄褐色~橙色を呈し、焼成は良好である。黒斑は胴部中位の2点支持と底部付近の接地面の黒斑がみられ、2点間には中央が薄い黒斑で周りに緋色を持つものがある。また、その反対側にも黒斑や黒斑周囲の緋色が点的に見られる。

8号甕棺墓 (第3・7図 図版5)

調査区北西側、標高36.9mで検出した。付近は段造成がみられ、墓壇上部は削平、甕棺も破損した状態で検出された。4号土坑に北側を一部切られていて甕棺も流れ込んでいた。墓壇の検出規模は138×82cmの楕円形を呈し、深さは44cmである。接口式中形棺で、残存は良くないが、墓壇底から一段上って、西壁で10cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-78°-Eで、埋地角度は水平に近いものと考えられる。

甕棺 (第30図 図版21)

上甕 中形の鉢である。内傾して立ち上がる胴部から逆L字状に屈曲する口縁部を有す。口縁部下に断面三角形の突帯を巡らす。体部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を多く含む。内面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胴部下半と反対側の胴部上位に広めの黒斑を有す。口縁部上面に一部炭化物が付着する。ほぼ完形で、口径44.3cm、器高58.95cm、底径9.4cmを測る。

下甕 中形の甕である。内傾して立ち上がる胴部に水平口縁が取りつく。口縁下に断面方形の突帯が巡る。ほぼ完形で、口径43.25cm、器高58.5cm、底径10.4cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい橙色を呈し、焼成は良好である。底部外面に種子圧痕あり。黒斑は胴部上位に2点黒斑と下位に接地面黒斑が認められる。

9号甕棺墓 (第3・4図 図版5)

調査区北西端、標高37.4mで検出した。4号甕棺墓の北側を一部切っている。墓壇上部は削平を受けている。調査区外であったが、壁面に甕棺が露出していたので、拡張して調査した。墓壇の検出規模は54×50cm以上の隅丸方形と考えられ、深さは36cmである。接口式小見棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、北壁を若干掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-87°-Eで、埋地角度は34°である。

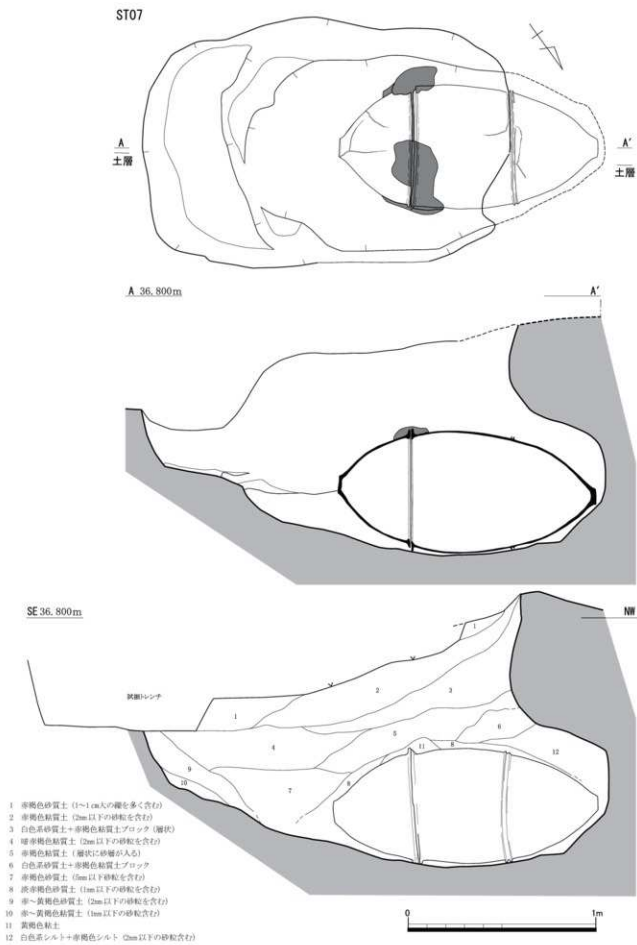
甕棺 (第32図 図版20)

上甕 小形の鉢である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径28.15cm、器高16.5cm、底径9.6cmを測る。体部内面はナデ、外面はハケメがみられる。胎土は粗く4mm以下の砂粒を多く含む。色調はぶい橙~浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。底部外面に種子圧痕かがみられる。

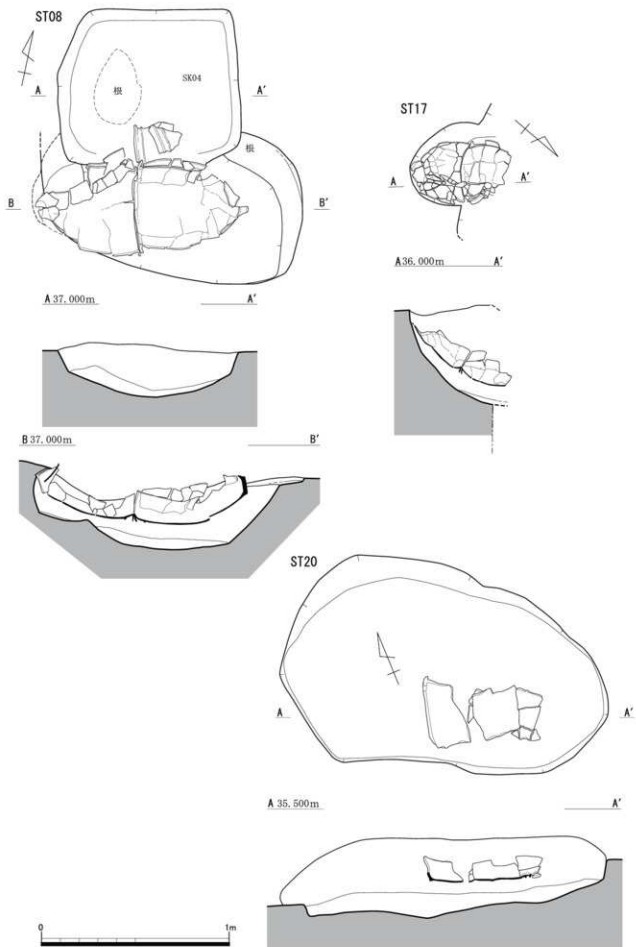
下甕 小形の樽型の甕である。胴部中位最大径部に断面三角形の突帯が巡り、内傾して立ち上がる口縁に水平口縁が取りつく。ほぼ完形で、口径30.05cm、器高43.2cm、底径9.75cmを測る。内面上位、外面は板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

10号甕棺墓 (第3・8図 図版6)

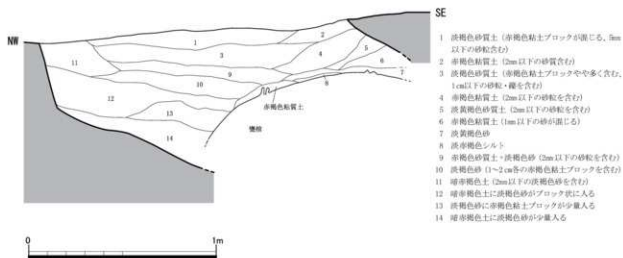
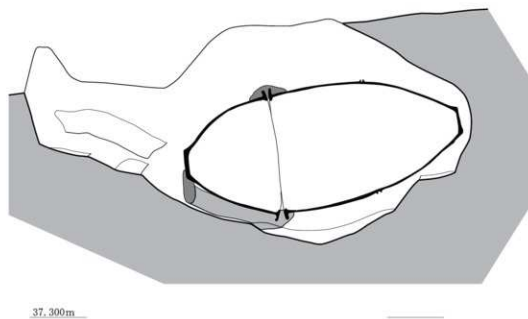
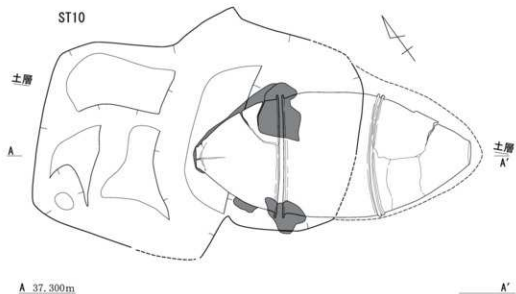
調査区北西側、標高37.1mで検出した。墓壇の南西側は一部削平を受けている。3号甕棺に北東側を一部切られ、2号土坑に南側を一部切られている。墓壇上位は削平を受けているが、墓壇は2段掘りと考えられる。1次墓壇は1m四方の隅丸方形がふたつ連続するような形状で、全体での検出規模は168×138cm、深さは80cmである。南東側の二次墓壇は、平面長楕円形で158×84cm、深さ36cmの規模である。二次墓壇は中央が深く、長軸上の北西側と南東側でテラス面を持ち、南東壁を66cm程掘り込んでいる。1次墓壇底から二次墓壇へ至る北東部では大小のテラス面を複数持っており、階段状となっている。この部分が墓壇掘削時、甕棺挿入時の作業および入棺時の儀礼スペースと考えられる。土層堆積状況は甕棺の上位の一部にきめ細かい淡赤褐色シルト(8層)や淡黄褐色砂層(7層)が薄くのっている。その後も、何段階かに分かれて水平堆積がみられ、必ずしも、一気に埋めたものではないことが看取できる。10号甕棺墓では、赤褐色系土(4・6・9・12・14層)と淡褐色砂層(3・5・7・10・13層)が大きく互層となっている特徴がある。接口式



第6図 7号壙棺墓 実測図 (s=1/20)



第7图 8·17·20号类棺墓 实测图 (s=1/20)



第8図 10号墓棺墓 実測図 (s=1/20)

成人棺で、合口部の下部から側面、側面から上面にかけて赤褐色粘質土で目貼りを行っている。特に下部では上巻と墓底の隙間を埋めるように広く赤褐色粘質土がみられ、上巻をしっかりと固定している。甕棺の主軸はN-54°-Wで、埋地角度は-9°である。全身骨が良好な状態で遺存していた。

10号甕棺 (第23図 図版17)

上巻 大形の鉢である。底部から椀形に立ち上がる器形で、口縁部は断面T字形の口縁部で、やや外側に傾く。内側端部が丸みをもって厚く、外側端部は細く、面を持っている。肥厚する擬口縁部の両側に粘土を貼り付け口縁を成形する。ほぼ完形で、口径66.8cm、器高45.8cm、底径10.8cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面は板状工具後ハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。底部外面に黒斑を有す。

下巻 大形の甕で、胴部上位で少し内傾傾きに立ち上がる。口縁部は断面T字状を呈し、内側へ発達して、やや外側に傾く。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部から貼り付け粘土を充填している。胴部中下位に一見M字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は7~8cmである。ほぼ完形で、口径64.5cm、器高103cm、底径11.2cmを測る。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を含む。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。黒斑は胴部上位の2点支持と底部付近の接地面の黒斑がみられ、反対側には不正円形の薄い黒斑がみられる。

11号甕棺墓 (第3・5図 図版5)

調査区北西側、標高36.4mで検出した。墓壙上部は大きく削平を受けている。墓壙の東側に一段高く、連続した隅丸方形の掘り込みがあるが、これが1次墓壙となるのかは不明である。墓壙の検出規模は134×78cmの不整長円形を呈し、深さは32cmである。接口式成人棺と考えられるが、削平のため、上巻は不明である。甕棺の主軸はN-46°-W程度で、甕棺自体が削平によって破損し、原位置を保っていない。

12号甕棺 (第23図 図版17)

上巻 大形の鉢である。口縁部はほぼ平坦で外側にはあまり発達せず、内側にやや張り出す。口縁部へ体部下半を大きく欠損し、底部を欠いている復元口径74.2cm、残存高21.4cmである。外面は板状工具ナデが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

下巻 大形の甕で砲弾型の器形である。口縁部は断面T字状を呈し、内側により発達している。内側、外側とも端部に面を持っている。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部から貼り付け粘土を充填して成形する。胴部下位に一見M字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は8cm前後である。口縁部から胴部一部欠き、口径76cm、器高105cm、底径15.6cmを測る。内外面ともにナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を含む。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。黒斑は胴部中位から下位にかけてベタとした大きい楕円形の黒斑を有す。

12号甕棺墓 (第3・9図 図版5)

調査区南西端、標高36.8mで検出した。調査区を拡張して調査した。19号甕棺墓・31号甕棺墓・34号甕棺墓を切り、17号甕棺墓に切られる。墓壙は2段掘り、一次墓壙の検出規模は180×156cmの隅丸方形、深さは96cmである。北西側の二次墓壙は、平面隅丸長方形で126×80cm、深さ44cmの規模である。二次墓壙中ほどに段を持ちつつ斜め下方に下がり、南東壁を本来は30cm程掘り込んでいたと考えられる。樹木等攪乱の影響で、上巻は下巻内に転がり込んでいる状態で検出された。接口式成人棺と考えられるが、合口部の目貼り粘土は検出していない。甕棺の主軸はN-25°-Wで、埋地角度は36°である。人骨が一部遺存する。

13号甕棺 (第23図 図版17)

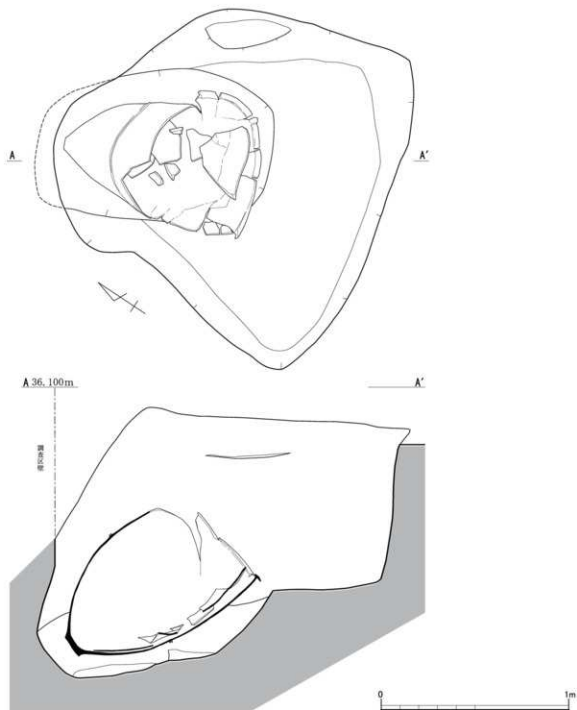
上巻 大形の鉢である。底部からラッパ状に大きく開く器形で、口縁部は平坦で外側に発達し、内側に短く張り出す。ほぼ完形で、口径63.35cm、器高34.55cm、底径11.1cmを測る。内面は板ナデ、外面は底部付近ハケメ、上半は板状工具ナデが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。口縁部のみが白色系の焼成(7.5YR8/3)となっており、色調が異なる。色調が異なる範囲は、全周せずにはっきりしている部分としない部分が見受けられた。底部外面と内面の底部から胴部中位にかけて黒斑がみられる。

下巻 大形の甕で砲弾型の器形である。口縁部は水平面を持ち外側に傾く。内側、外側とも端部に面を持つ。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部から貼り付け粘土を充填して成形するが、貼り付け部分が厚い。胴部中位に一見M字状と見える2条の三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は6~7cmである。口径70.4cm、器高110cm、底径12.2cmを測る。内面はハケメ、外面は板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く4mm以下の砂粒を含む。色調は白色系と赤色系の異種胎土を用いており、はっきりと焼成色調が異なる部分がみられた。上位突帯部分と口縁部は2.5YR8/2灰白色で、下位突帯とそのほかは5YR6/8橙色を呈す。焼成は良好である。黒斑は底部付近にみられるほかは、胴部中位に小さい黒斑や薄い黒斑がみられる程度で非常に焼成が良い。

13号甕棺墓 (第3・10図 図版5)

調査区南西側、標高36.1mで検出した。調査区を拡張して調査した。南側は大きく削平を受けている。33号甕棺墓と墓壙底で一部切り合う。墓壙は2段掘り、一次墓壙の検出規模は200×104cm以上の方形で、深さは130cmである。東側の二次墓壙は、平面楕円形形状で132×88cm、深さ20cmの規模である。二次墓壙は緩

ST12



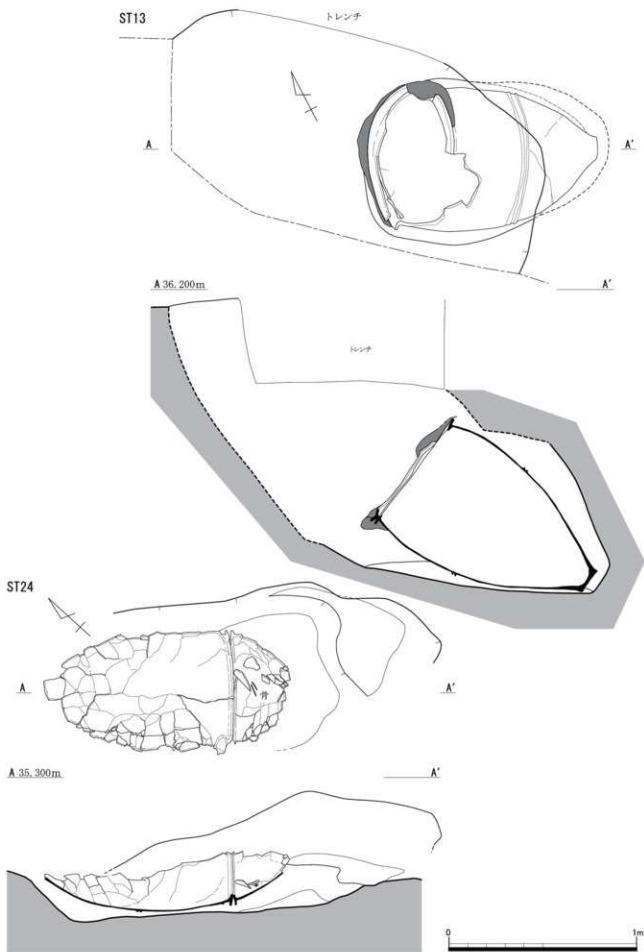
第9図 12号墓棺墓 実測図 (s=1/20)

やかに下がり、南東壁を本来は70cm程掘り込んでいと考えられる。削平を大きく受けており、上甕はかろうじて合口付近で残存していた。接口式成人棺で、合口部の目貼り粘土は上面から側面、下部にまで行き渡る。墓棺の主軸はN-61°-Wで、埋地角度は32°である。人骨が一部遺存していた。

甕棺 (第24図 図版17)

上甕 大形の鉢である。底部からラッパ状に開く器形で、口縁部は外側に折れて平坦面を持っている。内側への突出はない。体部中位を一部欠損する。口径72.4cm、器高36.1cm、底径11.8cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。体部外面上半に黒斑を有す。

下甕 大形の甕で、胴部上位で少し内傾気味に立ち上がる。口縁部は水平面を持ち内側に傾く。内側端部に面を持ち、外側端部は丸みを帯びた断面三角形状である。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部から



第10図 13・24号喪棺墓 実測図 (s=1/20)

貼り付け粘土を充填して成形するが、貼り付け部分が分厚い。胴部中央に一見M字状と見える2条の突出度の高い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は7~8cmである。口径74cm、器高109.8cm、底径13.15cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ後板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。底部付近の黒斑と胴部中下位に横に長い楕円形の黒斑が認められる。

14号甕棺墓 (第3・11図 図版5)

調査区北西側、標高36.8mで検出した。墓壇上部は大きく削平を受けている。4号土坑・8号甕棺墓に北東部を一部切られている。墓壇の検出規模は200×134cmの隅丸長方形を呈し、深さは82cmである。

甕棺の上部が破損して内部に土が流入した土層堆積状況を観察できた。北側で確認出来る黄褐色砂や白色砂、赤褐色粘質土とその上に堆積する黄褐色粘質土主体の層がみられる。甕棺破損後に落ち込んだとみられるが、7号甕棺や10号甕棺墓、16号甕棺墓の堆積状況と比べて埋め土の単位が大きい。接口式成人棺で、甕の上半を打ち欠いた上甕とした甕口縁部が接しているが、北西側では、甕口縁部付近の破片、おそらくは上甕の上半部の破片を合口部分に外側からかぶせている。これは合わせ口部分の下部全体には及ばず、北西側の部分的なものである。上半部は破損しているため不明ではあるが、接合資料を見る限り、上部全域を覆うものでもなく、北西側の側面を中心に補強するものであるようだ。墓壇底は広く水平になっており、底から一段上がって、北東壁を36cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-34°-Eで、埋地角度は2°である。人骨の一部が遺存している。

甕棺 (第25図 図版18)

上甕 大形の甕の口縁部~胴部上位を打ち欠いて上甕として使用している。胴部下位に一見M字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は6cm前後である。残存高66.2cm、底径11.4cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ・ナデが確認できる。胎土はやや細かく1mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄色を呈し、焼成はやや軟質である。胴部下位に縦方向に長方形の黒斑を有す。

中甕 大形の甕の口縁部、約1/4周分の残存である。口縁部は水平面を持ち、内傾する擬口縁上部に板状の粘土をのせて、外側から粘土を充填し貼り付けている。口縁下には断面三角形の突帯が巡っている。復元口径55.0cm、残存高34.0cmである。調整は器表面が著しく磨滅しており不明である。胎土はやや細かく1mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄色を呈し、焼成はやや軟質である。やや広い範囲のベタツとした黒斑を有す。復元(残存)箇所の違いで径の上甕とはやや異なるが色調や器表の摩耗具合は上甕と似通っている。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。胴部上位から口縁部にかけてはやや内傾気味に立ち上がる。口縁部は断面丁字状を呈し、内側端部に丸みを帯びた面、外側端部はしっかりした面を持つ。擬口縁上部に板状の粘土をのせて両側下部に貼り付け粘土を充填して成形する。口縁下には断面三角形の突帯が巡る。胴部下位に一見M字状と見える2条の三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は8~10cmである。口径64.2cm、器高102.0cm、底径11.2cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ後板状工具ナデがみられる。ストロークが長めの調整である。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄色を呈し、焼成は良好である。胴部上位に2点支持黒斑が薄く残り、その下位中央付近に部分的に接地面黒斑が認められる。

15号甕棺墓 (第3・5図 図版7)

調査区南西端、標高35.7mで検出した。墓壇上部は削平を受ける。32号甕棺墓の東側上位に位置する。墓壇の検出規模は90×60cmの楕円形を呈し、深さは36cmである。接口式小児棺で、墓壇底は水平で、南東壁で8cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-53°-Wで、埋地角度は8°である。

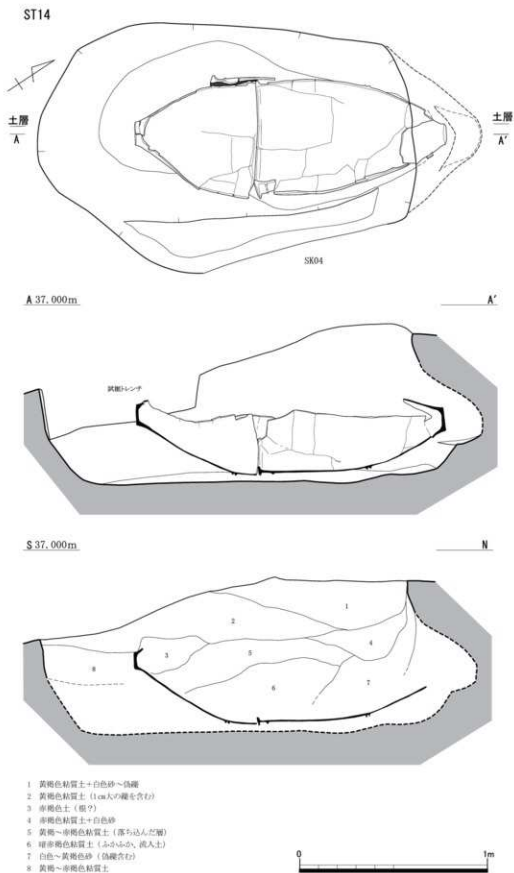
甕棺 (第32図 図版21)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に小さく突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径33.2cm、器高38.6cm、底径8.1cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄橙~ぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面下半に黒色付着物あり。底部外面に黒斑を有す。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に細く突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径32.5cm、器高37.7cm、底径8.1cmを測る。内面はナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。底部外面に黒斑を有す。

16号甕棺墓 (第3・13図 図版18)

調査区北西側、標高36.9mで検出した。墓壇の南側は一部削平を受けている。墓壇は2段掘りである。1次墓壇は隅丸方形を呈し、検出規模は196×170cm、深さは最大で120cmである。北西側の二次墓壇は、平面長楕円形で176×90cm、深さ32cmの規模である。二次墓壇は中央が深く、甕棺の形状に沿っており、北西壁を60cm程掘り込んでいる。1次墓壇では大小のテラス面を複数持っており、階段状となっている。この部分が墓壇掘削時、甕棺挿入時の作業および入棺時の儀礼スペースと考えられる。土層堆積状況は甕棺の上位に淡褐色シルト~砂質土がのっている。その後も、何段階かに分かれて砂層主体の堆積がみられ、一気に埋めたものではないことが看取できる。16号甕棺墓では、淡褐色~淡黄褐色の砂質系土の埋土が連続する。その砂質系土に含まれる赤褐色粘質土ブロックの濃淡で幾重にも積層されている。甕棺部付近やその上位には砂



第11図 14号甕棺墓 実測図 (s=1/20)

質系土がみられ、1次墓壇や墓壇上部を礫や赤褐色粘質土が多く混じる層が堆積している。接口式成人棺で、合口部の下部から側面、側面から上面にかけて黄褐色粘質土で目貼りをしている。16号甕棺は2次墓壇自体が甕棺形状に合わせて掘られており、甕棺と墓壇底の空間は比較的少ないが、下部でも粘土が丁寧に充填されている。なお、合口部の北東部分では、甕棺の口縁部形状に合わせて地山を削り出している状況も見られ

た。壘棺の主軸はN-48°-Wで、埋地角度は水平(0°)である。全身骨が良好な状態で遺存していた。

壘棺(第24図 図版18)

上壘 大形の鉢である。口縁部は平坦で外側よりも内側に発達している。肥厚する擬口縁の上部に板状の粘土を載せて貼り付け口縁部を成形する。口縁下には断面三角形の突帯を巡らす。口縁部の一部を欠損する。口径68.5cm、器高47.1cm、底径10.8cmである。内外面とも板状工具ナデが確認できる。胎土は粗く4mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はよい黄橙色を呈し、焼成は良好である。内面に大きく黒斑を有す。底部外面には沈線1条およびスサヤモミ圧痕数か所が確認できる。

下壘 大形の壘で、砲弾型の器形である。口縁部は水平面を持ち、内側端部、外側端部ともに面を持っている。内傾する擬口縁部の粘土をのせて外側下部に貼り付け粘土を充填して成形し、肥厚する。胴部下にM字突帯が巡る。粘土帯の積み幅は下位では7cm前後、上位では5cm前後である。口径68.6cm、器高90.9cm、底径11.6cmを測る。内面は板状工具ナデ、工具痕、外面は板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を含む。色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。胴部上位にかなり離れて2点支持黒斑、その下位中央付近に部分的に接地面黒斑が認められる。

17号壘棺墓(第3・7図 図版7)

調査区南西端、標高35.8mで検出した。墓壘上部は削平を受ける。12号壘棺墓と19号壘棺墓を切る。墓壘の検出規模は54×42cm以上の楕円形を呈し、深さは52cmである。接口式小児棺で、墓壘を斜め下方に掘り下げた下壘を挿入する。樹木による攪乱が著しく壘棺が破損し、原位置を保っていない資料が多いが、壘棺の主軸はN-35°-W程度、埋地角度は30°程度であるだろう。

壘棺(第32図 図版21)

上壘 小形の壘である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。底部のみを欠き、口径30.15cm、残存高34.1cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。口縁部から胴部上半は10YR8/3浅黄橙～10YR7/4にぶい黄橙、胴部下半は2.5YR6/6橙～7.5YR6/4にぶい橙色で焼成色調が異なっており、異種胎土を用いていると考えられる。内面は外面に比べて色調の違いがはっきりしている。色調の境は粘土の接合境にもあたる。色調の異なる箇所の上で取縮率が大きく異なる傾向もなく、比較的近い場所での採取粘土の違いかと思われる。

下壘 小形の壘である。口縁部は内側に上方へ短く突出した逆L字口縁でやや外側に垂れ下がる。ほぼ完形で口径29.85cm、器高36.75cm、復原底径8.6cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土は粗く4mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。底部外面にモミ圧痕を有す。口縁部は10YR8/4浅黄橙、胴部は7.5YR6/4にぶい橙色～5YR6/6橙で焼成色調が異なっており、異種胎土を用いていると考えられる。内外面ともに色調の違いがはっきりしている。色調の境は粘土の接合境にもあたる。色調の異なる箇所の上で取縮率が大きく異なる傾向もなく、比較的近い場所での採取粘土の違いかと思われる。

上壘・下壘ともに、異種胎土を用いており、意図的なものの可能性も十分考えられる。

18号壘棺墓(第3・12図 図版7)

調査区北西側、標高36.6mで検出した。墓壘部分が段造成によって崖面状になっており、崖面での土層観察を行った。11号壘棺墓の東側に位置する。墓壘は2段彫りと考えられ、墓壘底までの深さは58cmである。接口式小児棺と考えられ、墓壘を斜め下方に掘り下げ、南西方向に楕円を掘り込み、下壘を挿入する。埋置角度は水平に近いだろう。土層堆積状況では、壘棺下層に淡褐色砂質土の置土を行い、壘棺を設置し、壘棺の上には淡赤褐色砂質土が分布する。その後、一次墓壘側は大きな単位で砂質土と粘質土を交互に充填している。壘棺上部の1層は地山の崩落層であるだろう。

壘棺(第33図 図版22)

上壘 小形の壘である。口縁部は内側に小さく突出した逆L字口縁である。口縁部と胴部の一部を欠く。復元口径31.4cm、器高37.8cm、底径8.7cmを測る。胴部内面はナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はよい黄橙色を呈し、焼成は良好である。体部外面下半に黒色付着物、底部外面にモミ・種子圧痕あり。体部内面下半にうすいコゲ、外面中位～上位に煤が付着している。

下壘 中形の壘である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁で、口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。口縁部、胴部、底部の一部を欠損する。口径37.35cm、器高54.9cm、底径9.7cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はよい黄橙色を呈し、焼成は良好である。体部内面下位にコゲ、外面中位にスス付着が顕著である。口径と底径に対して器高が高い。

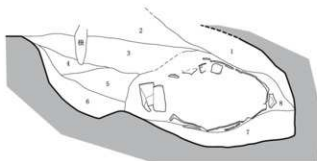
19号壘棺墓(第3・14図 図版9)

調査区南西端、標高35.7mで検出した。墓壘上位には大きな樹木痕のような土坑がみられる。17号壘棺墓、12号壘棺墓、15号壘棺墓、22号壘棺墓に切られ、31号壘棺墓、32号壘棺墓を切る。墓壘は2段掘りである。1次墓壘は隅丸方形を呈し、検出規模は152×120cm以上、深さは94cm程度である。1次墓壘から2次墓壘へのつながりは緩やかな傾斜を持ち段差がほとんどない。北東側の二次墓壘は、平面長楕円形で162×80cm、深さ36cmの規模である。二次墓壘も1次墓壘から続く緩やかな傾斜を保って下がり、底の部分のみ若干水平となる。北東壁を70cm程掘り込んでいる。土層堆積状況は壘棺の上位にまず砂質土のり、1次墓壘側では

ST18

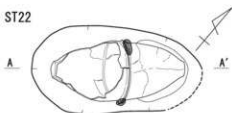
NW 36, 900m

SE

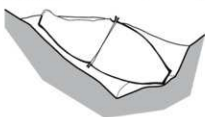


- 1 偽縄目を多く含む層
- 2 赤褐色粘質土 (0mm以下の砂粒を含む)
- 3 白灰褐色砂質土 (1mm以下の砂粒を含む, 1cm大の縄を含む)
- 4 赤褐色粘質土 (1mm以下の砂粒を含む)
- 5 赤褐色粘質土 (2~3mm大の砂粒を多く含む)
- 6 赤褐色粘質土 (1mm以下の砂粒を含む, 1cm大の縄を含む)
- 7 赤褐色砂質土 (0~2mm大の砂粒を含む)
- 8 赤赤褐色砂質土 (やや粘質あり, 1mm以下の砂粒を含む)

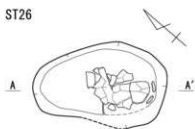
ST22



A 35, 500m



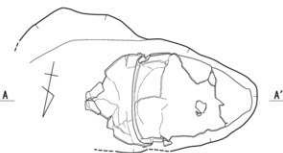
ST26



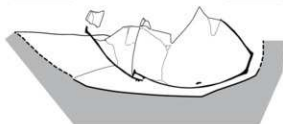
A 35, 200m



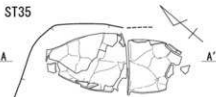
ST36



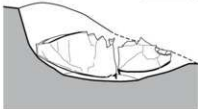
A 37, 100m



ST35

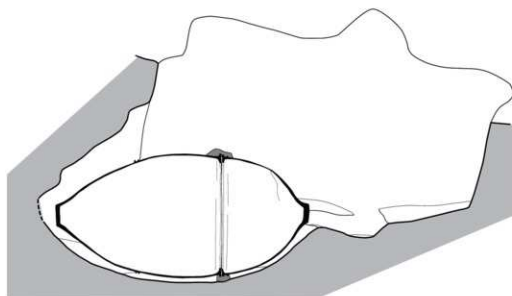
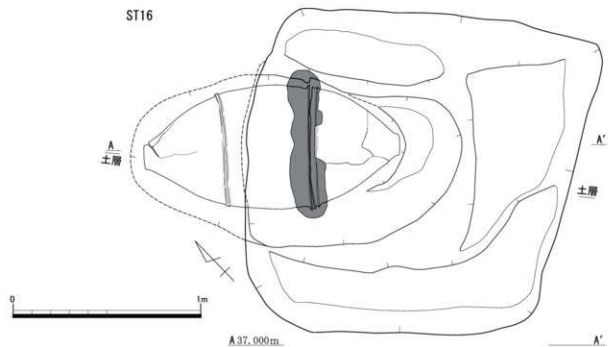


A 37, 200m

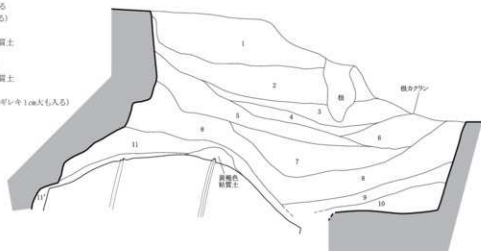


第12図 18・22・26・35・36号壺棺墓 実測図 (s=1/20)

粘質土が多い傾向がみられる。接口式成人棺で、合口部の下部から側面、側面から上面にかけて暗赤褐色粘質土で目貼りをする。壺棺の主軸はN-57°-Eで、埋地角度は29°である。全身骨が遺存する。頭蓋骨には赤色顔料が沈着していた。



- 1 洗練砂質土 (1cm大のレキを多く含む)
- 2 洗黄褐色砂質土 (赤褐色粘土ブロックまじり)
- 3 赤褐色粘質土ブロック多く入る
- 4 洗練砂質土 (1cmのレキ多入る)
- 5 洗練砂質土 (0~2mm)
- 6 赤褐色粘質土が多く入る、砂質土
- 7 やや細い、洗練砂質土
- 8 洗黄褐色砂質土 (0~2mm)
- 9 赤褐色粘質土が多く入る、砂質土
- 10 バイワン土の成入土
- 11 洗黄褐色砂質土 (0~2mm大、レキ1cm大も入る)
- 12 洗黄褐色砂質土、シスト質



第13図 16号墓棺墓 実測図 (s=1/20)

甕棺 (第24図 図版18)

上甕 大形の鉢である。口縁部は平坦で内側に短く突出するが外側への張り出しが顕著である。ほぼ完形で、口径61.7cm、器高41.5cm、底径12.9cmである。内外面とも板状工具ナデが確認できる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は灰黄褐色～浅黄色を呈し、焼成は良好である。底部外面から口縁部に至る幅のある黒斑、反対側には内側が灰色、縁部分のはっきりした黒褐色を呈す円形黒斑が認められた。

下甕 大形の甕で、長胴である。歪みがあり上面は傾く。口縁部は中央でやや膨らみのある水平面を持ち、内側端部は短くつまみ出し、外側端部は分厚く広い面を持っている。胴部下位に突出度の高い断面三角形突帯が2条巡る。粘土帯の積み幅は10cm前後である。口径65.1cm、器高113.6cm、底径12.4cmを測る。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土は粗く4mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部上位にかなり離れて楕円形の2点支持黒斑、その底部付近に部分的に接地面黒斑が認められる。

20号甕棺墓 (第3・7図 図版9)

調査区中央、標高36.8mで検出した。大きく削平を受けた箇所下層の一部が残存していた。9号土坑を切っている。墓壇の検出規模は176×108cmの楕円形を呈し、深さは40cmである。成人棺下甕の一部のみが残存していた。甕棺の主軸はN-69°-Wで、埋地角度はほぼ水平かと考えられる。

甕棺 (第25図 図版9)

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。底部を欠き、口縁部から胴部下半まで約1/4周の残存である。口縁部はT字状を呈し、内側への発達がみられ、上面はやや外側に傾く。内側端部、外側端部ともに面を持つ。擬口縁上部に板状の粘土をのせて下部に貼り付け粘土を充填して成形し、肥厚する。胴部下位に断面三角形突帯が2条巡る。口径60.4cm、残存高72.7cmである。内面には板状工具ナデ、外面にハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒を含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

21号甕棺墓 (欠番)

当初、甕棺墓と考えて掘削したが残りが悪く甕棺墓か不明。土坑扱いとするために欠番とした。

22号甕棺墓 (第3・12図 図版9)

調査区南西端、標高35.4mで検出した。上甕は根による攪乱で壊されている。19号甕棺墓・32号甕棺墓を切っている。墓壇の検出規模は90×48cmの長楕円形を呈し、深さは44cmである。小形甕を利用した接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げて下甕を挿入する。合口部の側面に暗赤褐色粘質土で目貼りをしている。甕棺の主軸はN-49°-Eで、埋地角度は26°である。人骨は遺存していない。

甕棺 (第33図 図版9)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径34.65cm、器高36.4cm、底径7.8cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はよい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部外面に黒斑を有す。口縁部上面に短い1条のヘラ記号様の工具圧痕がある。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径32.95cm、器高37.95cm、底径8.55cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。底部内面に黒斑がみられる。口縁部上面に短い3条のヘラ記号様の工具圧痕がある。

23号甕棺墓 (第3・15図 図版10)

調査区南東側、標高37.0mで検出した。墓壇上位に根攪乱がある。墓壇は2段掘りである。1次墓壇は楕円形を呈し、検出規模は186×124cm、深さは120cmである。北側の二次墓壇は、平面長円形で92×76cm、深さ18cmの規模である。二次墓壇は緩やかに下がり北壁を40cm程掘り込んでいる。土層堆積状況は粘質土が多く堆積し、赤褐色粘土が互層状に入る。接口式成人棺で、上甕は甕の上半を打ち欠いている。合口部の側面下部から上面にかけて粘質土で目貼りをしている。下部では赤褐色系粘質土が用いられ、上面では黄～淡褐色粘質土が用いられる。甕棺の主軸はN-9°-Wで、埋地角度は33°である。全身骨が遺存していた。

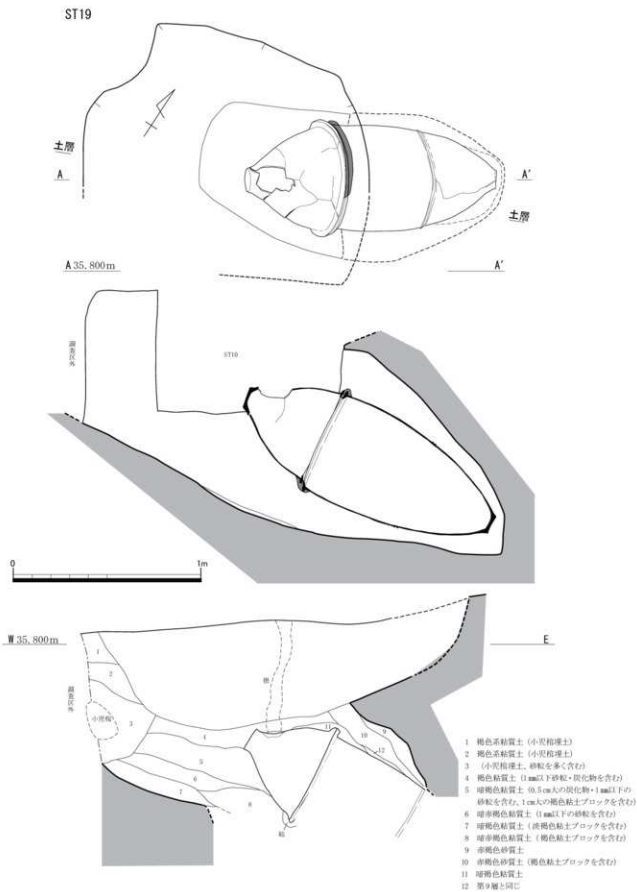
甕棺 (第25図 図版9・10)

上甕 大形の甕の口縁部～胴部上位を打ち欠いて上甕として使用している。器高67.0cm、復元底径11.3cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面中位から下位に縦に長い楕円形の黒斑を有す。

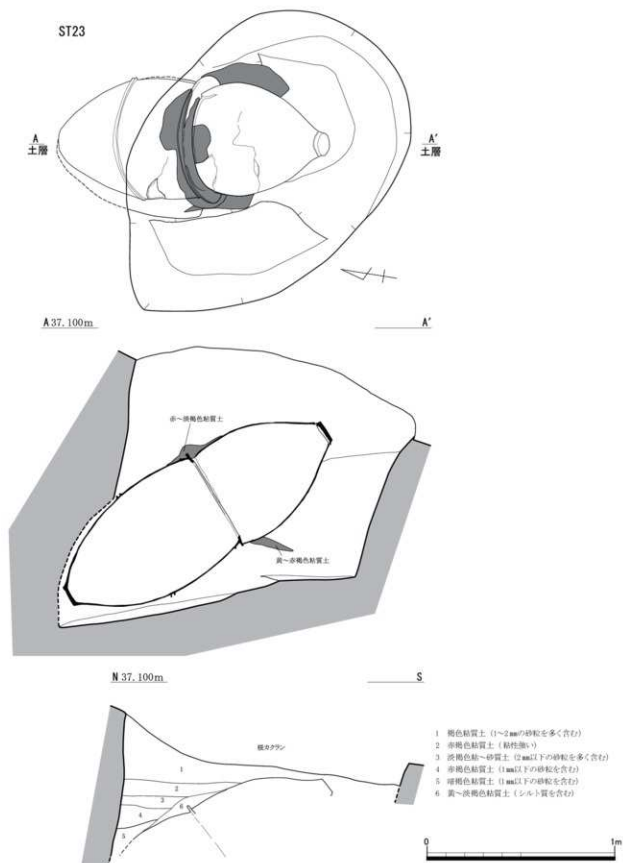
下甕 大形の甕で、胴部中位にやや膨らみを持つ器形である。口縁部は断面T字状を呈し、内側端部、外側ともにしっかりした面を有す。内傾する擬口縁の外側に粘土を貼り付け、外側に傾く広い平坦面を削出する。口縁下に断面三角形の突帯、そして胴部中下位に突出度の高い2条の突帯が巡る。粘土帯の積み幅は8cm前後である。胴部の一部を欠くが、口径72.6cm、器高106.2cm、底径14.8cmである。内面は器表面が磨減しており不明。外面は板状ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒を少量含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部中位に2点支持黒斑の片方と底部に黒斑を有している。

24号甕棺墓 (第3・10図 図版10)

調査区南東側、標高35.2mで検出した。大きく削平を受けている箇所、甕棺の上半まで削平されている。



第14図 19号甕棺墓 実測図 (s=1/20)



第15図 23号甕棺墓 実測図 (s=1/20)

墓壇の検出規模は210×88cm程度の長円形を呈し、深さは60cmである。接口式成人棺で、墓壇底はほぼ水平になっており、北東側ではテラス部分が確認できる。甕棺の主軸はN-42°-Wで、埋地角度は4°程度と思われる。人骨がわずかに遺存していた。

甕棺 (第26図 図版19)

上甕 大形の甕である。口縁部は断面T字状を呈し、やや外側に傾く。擬口縁上部に板状の粘土を載せて貼り付けた成形である。両端部は丸みを帯びている。口縁部から体部は約1/4の残存で、底部を欠く。復原口径68.2cm、残存高37.3cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はややく粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

下甕 大形の甕で、胴部中位に最大径がありふくらみのある器形である。口縁部は断面T字状を呈し、内側端部は丸みを帯びた面、外側はしっかりとした面を有す。肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り付けて水平面をつくっている。口縁下に断面三角形の突帯、そして胴部最大径の下位に見えM字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は8cm前後である。底部を欠き、口縁部から胴部は1/2の残存である。復原口径63.4cm、残存高95.4cmである。器表面が荒れているが、内面はナデもしくは板状ナデ、外面は板状ナデがみられる。胎土は比較的精良で2mm以下の砂粒を少量含む。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。黒色顔料が点的に残っており、黒塗りと考えられる。黒斑は胴部中央に広めの楕円形接地黒斑があるが中央部分は被熱痕があり抜けている。

25号甕棺墓 (第3・16図 図版10)

調査区南東側、標高35.2mで検出した。大きく削平を受ける箇所、甕棺の上半まで削平されている。1号溝を切る。2段掘りと考えられる。1次墓壇は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。2次墓壇は140×86cm程度の長円形を呈し、深さは8cmである。接口式成人棺で、墓壇底は甕棺の形状に合う傾きとなっている。甕棺の主軸はN-36°-Eで、埋地角度は14°程度と思われる。人骨の一部が遺存していた。

甕棺 (第26図 図版19)

上甕 口縁部は断面T字形の口縁部で、内側、外側とも端部に面を持つ。口縁部の成形は肥厚する擬口縁の上部に板状の粘土をのせて貼り付ける。口縁部から体部上位を一部欠き、復原口径61.1cm、器高42.2cm、底径9.85cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ後板状工具ナデがみられる。胎土はややく粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。口縁部上部に細い黒斑が3か所みられた。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。口縁部は水平面を持ち、やや外側に傾く。内側端部は丸みを帯びた面、外側はしっかりとした面を有す。肥厚する擬口縁の上部に板状の粘土をのせて、両側下部に貼り付け粘土を充填して肥厚する。口縁下に断面三角形の突帯、そして胴部下位に見えM字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は8cm前後である。底部を欠き、口縁部から胴部は1/2の残存である。復原口径62.6cm、残存高93.0cmである。内面は丁寧なナデ、外面は板状ナデがみられる。胎土はややく粗く、3mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部中位に2点支持の黒斑の片方、反対側の胴部上位から中位に広く広がる黒斑や緋色の箇所がみられる。

26号甕棺墓 (第3・12図)

調査区南東側、標高35.1mで検出した。大きく削平を受けている箇所、甕棺(下甕)の一部がころうじて残存していた。上半まで削平されている。28号甕棺墓の北西側をわずかに切っている。墓壇の検出規模は72×46cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。小児棺で、墓壇底はほぼ水平である。甕棺の主軸はN-40°-W程度で、埋地角度はほぼ水平と思われる。

甕棺 (第32図)

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に広がる逆L字口縁である。約1/6の残存で、残存高32.2cmである。外面はハケメがみられる。胎土はややく粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。

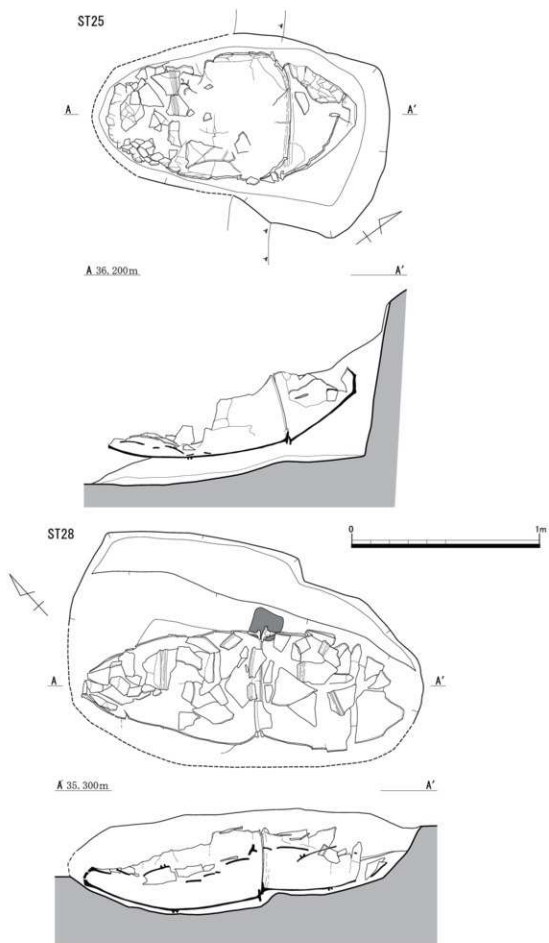
27号甕棺墓 (第3・17図 図版10)

調査区南東側、標高35.2mで検出した。大きく削平を受けている箇所、甕棺の上半まで削平されている。2段掘りであるが、削平のため1次墓壇の南西側がなくなっている。1次墓壇は116×106cm以上の方角を呈し、深さは66cmである。2次墓壇は154×90cm程度の隅丸長方形を呈し、深さは6cm程度残存している。北東壁を54cm程度掘り込んでいる。接口式成人棺で、墓壇底は甕棺の形状に合う傾きとなっている。甕棺の主軸はN-69°-Eで、埋地角度は-6°程度と思われる。人骨の一部が遺存していた。

甕棺 (第17図 図版10)

上甕 口縁部は断面T字形の口縁部で、外側に傾く。内側は丸みを帯びた端部で外側は端部に面を持っている。口縁部の成形は肥厚する擬口縁の上部に板状の粘土をのせて貼り付けている。口縁部から体部下位の一部、底部を欠く。復原口径65.4cm、残存高18.6cmである。内外面とも板状工具ナデがみられる。胎土はややく粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。口縁部は水平面を持ち、やや外側に傾く。内側端部は丸みを帯びた面、外側はしっかりとした面を有す。擬口縁の上部に板状の粘土をのせて、両側下部に貼り付け粘土を充



第16图 25·28号甕棺墓 实测图 (s=1/20)

墳して肥厚する。胴部下位に一見M字状と見える2条の三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は7~8cm前後である。口径67.2cm、器高101cmである。内面は板状工具ナデ、外面は磨滅のためわからないが、底部付近にハケメ、そのほかはナデかと思われる。胎土は比較的精良で、2mm以下の砂粒を少量含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部中に大きい長方形の黒斑、反対側の胴部上位にも縦方向に広がる黒斑を有す。

28号甕棺墓 (第3・16図 図版11)

調査区南東隅、標高35.2mで検出した。大きく削平を受けている箇所、甕棺も破損している。26号甕棺に北東側を一部切られている。墓壇は190×120cm程度の長楕円形を呈し、深さは52cmである。北東側には長細いテラス面がみられる。接口式成人棺で、墓壇底は甕棺の形状に合う傾きとなっている。甕棺の主軸はN-46°-Wで、埋地角度は水平(0°)と思われる。

甕棺 (第27図 図版11)

上甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。胴部上位から口縁部にかけてはやや内傾する。口縁部は水平面を持ち、やや外側に傾く。内側端部は先が細くなり、外側は丸みを帯びた面を有す。外側にL字状に折れ曲がる口縁に、内側に粘土を貼り足して水平面をつくっている。胴部中に一見M字状と見える2条の低い三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は7cm前後である。底部を欠き、口縁部から胴部も一部欠く資料である。口径66.0cm、残存高61.4cmである。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部上位に2点支持の黒斑、胴部下位に接地面黒斑がみられる。部分的に黒色塗布物や光沢が残っており、黒塗りである。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。口縁部付近ではやや内傾する。口縁部はT字状を呈し、水平面はやや外側に傾く。内側端部は丸みを帯びた面、外側は狭い面を有す。擬口縁の両側に粘土を貼り足して水平面をつくる。胴部下位にM字状の低い突帯が巡る。粘土帯の積み幅は下半では7~8cm前後、上半では6cm単位である。口径65.0cm、器高92.3cm、底径12.9cmである。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土は比較的精良で、2mm以下の砂粒を少量含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。胴部中に2点支持の楕円形黒斑、底部に接地面黒斑がみられる。その反対側の胴部上位には被覆部分の薄い黒斑がみられる。

29号甕棺墓 (第3・17図 図版11)

調査区南東隅、標高35.6mで検出した。大きく削平を受けている箇所、甕棺も破損している。28号甕棺と北東側ではほぼ接している。墓壇は226×104cm程度の長円形を呈し、深さは56cmである。北東側でテラス面を持っている。接口式成人棺で、墓壇底は甕棺の形状に合う傾きとなっている。甕棺の主軸はN-48°-Wで、埋地角度は2°程度と思われる。人骨は遺存していない。

甕棺 (第27図 図版19)

上甕 口縁部は断面T字形を呈し、内側は丸みを帯びた端部で、外側は端部に面を持っている。口縁部の成形は肥厚する擬口縁の両側にそれぞれ粘土を貼り付けて平坦面をつくっている。口縁部の一部を欠き、口径66.7cm、器高41.7cm、底径10.4cmを測る。内外面とも板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。とくに口縁部付近に黒色塗布物が残り、黒塗りである。

下甕 大形の甕で、長胴の器形である。胴部下位の突帯部分からふくらみをもって立ち上がる。口縁部は断面T字形を呈し、やや外側に傾く。内側端部は丸みを帯びた面、外側は細い面を有す。肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り足して水平面をつくっている。胴部下位に一見M字状と見える2条の三角突帯が巡る。粘土帯の積み幅は10cm前後である。口径60.6cm、器高106.2cmである。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、3mm以下の砂粒を含む。色調は明黄褐色を呈するがやや黒ずみ、黒塗りの影響かと考えられる。焼成は、外側は良好で、内側はやや不良である。胴部中下位に2点支持の黒斑、底部に接地面黒斑がみられる。側面や上部にも薄い黒斑が分布する。

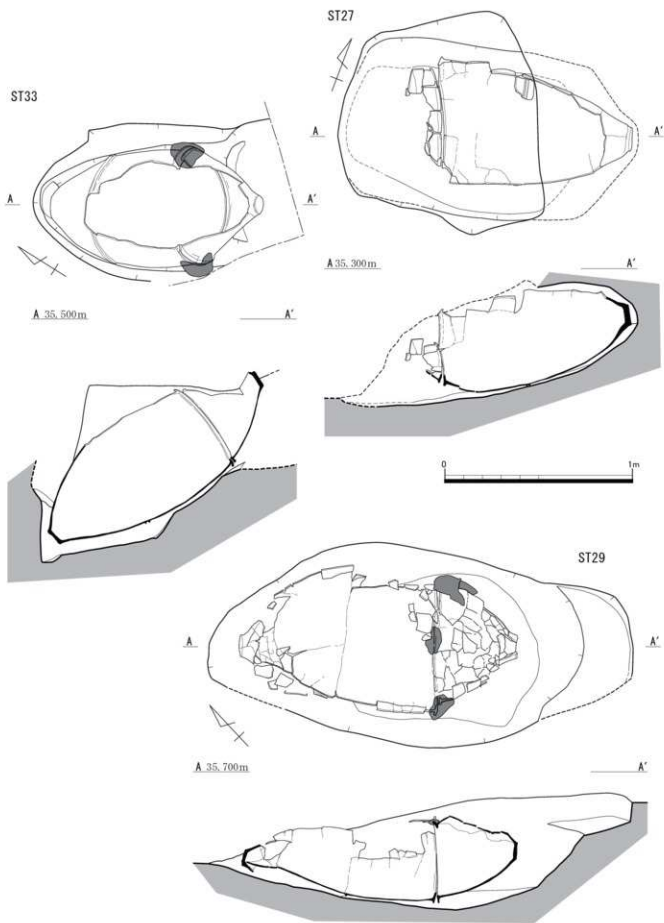
30号甕棺墓 (第3・18図 図版11)

調査区南東隅、標高35.4mで検出した。大きく削平を受けて、甕棺も破損している。29号甕棺と北側で接し切られる。墓壇は180×90cm程度の長円形を呈し、深さは56cm程度である。東側でテラス面を持つ。接口式成人棺で、墓壇底は甕棺の形状に合う傾きとなっている。甕棺の主軸はN-73°-Wで、埋地角度は水平に近いと思われる。人骨がわずかに遺存していた。

甕棺 (第27図 図版19)

上甕 口縁部は断面T字形を呈し、内側は丸みを帯びた端部で発達し、外側への張り出しは弱く、端部は面を持っている。口縁部の成形は肥厚する擬口縁の上部に板状の粘土をのせて貼り付けている。口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。口縁部から体部の多くと底部を欠き、復原口径64.1cm、残存高27.5cmである。内外面とも板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面に黒斑を有す。

下甕 大形の甕で長胴の器形である。胴部下位の2条突帯部分からふくらみをもって立ち上がる。口縁部は断面T字形を呈する。内側端部は丸みを帯び、外側は面を有す。肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り足



第17图 27·29·33号粟棺墓 实测图 (s=1/20)

して水平面をつくる。粘土帯の積み幅は7cm前後である。口縁部～胴部は1/4の残存で、突帯以下は残存する。復元口径60.0cm、器高102.5cmである。磨滅により調整は不明。胎土はやや粗く、3mm以下の砂粒を含む。色調はぶい黄褐色で、焼成は良好である。胴部上位に2点支持の黒斑、胴部下位に接地面黒斑がみられる。

31号甕棺墓 (第3・19回 図版11・12)

調査区南西端、標高35.4mで検出した。一部調査区を拡張した。墓壇上部で根拠乱がみられ、12号甕棺墓、40号甕棺墓、12号甕棺墓に切られ、34号甕棺墓を切る。墓壇は2段掘りである。1次墓壇は隅丸方形状と考えられ、検出規模は130×110cm程度、標石からの深さは最大で120cmである。平面図では南側に大きいテラス部分を図示しているが、土層断面図でみるように、細かい数段の段差がみられる。北側の二次墓壇は、平面長円形で170×100cm以上、深さ18cmの規模である。二次墓壇は中央が深く、甕棺の形状に沿っており、北西壁を60cm以上掘り込む。土層断面は調査区壁面に近く十分な角度で設定できている。堆積状況は甕棺の上位に淡赤褐色粘質シルトがのっている。1次墓壇の積土がよく観察できる断面となっているが、最深部の12層が甕棺を固定し、その後8～11層が堆積する。7層で広く埋めて水平を保った後、4～6層が堆積する。3層は特徴的な層で赤褐色粘質土と白砂の互層となっている。その後1・2層の水平堆積が行われ、標石をのせている。甕棺墓に伴う土段頭は1層からうかがえる層厚20cm程度のもの、もしくは当時は2層を含めての盛土であったのだろうか。接口式成人棺で、合口部の下部から側面、側面から上面にかけて赤褐色粘土で目貼りをする。甕棺の主軸はN-11°-Eで、埋地角度は-1°である。人骨が遺存していた。

甕棺 (第28回 図版19)

上甕 大形の鉢である。底部からラッパ状に開く器形で、口縁部は勳先状を呈し、歪みが著しい。肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り付けて平坦面をつくっている。ほぼ完形で、口径68.5cm、器高37.5cm、底径10.1cmである。内外面とも板状工具ナデが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。底部付近内外面に黒斑を有す。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形で高さがある。口縁部は水平面を持ち、やや外側に傾く。内側端部は細く丸みを帯び、外側端部はしっかりと面を有す。口縁部は顕著に肥厚する。胴部中下位に高さのある突帯が2条走る。粘土帯の積み幅は6～8cm前後である。口径77.3cm、器高117.1cm、底径14.2cmである。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。突帯下全体が広く黒斑となっており、反対側はやや薄い黒斑である。

32号甕棺墓 (第3・20回 図版12)

調査区南西端、標高35.0mで検出した。一部調査区を拡張した。墓壇上部で根拠乱がみられ、15号甕棺墓、19号甕棺墓、22号甕棺墓、37号甕棺墓に切られている。墓壇検出規模は100×92cm以上、深さは最大で138cmである。東壁へ52cmの掘り込みがあり、下甕を挿入する。なお、横穴部分は墓壇底から10cm程度上がった部分から掘り込みがみられる。堆積状況は甕棺の上位に淡赤褐色粘質土が広い範囲でみられる。その後数回に分けて粘質土の埋土が確認できる。接口式成人棺で、合口部の下部から側面、側面から上面にかけて赤褐色粘土で目貼りをする。甕棺の主軸はN-71°-Wで、埋地角度は6°である。人骨が遺存していた。

甕棺 (第28回 図版20)

上甕 大形の鉢である。口縁部は平坦で外側に発達し、内側に短く太く張り出す。口縁部の両側に粘土帯を貼り付けて成形する。体部を一部欠損し、口径64.6cm、器高36.6cm、底径10.25cmを測る。内面は板ナデ、外面はハケメ、口縁部上面はハケメが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁端部の一部とその反対の胴部にやや広め楕長円形の黒斑を有す。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。口縁部は断面T字状を呈し、やや外側に傾く。内側端部、外側端部ともに丸みを帯びた面を有す。胴部下位に三角形突帯が2条走る。粘土帯の積み幅は7～8cm前後である。口径67.2cm、器高106.0cm、底径13.4cmである。内外面ともに板状工具ナデがみられる。胎土は粗く、4mm以下の砂粒を多く含む。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。突帯付近に不整形に広がる黒斑と底部の黒斑があり接地面黒斑であろう。反対側の胴部上位には広い範囲で薄い黒斑がみられた。

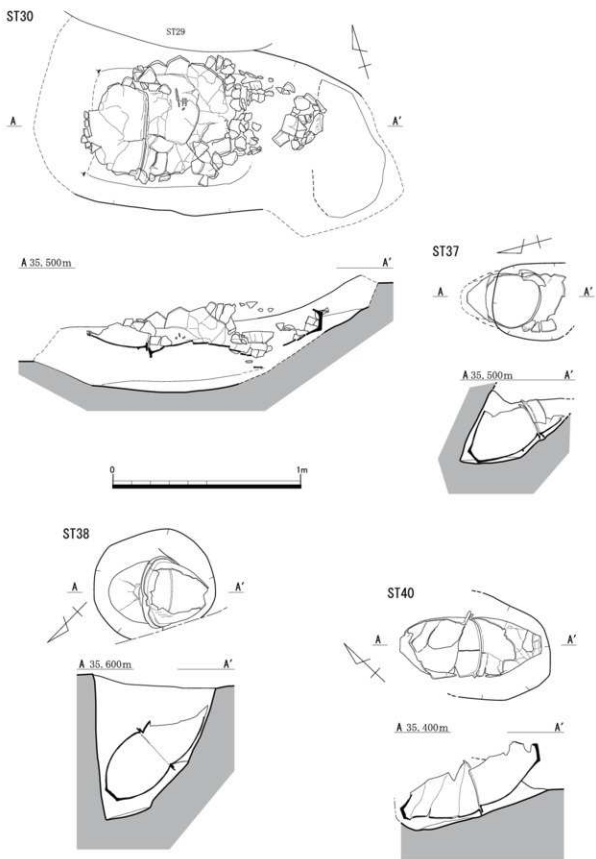
33号甕棺墓 (第3・17回 図版20)

調査区北西側、標高35.2mで検出した。調査区を拡張したが、工事掘削による崖面部分で十分な調査は出来ていない。甕棺墓上部が割れており、土砂が入り込んでいた。13号甕棺墓に近接する。墓壇の検出規模は140×84cmの楕円形を呈し、深さは96cmである。本来は2段掘りであり、1次墓壇が作業の安全上検出されていなかった。大形の甕と鉢を使用した接口式成人棺である。合口部の側面から上面にかけて黄褐色粘質土で目貼りをしている。甕棺の主軸はN-33°-Wで、埋地角度は38°である。全身骨が遺存していた。

甕棺 (第28回 図版20)

上甕 口縁部は断面T字形を呈し、内側により発達する。内側は丸みを帯びた端部で、外側は端部に面を持っている。ほぼ完形で、口径60.9cm、器高38.85cm、底径10.15cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部から体部にかけて横に広がる黒斑を有す。

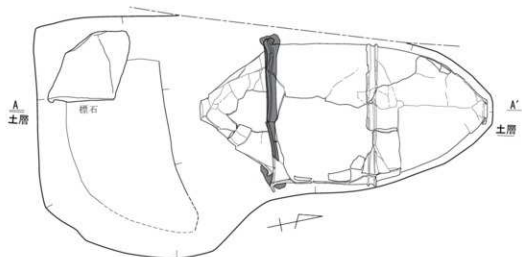
下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。口縁部は断面T字形を呈し、内側により発達する。内側端部は



第18図 30・37・38・40号妻棺墓 実測図 (s=1/20)

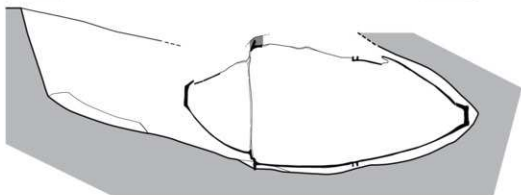
丸みを帯び、外側端部はしっかりした面を有す。擬口縁上部に板状の粘土をのせて、両側下部に貼り付け粘土を充填して成形している。胴部下位に三角形突帯が2条巡る。粘土帯の積み幅は7～8cm前後である。口

ST31

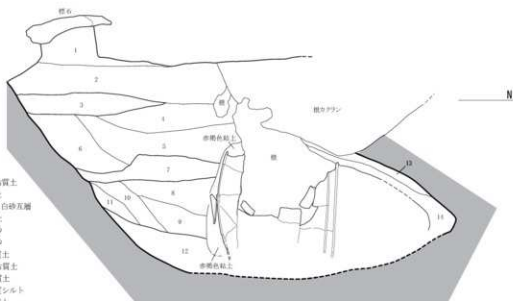


A 35.500m

A'

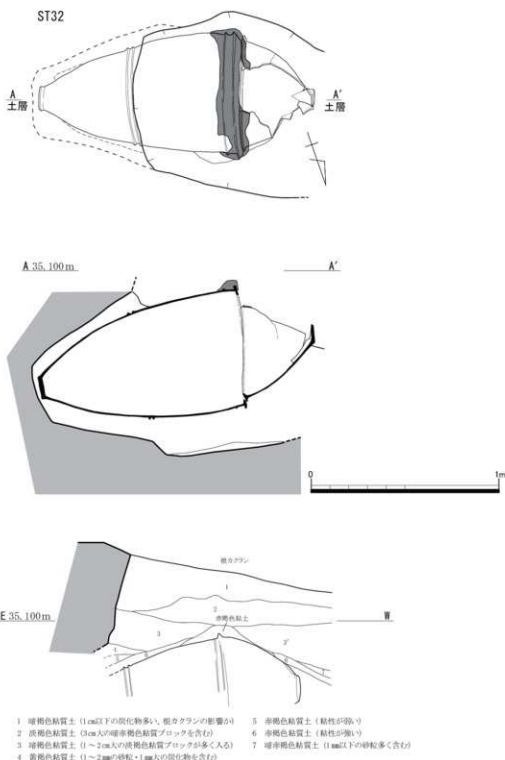


S 35.500m



- 1 緑赤褐色粘質土
- 2 褐色砂質土
- 3 赤褐色土と白砂互層
- 4 褐色砂質土
- 5 赤褐色粘砂
- 6 緑褐色粘砂
- 7 緑褐色粘質土
- 8 緑赤褐色粘質土
- 9 緑褐色粘質土
- 10 黄褐色粘質シルト
- 11 赤褐色粘質土
- 12 赤褐色粘質土
- 13 赤褐色粘質土 (1mm以下の砂を含む)
- 14 赤褐色粘質シルト (1mm以下の砂を含む)

第19図 31号壙棺墓 実測図 (s=1/20)



第20図 32号甕棺墓 実測図 (s=1/20)

径64.2cm、器高99.1cm、底径11.7cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ、板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。つくりや調整が少し雑である。黒色顔料が部分的に残っており、黒塗りである。胴部中位に2点支持の黒斑、底部に接地面黒斑があり、その反対側胴部上位に狭い範囲で被覆部分の黒斑がみられる。

34号甕棺墓 (第3・21図 図版13)

調査区北西側、標高34.9mで検出した。12号甕棺墓の下層から検出された。12号甕棺墓、31号甕棺墓、19号甕棺墓に切られている。2段掘りと考えられ、1次墓壇は南側にあったものと考えられる。2次墓壇の検出規模は110×82cmの楕円形を呈し、深さは68cmである。北側ではテラス面を数か所確認できる。

上甕は下甕内に転落しており、人骨自体もその衝撃で大きく動いている。接口式成人棺で、合口部の側面

から下部にかけて赤褐色粘質土で目貼りをしている。上面にも本来は目貼り粘土があったものと考えられる。甕棺の主軸はN-31°-Eで、埋地角度は54°である。非常に傾斜が強い。人骨が遺存していた。

29号甕棺 (第29図 図版20)

上甕 大形の鉢である。口縁部は平坦で外側に発達し、内側に短くつまみ出している。口縁部の外側に粘土を貼り足して平坦面を広くしている。ほぼ完形で、口径56.55cm、器高38.9cm、底径10.3cmを測る。内面は板ナデ、外面はハケメが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。体部外面に縦に長い黒斑を有す。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。胴部上位から口縁部にかけてはやや内傾する。口縁部は断面T字形を呈し、内側にやや発達している。内側端部、外側端部ともはしかりした面を有す。口縁部は擬口縁に板状の粘土をのせて、その外側に粘土を貼り足して水平をつくり、内側には貼り付け粘土を充填する。口縁部下に断面M字状の突帯を巡らす。胴部中下位に高さのある突帯が2条走る。粘土帯の積み幅は7cm前後である。口径66.8cm、器高101.1cm、底径11.0cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメ、板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調はぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。典型的な2点支持黒斑が確認できる。

35号甕棺墓 (第3・12図 図版13)

調査区中央、標高37.2mで検出した。墓壇上部は削平を受ける。墓壇の検出規模は92×40cm以上の楕円形状と考えられ、深さは42cmである。接口式小児棺で、墓壇底は中央が緩やかにくぼみ、甕棺の形状に沿う。甕棺の主軸はN-40°-Wで、埋地角度は水平(0°)である。

33号甕棺 (第33図 図版22)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。口縁部から胴部にかけて一部欠損し、口径30.3cm、器高38.65cm、復原底径8.3cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。底部にモミ・種子痕多数が確認できる。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側にやや突出した逆L字口縁である。口縁部から胴部の一部と底部を欠く。口径32.4cm、器高33.2cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土は粗く4mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

36号甕棺墓 (第3・12図)

調査区北西端、標高36.9mで検出した。調査区を拡張して調査した。付近には樹木根があり、苦労した。4号甕棺を切っている。墓壇の検出規模は130×56cmの楕円形を呈し、深さは42cmである。中形甕と壺を利用した覆口式中形棺である。壺の上半を打ち欠いて蓋としている。墓壇を斜め下方に掘り下げ、下甕を挿入していたと思われる。甕棺の主軸はN-79°-Eで、埋地角度は14°である。人骨の一部が遺存していた。

30号甕棺 (第30図 図版22)

上甕 大形の壺体部上半から口縁部を打ち欠いて使用している。体部最大径付近には断面M字状突帯を巡らせている。突帯部径49.6cm、器高36.8cm、復原底径11.6cmを測る。体部内外面は板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。底部外面にイネわら状圧痕を持つ。体部外面上位に黒斑あり。体部外面中位から下位に赤色顔料かがみられる。丹塗り土器である可能性も考えられる。

下甕 中形の甕である。口縁部は内側にやや突出した逆L字口縁である。口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。ほぼ完形で、口径47.4cm、器高60.5、底径10.8cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胴部中位には縦に長い楕円形の黒斑とその反対側にやや小さい方形の黒斑がみられる。胴部内面下位にはコゲ、外面中位には帯状に煤が付着している。

37号甕棺墓 (第3・18図 図版13)

調査区南西端、標高35.4mで検出した。調査区を拡張して調査した。墓壇上部は削平を受けている。32号甕棺墓を切る。墓壇の検出規模は40×42cm以上の楕円形状と考えられ、深さは40cmである。接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、北壁で18cm程度掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-15°-Wで、埋地角度は36°である。

34号甕棺 (第34図 図版22)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁でやや上面は緩やかに膨らみを持つ。胴部中位に断面かまぼこ形の突帯を巡らす。ほぼ完形で、口径30.35cm、器高33.9cm、底径8.6cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、口縁部付近は横走行のハケメ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。底部外面に黒斑、種子痕が確認できる。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁で外側にやや垂れ下がる。胴部中位に断面三角形の高い突帯を持つ。ほぼ完形で、口径32.6cm、器高36.45cm、底径8.6cmを測る。内面は板状工具ナデ後ハケメ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はぶい黄橙色を

呈し、焼成は良好である。胴部外面下位に黒斑を有す。

38号甕棺墓 (第3・18図 図版14)

調査区南西端、標高35.6mで検出した。調査区を拡張して調査した。40号甕棺墓、31号甕棺墓を切っている。墓壇の検出規模は64×58cmの円形を呈し、深さは78cmである。接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、下甕を深く挿入する。甕棺の主軸はN-45°-Wで、埋地角度は42°である。

甕棺 (第34図 図版22)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。胴部を一部欠損する、口径33.0cm、器高38.2cm、底径8.05cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はふい黄褐色を呈し、焼成は良好である。底部に種子圧痕がみられる。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に細く突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径34.65cm、器高38.6cm、底径7.9cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部中位から底部外面にうすい黒斑を有す。

39号甕棺墓 (第3・21図 図版14)

調査区中央、標高35.0mで検出した。調査区中央部分の段造成の影響を受け、墓壇自体は大きく削平されている。かろうじて、下甕は原位置を保っている。上甕は造成によって掻き出された形で検出され、人骨も同様に動いていた。2段掘りと考えられ、2次墓壇の掘り込みが北東壁へ68cm程度確認できる。接口式成人棺で、甕棺の主軸はN-34°-Eで、埋地角度はほぼ水平である。人骨の一部が遺存していた。

甕棺 (第29図 図版20)

上甕 大形の鉢である。口縁部は平坦でやや外側に傾く。外側に発達し、内側に短く張り出す。ほぼ完形で、口径58.5cm、器高40.4cm、底径11.35cmを測る。内外面ともに板ナデが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調にふい褐色を呈し、焼成は良好である。底部に黒斑、種子圧痕を有す。

下甕 大形の甕で、砲弾型の器形である。胴部上位から口縁部にかけてはやや内傾する。口縁部は断面T字形を呈し、水平面は外側にやや傾く。内側端部は丸みを帯び、外側端部はしっかりした面を有す。口縁部は擬口縁の両側に粘土を貼り足して水平面をつくっている。口縁部下に三角形突帯を巡らす。胴部中下位に三角形突帯が2条走る。粘土帯の積み幅は6cm前後である。口径58.0cm、器高98.8cm、底径11.8cmである。内外面とも丁寧な板状工具ナデがみられる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄色を呈し、焼成は良好である。外面に広い範囲で楕円形状に広がる黒斑があり、内面もほぼ黒斑が広がっている。意識的かどうかわからないが濃い発色となっている。

40号甕棺墓 (第3・18図 図版14)

調査区南西端、標高35.4mで検出した。調査区を拡張して調査した。墓壇上部は削平を受けている。31号甕棺墓を切り、38号甕棺墓に切られている。墓壇の検出規模は60×54cm以上の楕円形状と考えられ、深さは44cmである。接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-85°-Wで、埋地角度は42°である。人骨の一部が遺存していた。

甕棺 (第34図 図版22)

上甕 小形の甕である。口縁部は内側に突出した逆L字口縁である。ほぼ完形で、口径34.65cm、器高38.75cm、底径8.9cmを測る。胴部内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はふい褐色を呈し、焼成は良好である。他の小児棺と比べて赤味が強い。胴部内面下位から底部内面に黒斑を有す。

下甕 小形の甕である。口縁部は内側に細く突出した逆L字口縁で、口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。ほぼ完形で、口径34.0×35.9cm(楕円形)、器高42.1cm、底径8.4cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。他の小児棺と比べて赤味が強い。胴部内面下位から底部内面には黒斑を有す。

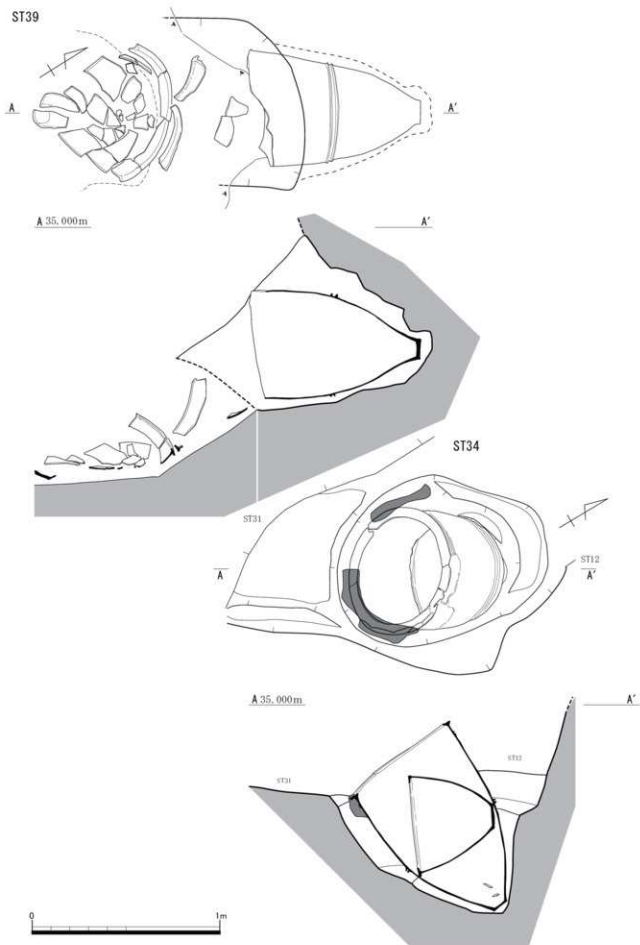
41号甕棺墓 (図版14)

調査区の南東進入路付近の崖面に位置する。標高36m付近で検出した。緊急で取り上げたために写真記録のみである。甕棺墓の主軸は北東-南西方向である。接口式成人棺である。人骨が一部遺存していた。

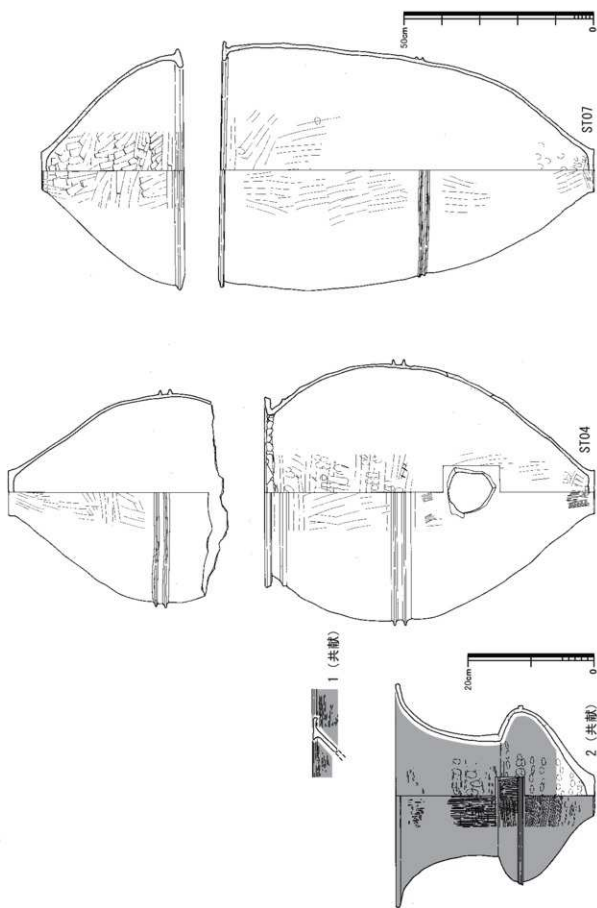
甕棺 (第29図 図版20)

上甕 大形の鉢である。口縁部は逆L字状を呈し、やや外側に傾く。擬口縁の上部に粘土をかかせて平坦面を持つように成形している。口縁部-体部を一部欠損し、復原口径53.0cm、器高34.35cm、底径10.0cmを測る。内面は板状工具ナデ、外面はハケメが確認できる。胎土はやや粗く2mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。かなり、器壁が薄く作られている。

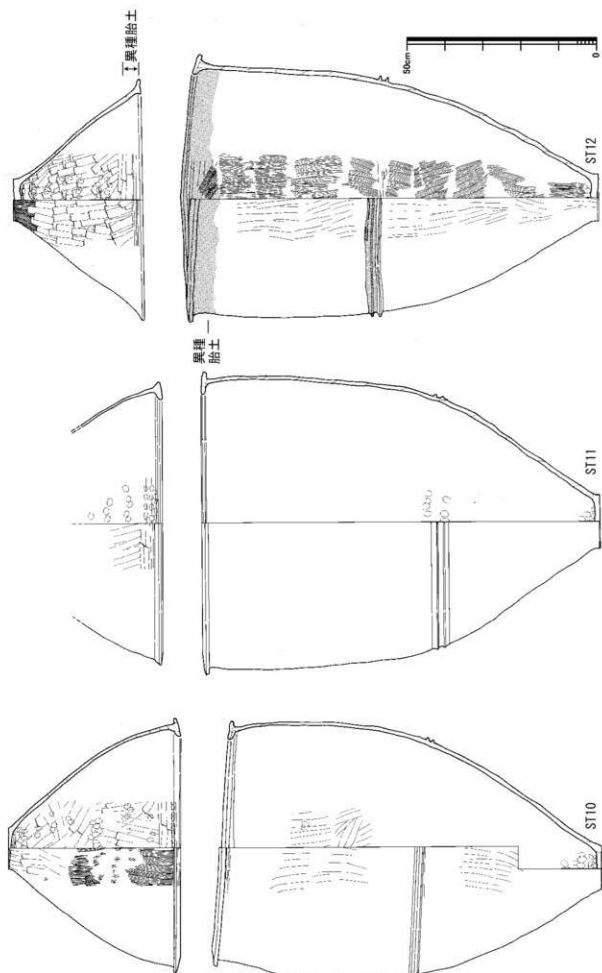
下甕 大形の甕で、砲弾型の器形で高さがある。口縁部は断面T字形を呈し、やや外側に傾く。内側端部は丸みを帯び、外側端部は丸みを帯びた面を有す。肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り足し、水平面をつくっている。胴部下位に三角形突帯が2条走る。粘土帯の積み幅は7-8cm前後である。口縁部から胴部にかけて約1/2の残存で、復元口径59.6cm、器高108.1cm、底径11.4cmである。内面は板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く、3mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄褐色を呈し、焼成は良好である。



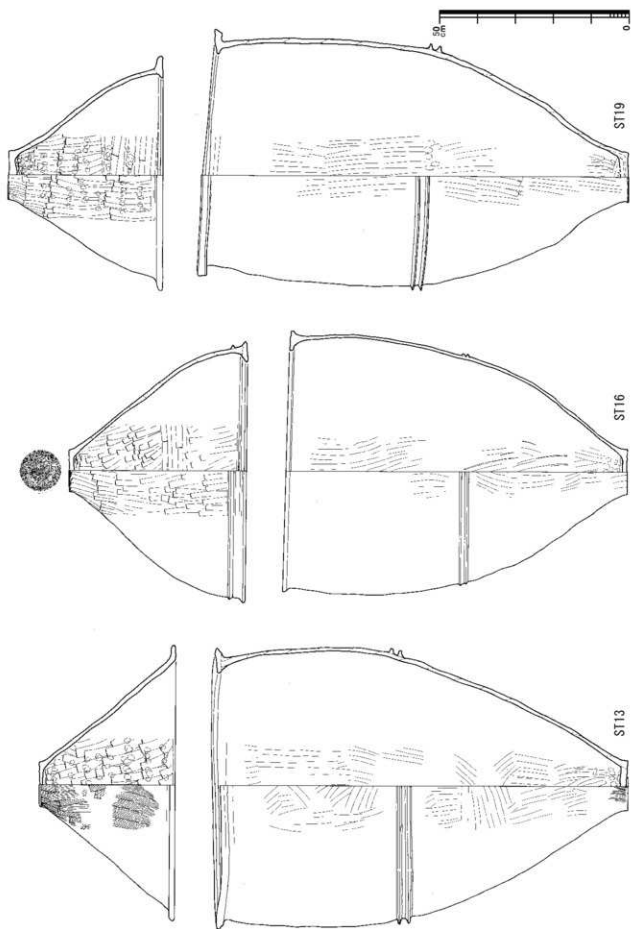
第21图 34·39号墓茔墓 实测图 (s=1/20)



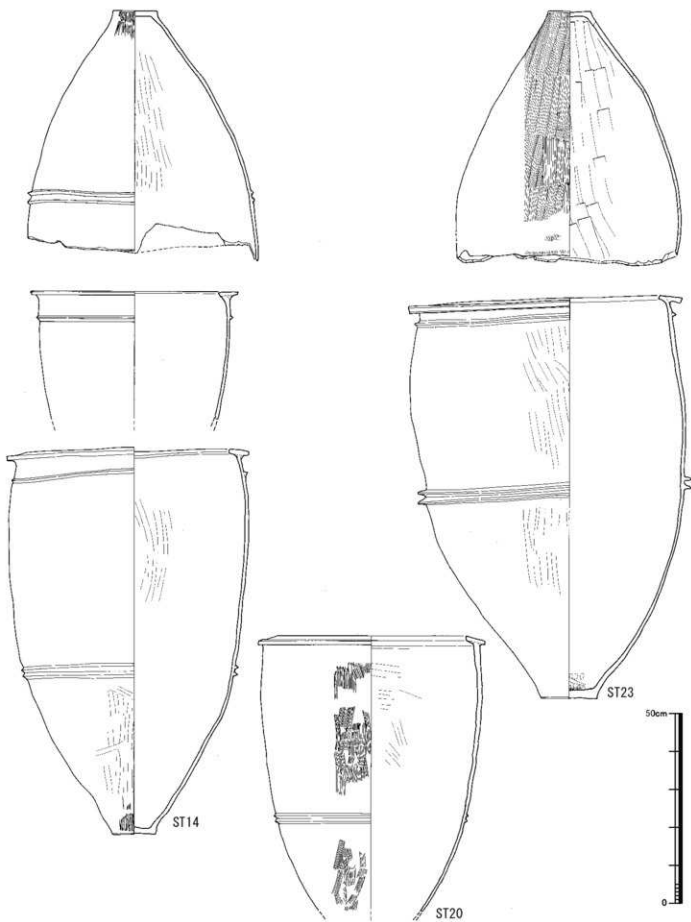
第22図 甕棺（大形棺）実測図①[ST04・ST07] (s=1/10, 1・2はS=1/6)



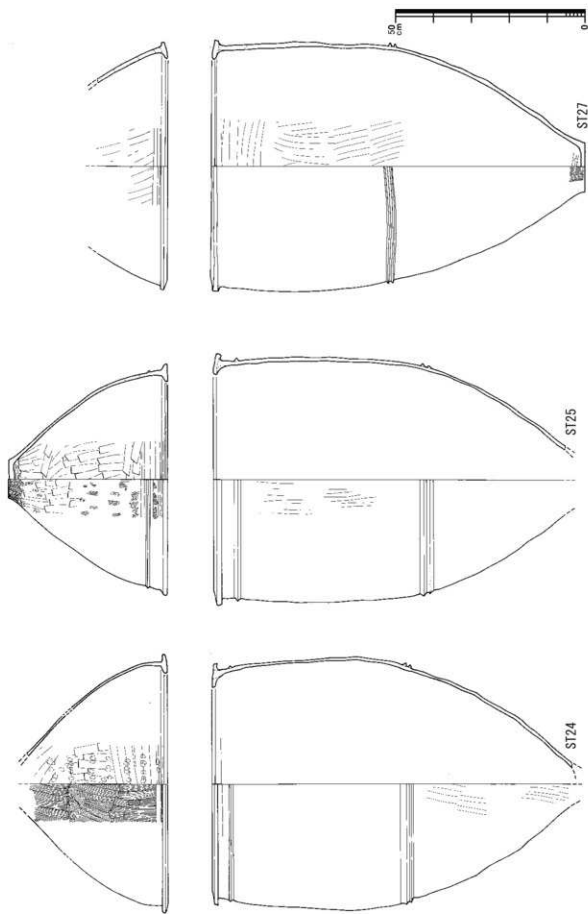
第23図 甕棺（大形棺）実測図②[ST10・ST11・ST12] (s = 1/10)



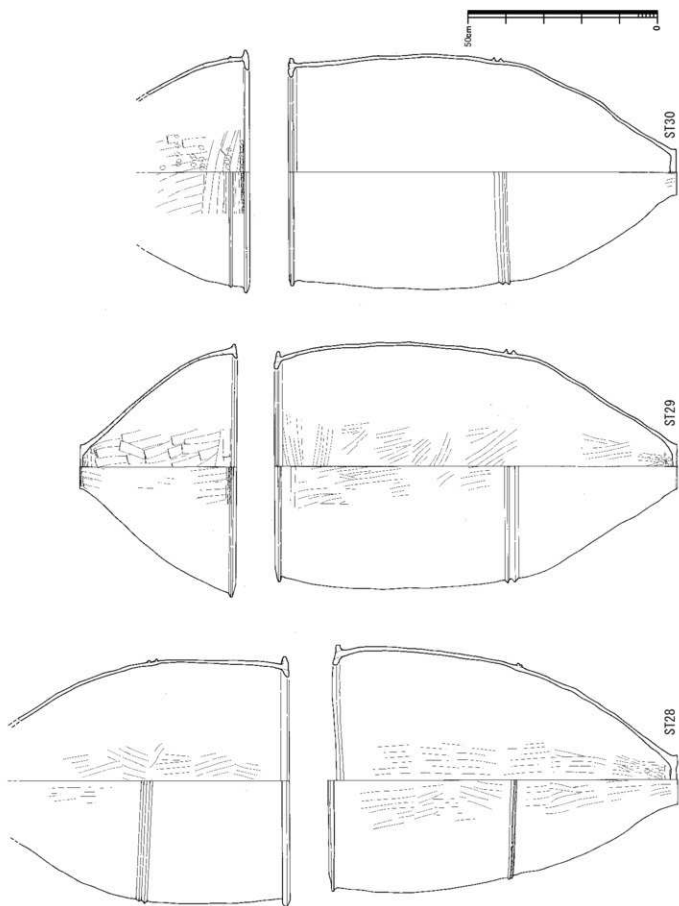
第24图 甕棺（大形棺）実測図③[ST13・ST16・ST19] (s = 1/10)



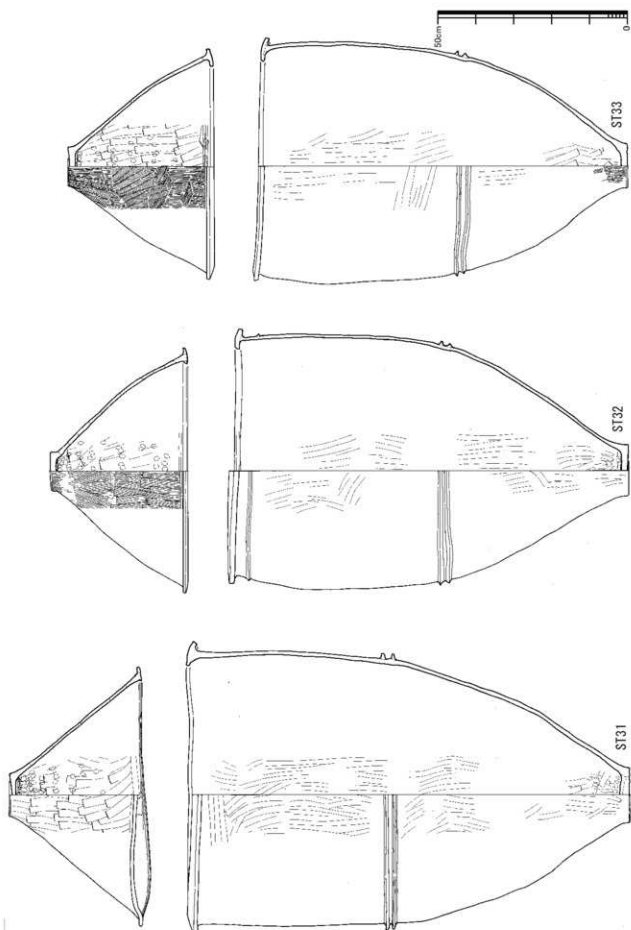
第25图 甕棺（大形棺）实测图④[ST14・ST20・ST23] (s=1/10)



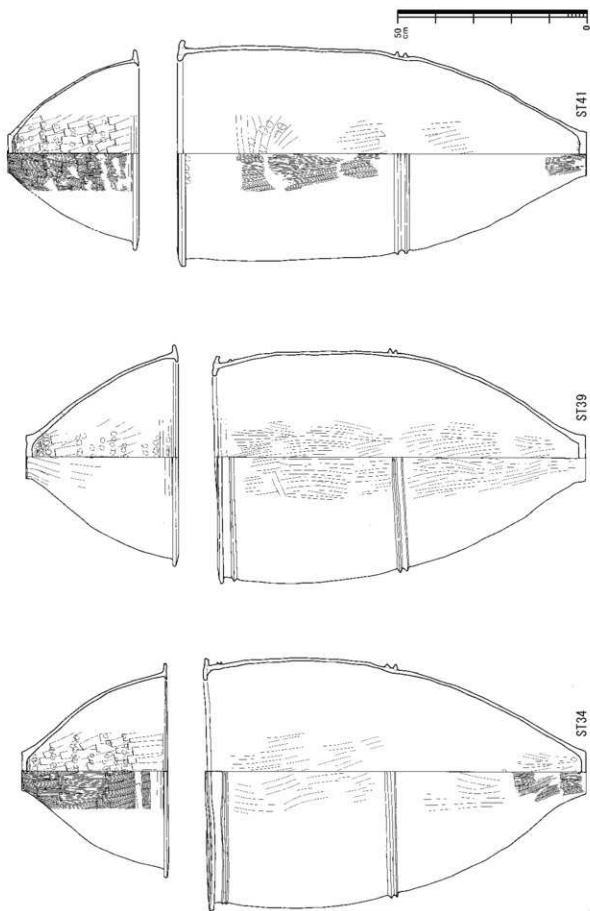
第26图 甕棺（大形棺）実測図⑤[ST24・ST25・ST27] (s = 1/10)



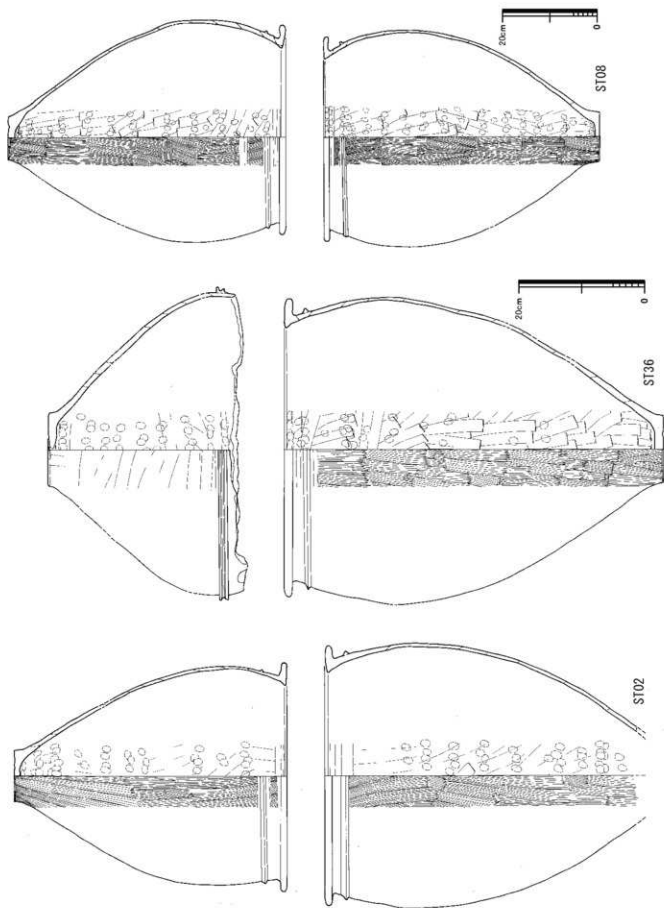
第27図 甕棺（大形棺）実測図⑥[ST28・ST29・ST30] (s=1/10)



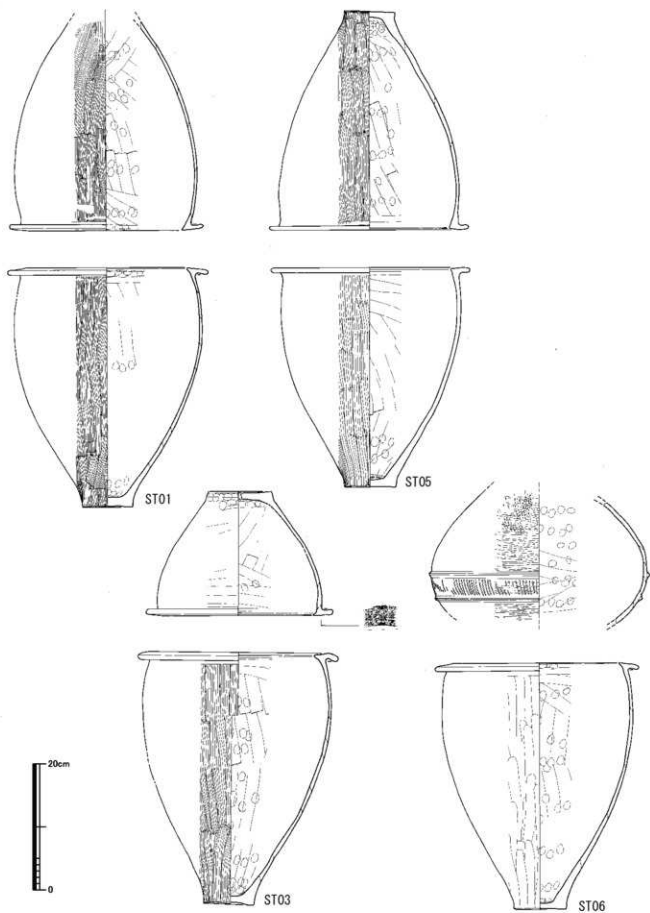
第28图 羨棺（大形棺）実測図⑦[ST31・ST32・ST33] (s=1/10)



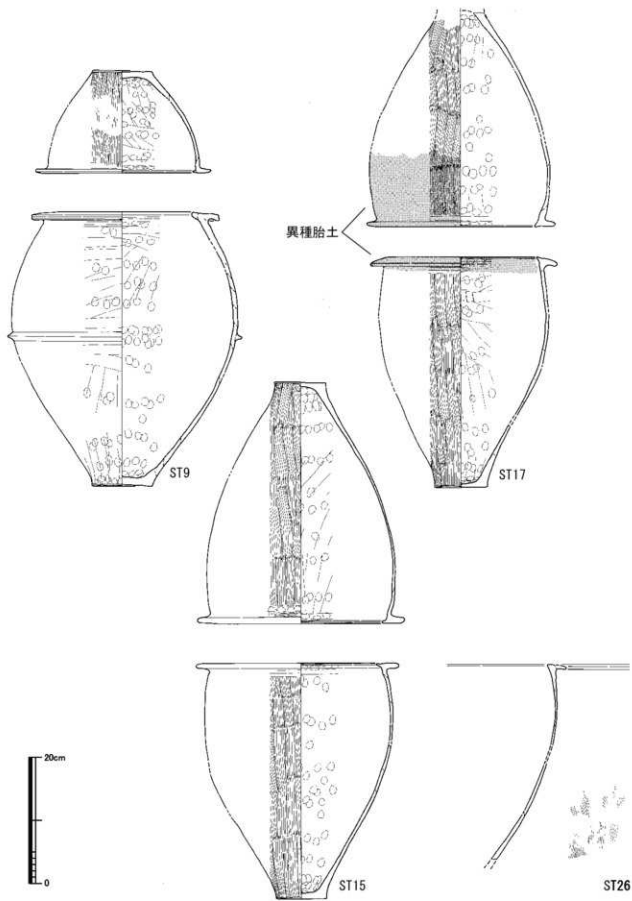
第29図 甕棺（大形棺）実測図⑧[ST34・ST39・ST41] (s=1/10)



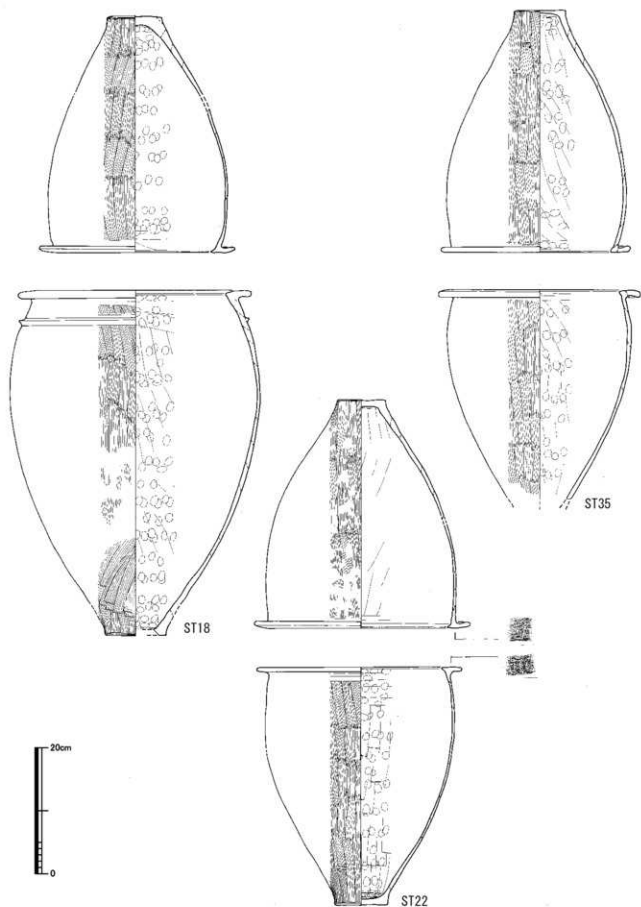
第30図 甕棺（中形棺）実測図[ST02・ST08・ST36] (s=1/6・1/8)



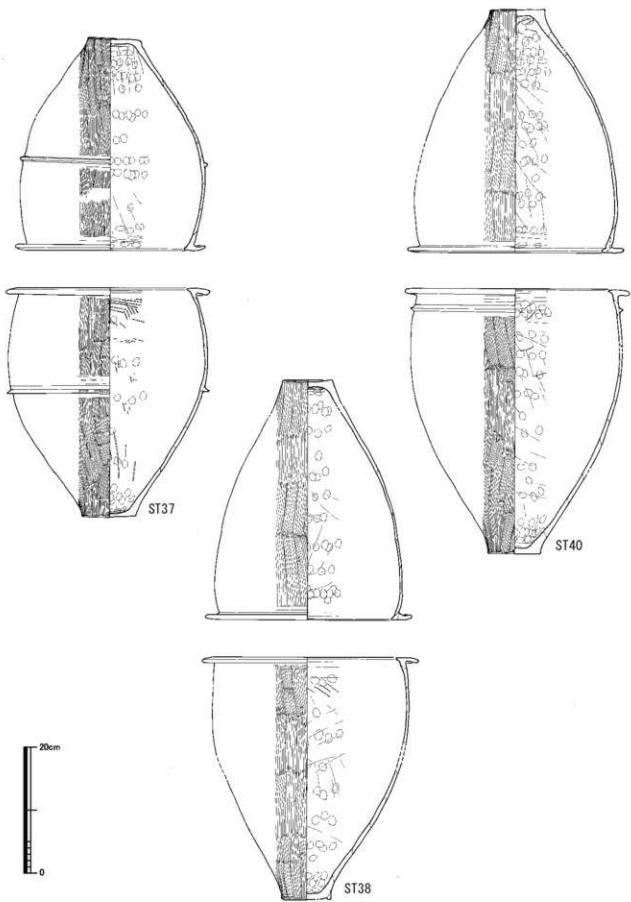
第31図 甕棺（小形棺）実測図①[ST01・ST03・ST05・ST06] (s=1/6)



第32図 甕棺（小形棺）実測図②[ST09・ST15・ST17・ST26] (s=1/6)



第33图 甕棺（小形棺）实测图③[ST18・ST22・ST35] (s=1/6)



第34图 甕棺（小形棺）实测图④[ST37・ST38・ST40] (s=1/6)

3. 溝状遺構

調査区の北東斜面で間断をもち、甕棺墓列に沿う形でみられた溝状遺構である。調査区端にあたること、段造成によって形成された急峻な崖面の上に位置することなどから、調査は難航したが、その出土遺物や出土状況から甕棺墓に伴う祭祀溝であると考える。

1号溝 (第3・35図 図版15)

調査区の南東端、標高36.6mで検出された。北西への延長は段造成によって消え、北東側の一部は調査区外に及ぶ。検出長は4m55cm、最大幅は1m、深さは95cm程度である。溝は北西-南東方向に走っている。検出した中央部分から北西で深く下がる形状である。長細い土坑状の掘り込みが重なるような形かもしれない。中央部分から北西方向では上層や底付近から土器が出土している。埋土は、暗赤褐色～淡褐色土である。

出土遺物 (第37図 図版23)

樽型甕 (1・2)、丹塗無頸壺 (3)、広口壺頸部～体部 (4) が出土した。広口壺と無頸壺は土層断面図にもあるように最上層からの出土である。樽型甕は上・中層と下層出土のものが接合した。

樽型甕 (1・2) は同一個体と考えられる。口縁部下位と胴部中位、下位に断面三角形の突帯がめぐる。

無頸壺 (3) は正位で据え置かれたように出土した。一部のみ欠損である。口縁部上面、体部外面にミガキが密に施されている。広口壺 (4) は口縁部と底部を欠く資料で、頸部のつけねに断面三角形の突帯1条、体部最大径の上位にM字の2条突帯がみられる。

2号溝 (第3・36図 図版15・16)

調査区の中央、標高37.3～36.8mで検出された。北側は出来るだけ調査区を拡張したが、一部は調査区外に及ぶ。溝の南東側は段造成によって大きく削平され、崖面となっている。足場を作った調査は難航した。検出長は5m20cm、幅は42cmから56cm以上、溝の深さは北西側から階段状に下がっていき、50～65cm程度である。溝は北西-南東方向に走っている。北西部分で大量の土器が出土している。下位の土器群は正位を保っており、特に広口壺⑬と筒形器台⑭は据えられた状態といえる。その上位には横位の壺⑨⑩⑪などが多くみられる。埋土は暗赤褐色～淡褐色土である。

出土遺物 (第37・38図 図版23)

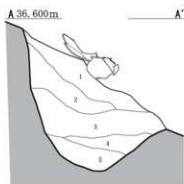
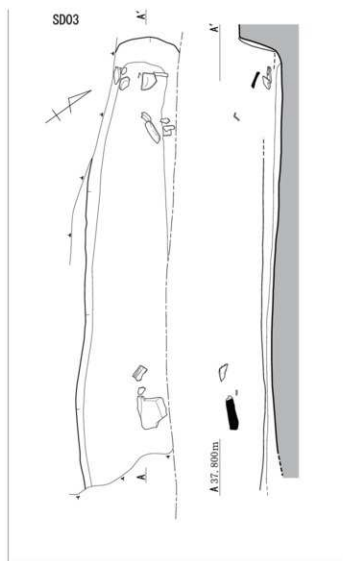
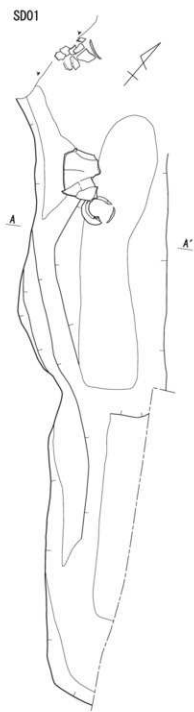
広口壺 (4) は出土状況⑬にあたり、体部を一部欠損する。素口縁で体部上位にM字突帯を有し最大径となっている。体部は肩が張り、強く屈曲して直線的に開く頸部を持つ。残存は悪いが、頸部には細い縦ミガキ、外面には丹塗りの痕跡が確認できる。広口壺 (5) は出土状況⑭にあたり、ほぼ完形である。鋤先状口縁で頸部下位にM字突帯を有する。体部はやや肩が張り、緩い屈曲で頸部が立ち上がる。頸部は細い縦ミガキ、体部上半は横ミガキ、下半は縦ミガキである。広口壺 (6) は出土状況⑨にあたり、体部上半を一部欠損する。鋤先状口縁で体部最大径とその上位に断面三角形突帯を有する。体部は肩が張り、強く屈曲して短い頸部が立ち上がる。広口壺 (9・12・13) は出土状況⑬⑭にあたり、破片資料であるが同一個体の可能性が高いと判断した。素口縁で肩部付近にM字突帯を有し最大径となっている。体部は肩が張り、ラッパ状に広く口縁部を持つ。肩部には9本1単位の沈線による施文がある。丹塗り土器である。長頸壺 (7) は出土状況⑩にあたり、体部中位に最大径を持つ器形で、短い口縁部が直に立ち上がる。白色精良胎土で丹塗り土器である。体部は細かい横ミガキ、頸部は縦ミガキがみられる。無頸壺 (8) は出土状況⑦にあたり、大きく欠損する。体部中位から上位に張りを持つ器形である。口縁部の屈曲は弱い。丹塗り土器である。高坏 (14) は出土状況④にあたり、坏部の1/2を欠損する。椀形の坏部で口縁部は水平に折れ曲がる。脚部は比較的高さがあり、裾部分は短く開く。磨減しているが、脚部には縦ミガキがみられる。坏部から脚部にかけて丹塗りが施される。透かしは切り取った面に稜がみられるので複数回の切り取りが行われたと考えられ、切り取り部分には赤色顔料が付着していない。罎部はやや外側に傾いて、くの字状に屈曲、短い土端部となっている。外面は細かい縦ミガキ、丹塗りが施されている。筒形器台 (16) は出土状況⑤にあたり、脚裾部を欠くがその他は3/4残存している。透かしはなく脚が長い。(15) よりも高さのある筒形器台である。脚部分は真つぐに立ち上がり、罎部で大きく開き、広い罎部を有する。罎部から土端部へも高く立ち上がる。外面は細かい縦ミガキ、丹塗りが施されている。そのほか、丹塗り土器甕口縁部 (3: 出土状況⑧)、丹塗り壺底部 (12: 出土状況⑥)、丹塗り樽型甕底部 (11: 出土状況⑩) が出土している。

3号溝 (第3・35図 図版16)

調査区の中央、標高37.8mで検出された。北側は出来るだけ調査区を拡張したが、一部は調査区外に及ぶ。溝の南東側は段造成によって大きく削平され、崖面となっている。検出長は2m98cm、幅は62cm以上、溝の深さは25～37cm程度である。溝は北西-南東方向に走っている。土器片や礫が出土している。埋土は淡褐色土である。

出土遺物 (第38図)

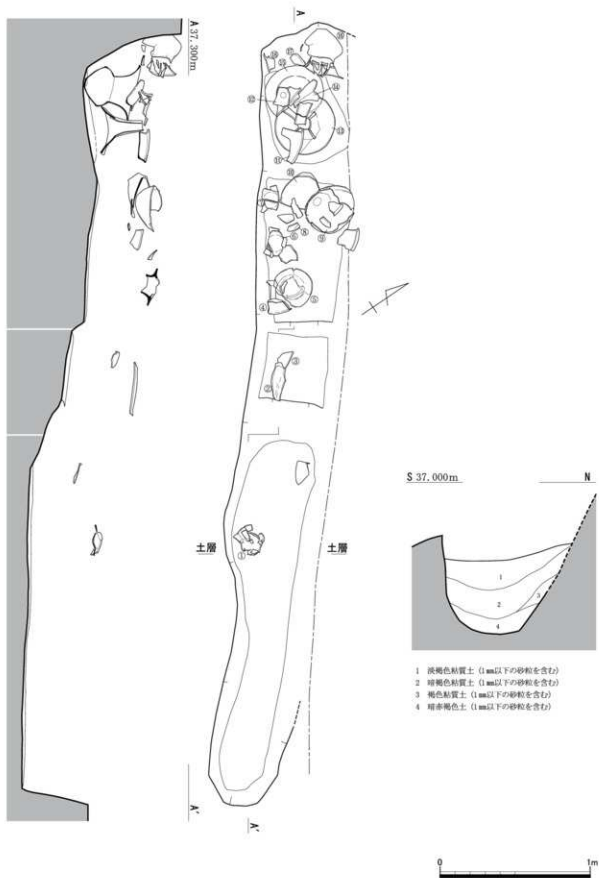
甕口縁部 (1・2)、樽型甕底部 (5) が出土した。



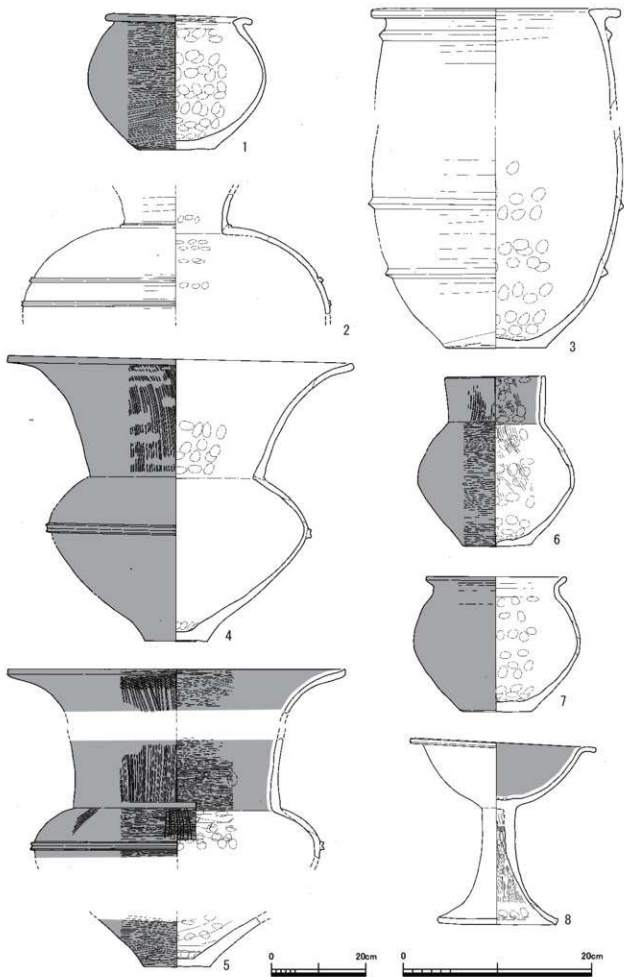
- 1 暗褐色砂質土 (2~3mm大砂粒を含む)
- 2 淡赤褐色砂質土 (2~3mm大砂粒を含む)
- 3 赤褐色土 (2~3mm大砂粒を含む)
- 4 淡赤褐色砂質土 (1mm以下の砂粒を含む)
- 5 淡褐色土 (1mm以下の砂粒を含む)



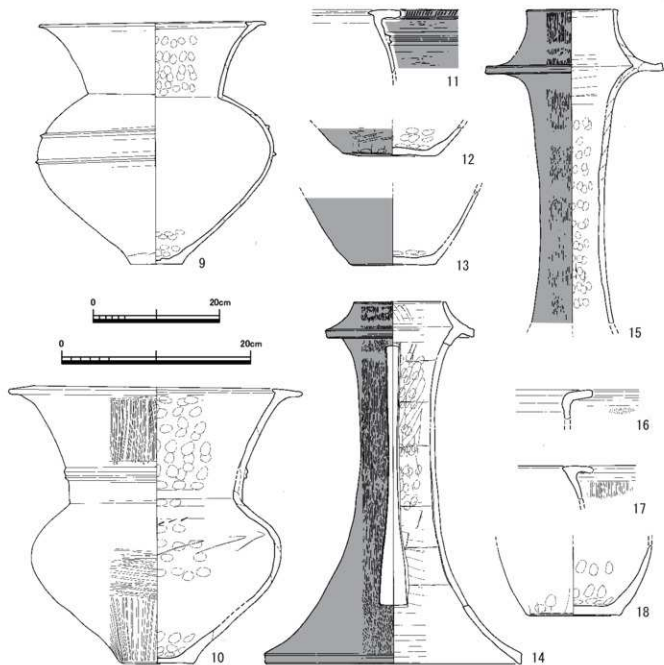
第35図 1・3号溝 実測図 (s=1/25)



第36図 2号溝 実測図 (s=1/25)



第37図 祭祀溝出土土器実測図①[SD01・SD02] (s=1/4, 2½S=1/8)



第38图 祭祀溝出土土器実測図②[SD02・SD03] (s=1/4・1/6)

4. 土坑

1号土坑

当初、4号甕棺墓に隣接する別遺構（土坑）と判断し掘削を進めたが、調査区壁面の土層を観察すると明確に、4号甕棺墓と1号土坑の線引きが出来なかった。最終的に、4号甕棺墓と同一の掘り込みと判断した。4号甕棺墓の入棺時における葬送行為に伴う丹塗り土器が出土している。4号甕棺墓の項目で報告する。

2号土坑（第3・39図）

調査区北東側、標高36.7mで検出した。10号甕棺墓を切っている。検出規模は134×108cmの方形を呈し、深さは24cm程度である。埋土は赤褐色土である。東隅に直径20cm程、深さ34cmのピットがみられた。出土遺物はみられない。

3号土坑（倒木痕）【欠番】

4号土坑（第3・39図）

調査区北東側、標高36.8mで検出した。ST08・ST14を切る。埋土はブロック土を含む淡黄褐色土である。出土遺物はみられない。

5号土坑（倒木痕）【欠番】

6号土坑（第3・39図）

調査区中央の段造成内に位置し大きく削平を受けている。検出面の標高は35.0m前後である。7号土坑を切る。平面は楕円形を呈し、長軸196cm、短軸166cm、深さ30cm程度の浅い土坑である。北側には細いテラス面があり、底面に至る。底面中央は長円形に一段低くなっており、周囲がテラス面を形成する。埋土は赤褐色粘質土である。原位置を保っていない器高70cm前後の甕胴部から底部が出土しており、甕棺墓の下部のみが残存し、中形棺の破片が出土した可能性を考える。検出時には甕棺墓壙かと考えて掘削したが、棺体を検出できなかったため、土坑として報告する（旧21号甕棺墓）。

出土遺物（第42図）

甕胴部から底部片（4）が出土した。底部はほぼ残存するが、胴部は1/4周の残存である。内面底部付近は指頭圧痕が多く残り、上位では板状工具ナデで消されている。外面はハケメ後板状工具ナデである。

7号土坑（第3図）

調査区中央の段造成内に位置し大きく削平を受けている。検出面の標高は35.0m前後である。6号土坑に切られる。隅丸長方形を呈し、長軸120cm、短軸88cm、深さ10cm程度の浅い土坑である。埋土は赤褐色粘質土である。遺物の出土はみられない。

8号土坑（第3図）

調査区中央の段造成内に位置し、大きく削平を受けている。検出面の標高は35.4mである。大形の甕2個体と大型の鉢が出土している。甕棺墓であれば原位置を保っていない。また、下甕に相当する大形甕が2個体あることから、造墓時に前の甕棺に影響し、それらを整理、もしくは廃棄した土坑であると考えた。

出土遺物（第42図 図版24）

大形甕（1）が出土した。口縁部を欠いている。やや丸みを帯びた器形で、胴部下位に2条の三角形突帯を有す。底径11.0cm、残存高63.1cmである。大形甕（3）は口縁部から胴部下位を大きく欠く資料である。砲弾系の器形で、断面T字形の口縁部を持つ。胴部中下位に2条の三角形突帯を持つ。粘土帯の積み幅は7～8cmである。復元口径72cm、器高107.4cm、底径13.6cmを測る。内面は板状工具ナデがみられた。大型鉢（2）は底部を欠き、約2/3の残存である。内側に細く突出する。水平口縁を持つ。内外面とも板状工具ナデがみられる。復元口径64.9cm、残存高16.65cmである。

9号土坑（第3・39図 図版16）

調査区中央の段造成内に位置し大きく削平を受けている。20号甕棺墓の底面下から検出された。検出面の標高は35.3m前後である。隅丸方形を呈し、検出面で長軸128cm、短軸100cm、深さ70cm程度の土坑である。底面から内傾して立ち上がり、埋土は赤褐色粘質土から砂質土である。遺物の出土はみられない。

形状から貯蔵穴の可能性を考える。

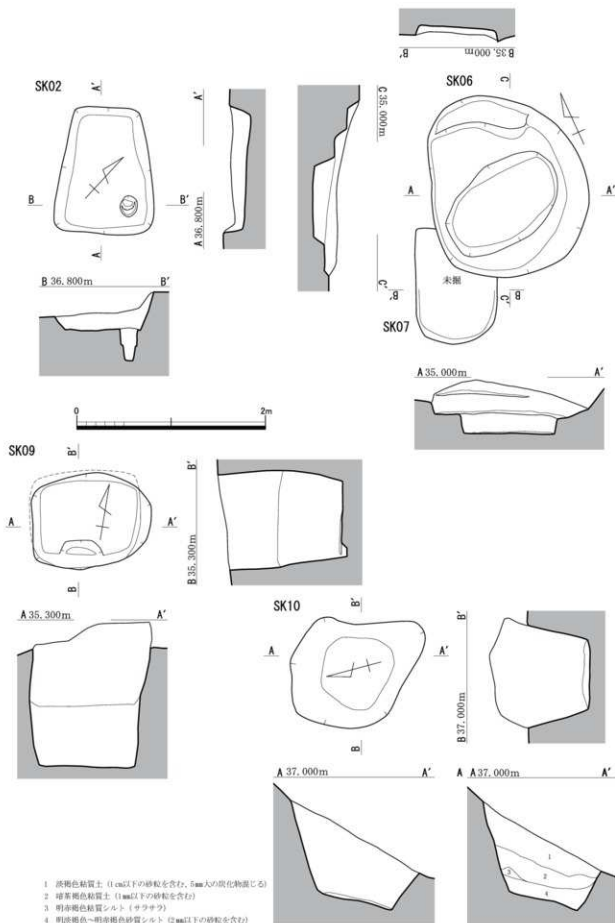
10号土坑（第3・39図）

調査区南東側の標高36.8m付近の斜面に位置し、23号甕棺墓に切られる。平面は不整形を呈し、長軸160cm、短軸124cm、深さ最大100cm程度の土坑である。壁は底面から大きく広がって立ち上がる。埋土は淡褐色粘質土～明赤褐色砂質シルトで、水平堆積である。

丹塗り土器壺や高坏脚部片の出土がみられることや同一の標高で祭祀溝や祭祀土坑が連続することから祭祀土坑の可能性が考えられる。

出土遺物（第41図）

広口壺口縁部（1）と体部片が出土した。丹塗り磨研土器である。いずれも破片であり詳細は不明であるが、砂粒の入り方が異なるので、別個体の可能性がある。内面・外面ともミガキで仕上げられており、外面では暗文風の規則正しい非常に細いヘラミガキが確認できる。



第39図 2・6・9・10号土坑 実測図 (s=1/40)

11号土坑 (倒木痕) 【欠番】

12号土坑 (倒木痕) 【欠番】

13号土坑 【欠番】

14号土坑 (第3・40図 図版16)

調査区南東側の標高36.8m付近の斜面に位置する。祭祀溝と考えられる1号溝・2号溝間に位置している。平面は長円形を呈し、長軸169cm、短軸88cm、深さ最大89cmの土坑である。東側では床面から20cm程度下がる部分があり、締まりのない黒色土が堆積していた。根攪乱によるものと考えている。壁は底面から広がって立ち上がり、裡土は淡褐色から暗褐色砂質土である。水平堆積である。

東側では上層に素口縁の広口壺が横位で出土し、その下層に無頸壺が正位で出土した。西側では、別個体の突帯を持つ壺体部片が出土している。いずれも丹塗り土器である。祭祀土坑と考えられる。

出土遺物 (第41図 図版24)

広口壺(3・4)と無頸壺(2)、突帯を持つ壺体部片が出土した。いずれも丹塗り磨研土器である。広口壺は口縁部1/6、体部1/2程度の残存である。口縁は素口縁で、球胴に肩が張る器形を持ち、屈曲してやや短い頸部となっている。外面頸部縦ミガキ、体部以下横ミガキである。内面は頸部横ミガキで、体部以下は指オサエ・ナデか。無頸壺(2)は体部の中位に最大径があり緩やかに屈曲する。完形である。口縁部は短く水平に張り出す口縁で、内側にも少し突出する。この2者は2mm以下の砂粒を多く含んでおり、器表が荒れて、丹塗りも剥落しつつある。M字突帯を持つ壺体部片は精良胎土である。体部片の北側で同じ精良胎土の壺頸部片が出土しており、同一個体と考えられる。横走行のミガキの上にかなり細い沈線の連続による縦方向の施文がある。13本以上の沈線による文様体で、4か所に文様体があったかと考えられる。

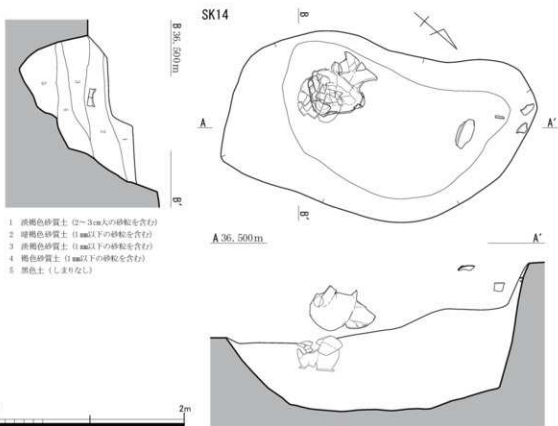
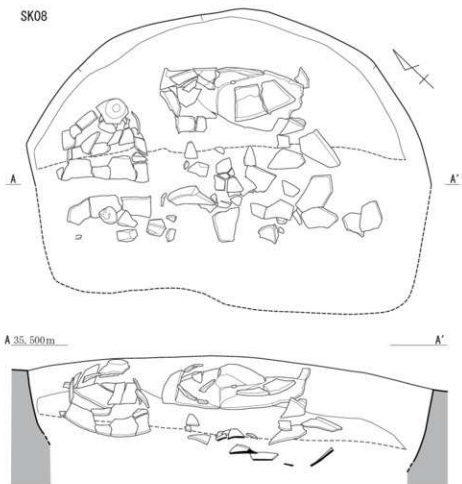
15号土坑 (第3図)

調査区東端の標高36.8m付近の斜面に位置する。今回の一連の開発工事によって大きく削平されており、土器が壁面から露出している状況であった。祭祀土坑もしくは溝の可能性がある。規模は不明。本調査の範囲にはかかっていないが、崩落の恐れもあるので露出している土器を取り上げている。

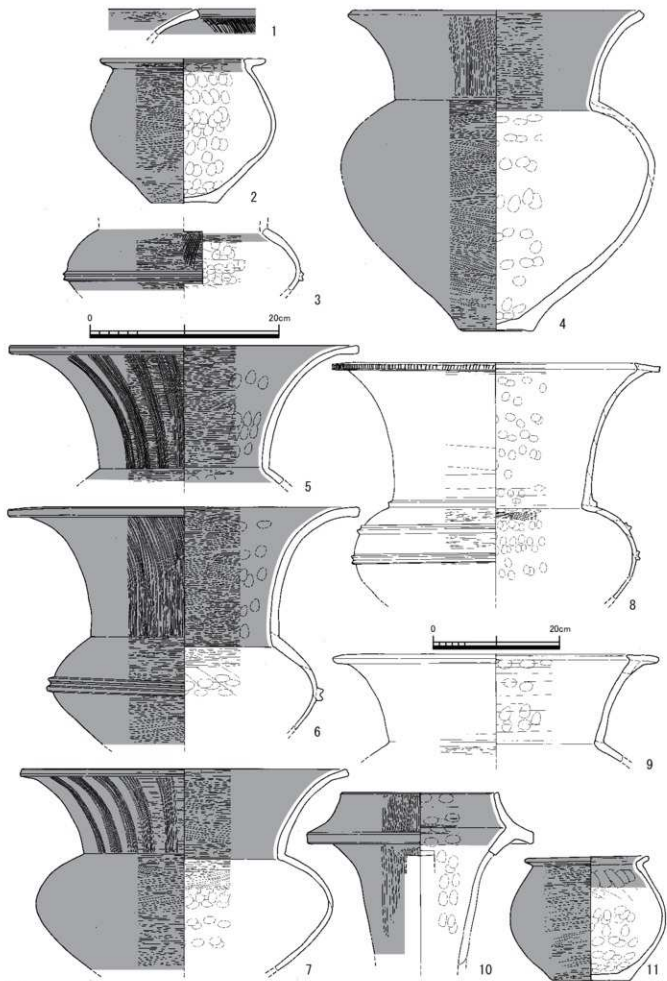
出土遺物 (第41図 図版24)

広口壺(5~9)、無頸壺(11)、筒形器台(10)他が出土した。広口壺(8)は非常に大形の壺である。体部下半から底部を欠く資料で1/2程度の残存である。体部は肩が張っており、最大径部分と肩部の2箇所のM字突帯が貼りつけられている。体部から大きく屈曲し、外方に開く頸部を持つ。屈曲部には突帯を施している。口縁部は鋸状で端部に刻目を施している。器表面は磨減されており不鮮明であるが、外面体部には横走行のミガキが確認できる。体部内面の頸部接合部付近には併行する条痕の単位がみられ、当て具痕かと思われる。復原口径52.2cm、体部最大(突帯部)径33.25cm、残存高37.65cmを測る。無頸壺(11)は完形で、丸みを帯びた器形を持つ。口縁部はくの字状に折れ曲がる。丹塗り土器で底部付近には赤色顔料の上に黒色物が付着している。器表面は剥落が著しく、黒色付着物が前面に及ぶものかわからない。外面は横走行のミガキ、内面は指押さえ後ナデである。広口壺(9)は体部以下を欠く資料で1/2程度の残存である。内側への突出が弱い水平口縁で比較的短い頸部である。器表面は摩耗するが、外面肩部では横走行のミガキ、内面頸部には板状ナデが確認できる。広口壺(7)は底部を欠く資料で1/4程度の残存である。口縁部は素口縁でしっかりと面を持つ。体部は肩が張っており、屈曲して大きく開く頸部を持つ。丹塗り土器で、器表面は比較的残りが良く、内外面に横走行のミガキがみられ、外面頸部には屈曲部から口縁に向けて4~9本1単位の暗文が施される。丹塗り土器である。広口壺(5)は体部以下を欠く資料で、1/4程度の残存である。口縁部は素口縁でしっかりと面を持つ。頸部は体部から直立して立ち上がり、その後大きく外方へ開き口縁部に至る。器表面は比較的残りが良く、内外面に横走行のミガキがみられ、外面頸部には屈曲部から口縁に向けて4~9本1単位の暗文が施される。丹塗り土器である。広口壺(6)は底部を欠く資料で、口縁部は1/2程度の残存、体部は全周残存している。口縁部は素口縁でしっかりと面を持つ。頸部は体部から直立して立ち上がり、その後大きく外方へ開き口縁部に至る。体部の最大径部分にM字突帯が貼り付けられている。器表面は比較的残りが良く、外面は体部横ミガキ、頸部縦ミガキ、内面は口縁部から体部まで横ミガキが施される。丹塗り土器で内面はミガキ範囲まで塗られており、それ以下は赤色顔料が垂れている。筒形器台(7)は脚部を欠く資料で上端部は1/4の残存である。胴部以下の胴部が縮まって、脚部に向かって緩やかに広がる器形であろう。外面はタテミガキ、内面は指オサエナデで胴部付近はヨコナデである。丹塗り土器である。ほかに汲込式甕棺口縁部片も出土している。

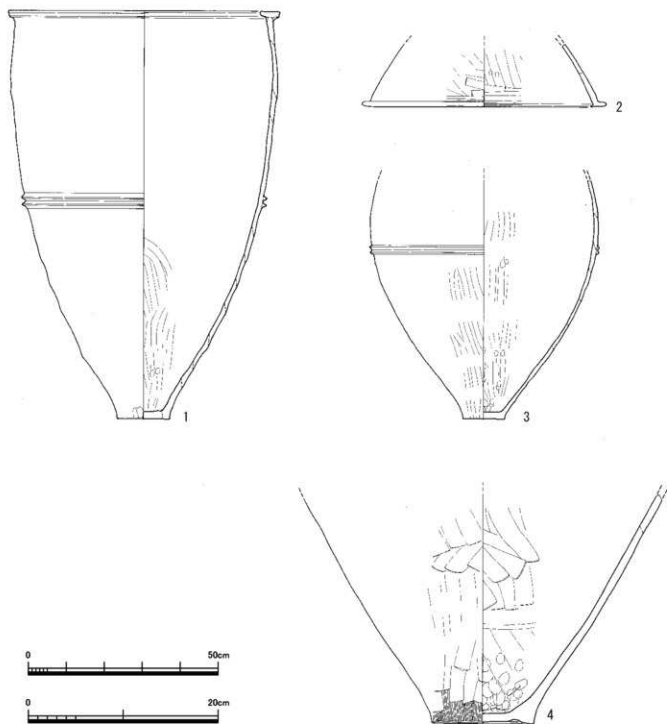
SK08



第40図 8・14号土坑 実測図 (s=1/40)



第41图 祭祀土坑出土土器实测图[SK10·SK14·SK15] (s=1/4·1/6)



第42图 土坑出土土器实测图[SK06·SK08] (s=1/4·1/10)

第4章 津古牟田遺跡第7次調査の埋葬状態と形質的特徴

星野宙也¹⁾・米元史織¹⁶⁾・山下理呂¹⁾・足達悠紀¹⁾・諸岡初音²⁾・唐高暉²⁾・永島さくら²⁾
・出見優人²⁾・小高蒼大³⁾・松尾樹志郎¹⁾・中野真澄¹⁾・James Frances Loftus III¹⁾・舟橋京子^{5) 6)}

1) 九州大学地球社会統合科学府

2) 九州大学文学部

3) 九州大学共創学部

4) 九州大学総合研究博物館

5) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

6) 九州大学比較社会文化研究院

はじめに

小郡市津古牟田遺跡第7次調査において弥生時代の人骨が出土し、調査を担当した小郡市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院へ人骨調査の依頼があった。そのため、舟橋京子・富田貴啓（現・北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課）・星野宙也が現地へ赴き、人骨の調査および取り上げを行った。人骨はその後九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院へと搬送され、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、成人人骨について恥骨結合面はBrooks and Suchy(1990)・Sakaue (2006)、耳突面はLovejoy(1985)、歯牙の咬耗は枌原(1957)を用い、性別の判定には、頭蓋・骨盤についてBuikstra and Ubelaker(1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編 1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。齲齒の観察基準は石川ほか(1986)に従った。

なお、人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。また、出土人骨一覧表は以下の通りである（第2表）。

1. 出土状態

第2表 出土人骨一覧表

No.	遺構番号	性別	年齢	保存状態	埋葬姿勢	被褥身長推定	染色剤	※○：良好、△：不良、×破片のみ
								注記
1	ST01	不明	幼児（3歳前後）	△	不明	-	-	寛度のクリブラ・オルビタリア
2	ST04	男性	熟年	○	仰臥屈膝	-	-	鼻骨骨折、上顎に左右第一切歯間に過剰歯、下顎齲齒、上顎齲齒、腫瘍リッピング、左歯骨骨折
3	ST07	女性	成年後半-老年	○	仰臥屈膝	-	-	変形性脊椎症、肋軟骨骨化、右膝蓋骨関節炎、左右股骨骨膜炎
4	ST10	男性	熟年-老年	○	側臥屈膝	164.8cm	-	-
5	ST12	不明	未成年（10歳以下）	△	不明	-	-	-
6	ST13	不明	不詳	×	仰臥屈膝	-	-	-
7	ST14	男性	熟年	○	仰臥屈膝	-	-	-
8	ST16	男性	熟年-老年	○	仰臥屈膝	-	-	変形性脊椎症、左尺骨・左右橈骨関節炎
9	ST19	男性	熟年	○	仰臥屈膝	-	○	上顎歯肉病、腫瘍・腫瘍リッピング
10	ST23	女性	成年後半-熟年	○	仰臥屈膝	-	-	-
11	ST24	不明	不詳	×	不明	-	-	-
12	ST25	男性	熟年以上	△	仰臥屈膝	-	-	脛骨骨膜炎
13	ST27	男性	成年	△	仰臥屈膝	-	-	-
14	ST30	不明	不明	×	不明	-	-	-
15	ST31	男性?	成年	△	仰臥屈膝	-	-	-
16	ST32	女性	熟年	△	仰臥屈膝	-	-	-
17	ST33	女性	熟年	○	仰臥屈膝	○	-	右中切歯抜歯の可能性
18	ST34	男性	成年	△	仰臥屈膝	-	-	下顎右大歯に遠近上の磨滅
19	ST36	不明	幼児	×	不明	-	-	下顎右第一大臼歯未萌出、エナメル質形成2~3mm
20	ST39	男性	成年以上	△	不明	-	-	-
21	ST41	不明	不詳	×	不明	-	-	-

【ST01】第46図

合口甕棺の下甕底部付近から頭蓋骨が、その直下の甕の底部直上から四肢骨・椎骨がまどまど出土している。頭蓋骨は顔面を北に右側頭部を上に向けており、頭蓋骨の東側から下顎骨が咬合面を上、オトガイを北に向けた状態で出土している。頭蓋骨と下顎骨の位置関係から、埋葬時は咬合状態にあったが軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が側方にたおれ、下顎骨が外れたと考えられる。頭蓋骨の東側から椎弓片が、下顎の周囲から歯牙が散乱した状態で出土している。

頭蓋直下から下腿と考えられる長管骨片、および大腿骨が東西方向に長軸を揃えて出土している。大腿骨は下腿の北側から、近位を北東、後面を上、大腿骨近位を北東、後面を上に向けた状態で出土しており、その上から椎弓が出土している。

頭蓋骨が下甕の四肢骨片の直上から出土していること、大腿骨が近位を東・上側に向いていること、上甕と下甕に高低差があることから、軟部組織の腐朽後に下甕に頭蓋骨が転じたと考えられる。

以上の出土状況から、本人骨は合口甕棺の下甕に足から挿入され、頭位を南東に向けた状態で埋葬されたと推定される。詳細な埋葬姿勢は、四肢骨の保存状態が良好でないこと、甕の底部から出てきた2匹のカエルによって骨が攪乱されている可能性があるため不明である。

【ST04】(第46図)

合口甕棺の上甕口縁部付近から頭蓋骨および椎骨・上肢骨が、下甕中央部付近から下肢骨が出土している。頭蓋骨は顔面を南、側頭部を上に向けた状態で出土しており、頭蓋骨の北西側から下顎骨が咬合面を上、オトガイを北西に向けた状態で出土している。また、下顎骨の周辺から頭椎が出土している。このことから埋葬時には顔面を北西あるいは西側に向けて埋葬されたが軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋骨が後方へ転落したと考えられる。

頭蓋骨西側から左上腕骨が近位を南東側に向けた状態で出土しており、左上腕骨の骨体中央部直上から左肩甲骨が鳥口突起を南西に向け前面を上にした状態で出土している。右上腕骨は、頭蓋骨の北西側から近位を南東に向けた状態で出土している。左右の上腕骨は、ともに近位を南東に向け、前面を上にして出土している。そのため、おおむね相対的位置関係を保って出土していると考えられる。しかし、前腕骨が左右ともに遺存していないため、埋葬時の腕の状態については不明である。

下肢は、下甕の北側から右大腿骨が近位を東、前面を上に向け、その南側から左大腿骨が近位を南東、前面を上に向け出土している。右脛骨は右大腿骨の西側から近位を北東、前面を上にした状態、左脛骨は左大腿骨の北側から近位を南西に向け、外側を上にした状態で出土している。左腓骨は左大腿骨の遠位端上部から近位を北東に前面を上にした状態で出土している。左下腿は軟部組織の腐朽に伴いより下方へ転落したと考えられるが、左右大腿骨や右脛骨はおおよそその相対的位置関係を保ち、膝を立てて屈した状態であると考えられる。

以上の出土状況から、本人骨は頭位を南東に向け、合口甕棺の下甕に足から挿入されたと考えられる。埋葬姿勢については仰向けで、膝を屈した仰臥屈葬であったと推定される。

【ST07】(第46図)

合口甕棺の上甕からはほぼ全身が、下甕から下肢骨の末端部分が出土している。合口甕棺の北西側、下甕の底部側から、頭蓋骨が顔面を南東やや左に傾けた状態で出土しており、上下顎は咬合状態を保っている。頭蓋骨の北西側から中手骨が1点出土している。

全身のいずれの関節もほぼ関節状態を保っている。右上腕骨の北東側から右尺骨が近位を南西側

に向け、右橈骨は近位を南に向け、回内した状態で出土している。肘関節部分は残存していないが、上腕骨と前腕骨の相対的な位置関係は正しい。また、左胸腔内から右の手骨が、中手骨が南側、基節骨が北側の位置関係で出土していることから、右前腕に関しては解剖学的位置関係をおおむね保ち、左の胸腔上に手を置いた状態で埋葬されたと考えられる。左尺骨は上腕遠位の南側に位置し、近位を北側、外側を上に向け、上腕骨との相対的な位置は正しい。一方、左橈骨は近位を南西、遠位を肘側である北東に向けており、左橈骨のみ解剖学的位置から逸脱し、近・遠位が逆になって出土している。左尺骨は回内した状態で出土していることから、軟部組織の腐朽に伴い左尺骨の南側に左橈骨が転落する可能性は考えられるが、その場合においても、近・遠位が本来の向きと逆になるということは想定しがたい。また、右橈骨近位・左尺骨の遠位側下位より左手根骨が出土している。左手骨はほとんど遺存していないが、左前腕に関しては、腹腔上に手を置いた状態で埋葬されたと考えられる。

下肢は、いずれの関節も関節状態を保っており、左右膝関節ともに北東側に位置する。膝を立てた状態で埋葬され、軟部組織の腐朽に伴い左右の膝関節は左側に倒れたと考えられる。

以上の出土状況から、本人骨は、頭位を北西、仰臥の状態で、合口甕棺の下甕に頭から挿入されたものと考えられる。上肢は、肘を屈曲し右手を左の胸部に、左手を右の腹部に置いた状態で、下肢は股関節および膝関節を屈した仰臥屈葬であると推定される。左橈骨の出土状況に関しては別項で検討する。

[ST10] (第 47 図)

合口甕棺の下甕からはほぼ全身骨が出土し、下肢の末端の一部のみが上甕から出土している。頭蓋骨は下甕から出土しており、頭位は南東に向けた状態である。頭蓋骨は顔面を上甕棺（北西）に向け、下顎骨は頭蓋骨の下位、やや北東側から出土している。上下顎は咬合状態を保っておらず、上顎の歯牙が、上部胸椎付近直下から出土している。このことから、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が前方に転じたものと考えられる。

軀幹骨は、頭蓋骨の北西側から頸椎・胸椎・腰椎・仙骨がほぼ関節状態を保って出土している。右肋骨は、おおむね関節状態を保っていると考えられる。左肋骨は椎骨の南西側から出土しているが保存状態が良好ではないため関節状態にはない。胸骨柄は、本来の位置である胸椎上から大きく動き左上腕骨の遠位側上位、右大腿骨遠位端の下位から出土している。

上肢について、左鎖骨と左肩甲骨は、頭蓋骨の直下から出土している。右鎖骨は下顎骨の北側から出土しており、その下から右肩甲骨が出土している。右上腕骨は、頭蓋骨の北西側から、近位を南東、前面を上に向け出土している。右橈骨は、右肋骨の直上から、椎骨に沿うように近位を北西、背面を上に向け出土している。右尺骨は、近位を右上腕の遠位端の上位にのせ、遠位を南西側、背面を上に向けた状態であり、遠位側は右大腿骨の遠位側下位から出土している。左上肢はすべて長軸を北西-南東にそろえて出土している。左上腕骨は頭蓋骨の西側から近位を南東、前面を上に向けた状態で出土している。左尺骨・左橈骨は近位を北西、背面を上に向けた状態で出土している。この出土状況より、上肢は肘関節を強屈し、手を肩関節部分において状態で埋葬されていたと考えられる。

下肢の出土状況については、左右の寛骨は仙骨と関節状態を保ち出土している。下肢はおおよそ長軸を北西-南東にそろえて出土している。右大腿骨は右寛骨の西側から、近位を北西、背面を上に向け出土している。右大腿骨頭と右寛骨の関節状態は保たれていないが近接した位置から出土している。右脛骨は右大腿骨の西側から、近位を南東、前面を上に向けた状態で出土している。右脛

骨の直下から右腓骨が近位を南東に向け脛骨と長軸をそろえた状態で出土している。右脛骨遠位の南西側、上蹠から右距骨・右第1中足骨・右第2中足骨が出土している。左大腿骨は右腓骨の下、左寛骨の西側から出土し、近位を北西、背面を上に向けた状態で出土している。左大腿骨の西側から左脛骨が近位を南東、前面を上に向け大腿骨と長軸をそろえた状態で出土している。左腓骨は、左脛骨遠位付近に左腓骨遠位が出土し、遠位端の南側、左脛骨の直下から骨体部が出土している。

以上の出土状況より、本人骨は頭位を南東側に向け、合口甕棺の下蹠に頭から挿入され、両肘関節・両膝関節・股関節を強屈し、左右の手はそれぞれの肩関節付近にのせるような側臥屈葬の状態で見つかりたと推定される。左距骨・左舟状骨・中足骨・胸骨の移動に関しては別項で検討する。

[ST12]

本人骨の遺存状態は良好ではなく、埋葬姿勢などは不明である。

[ST13] (第47図)

合口甕棺の上蹠から頭蓋骨と上肢骨、下蹠から下肢骨が出土している。上蹠の南側から頭頂骨が内面を上にした状態で、頭頂骨の南東から右側頭骨が内側を上にした状態で出土している。頭頂骨と側頭骨の間から右橈骨が出土することから、頭蓋骨は軟部組織の腐朽に伴い大きく動き原位置を保っていないと考えられる。

頭蓋骨の北西から右尺骨が近位を北、前面を上に向けた状態で、頭頂骨の直上から右橈骨が近位を西、前面を上にした状態で出土している。頭蓋の北東から左橈骨・左尺骨が近位を北西、前面を上にした状態で出土している。したがって、上肢は左右の尺骨と橈骨が長軸方向をおおむね揃えた状態で出土している。

下蹠から左右大腿骨が近位を北、前面を上に向けた状態で出土し、左大腿骨の直下から左脛骨が前面を上、大腿骨と長軸を揃えた状態で出土している。

以上の出土状態から、上下肢はおおむね相対的な位置関係を保っていると考えられ、頭位北西の仰臥位で、下肢をやや左側に傾けた状態で屈曲した状態であったと推定される。

[ST14] (第48図)

合口甕棺に埋葬され、上蹠から頭蓋骨と上肢骨が、下蹠から下肢骨が出土している。頭蓋骨は、顔面部を下蹠側、北西に向け、後頭部を北東側に向けた状態で出土している。下顎骨が頭蓋骨の下位、やや北西側から出土しており、上下顎は咬合状態ではない。頭蓋骨は軟部組織の腐朽に伴い、やや南東側に動いたものと考えられる。

頭蓋骨の西側から、右肩甲骨と右上肢骨が出土している。右肩甲骨は関節窩を上面に向け出土し、右肩甲骨の北西側から右上腕骨は、近位を北東、前面を上に向け出土している。右上腕骨の西側から右尺骨が上腕骨と長軸をそろえ、近位を南西に向けた状態で出土している。左上肢は、頭蓋骨の南西側から長軸を北東-南西にそろえて出土している。このことから、上肢は肘関節を強屈し、肩関節付近に手を置いた状態で埋葬されていたと考えられる。

下肢は、左上肢の南西側から左大腿骨・左脛骨は長軸を北東-南西にそろえ、前面を上にした状態で出土している。左下肢の南西側から右大腿骨が近位を北西、前面を上に向けた状態で出土している。右大腿骨の南西側から右脛骨が長軸を大腿骨とそろえ出土している。このことから、左下肢は、股関節・膝関節を仰臥位で強屈し、右下肢は膝を立てた状態で埋葬されたのが軟部組織の腐朽に伴い左側に倒れたと考えられる。

以上の出土状況から、本人骨は頭位を北東側に向け、合口甕棺の下蹠に足から挿入されたものと考えられる。埋葬姿勢は仰向けで、肘関節を強屈し肩に手を置いた状態、左側の膝関節・股関節は

強屈した状態、右は膝を立てた状態で埋葬された、仰臥屈葬位であったと考えられる。

【ST16】（第48図）

合口甕棺の下甕から頭蓋骨から骨盤まで、上甕から下肢骨が出土した。頭蓋骨は顔面を南東に向け、頭頂骨を北東、右側頭骨を上に向けた状態で出土している。下顎骨はオトガイを南東へ、歯冠咬合面を上に向け、オトガイ付近が頭蓋骨の直下から出土している。頭蓋骨の下位から胸骨が、それに連なった状態で腰椎・仙骨が解剖学的位置関係を保ったまま出土している。

頭蓋骨の下位、やや西側から右鎖骨が、胸骨端を東に向けた状態で、その北西側から右肩甲骨が、そのさらに北西側から右上腕骨が出土しており、右肩関節は相対的な位置関係を保っている。右上腕骨は近位を北西、外側を上に向けた状態で出土しており、右上腕骨の遠位端の上に右桡骨・尺骨が近位側をのせた状態で、近位を南西に向け、右尺骨は内側を上、右桡骨は前面を上にした状態で、右桡骨の遠位端が右尺骨に重なるように出土している。右肘関節を屈曲し、手を左胸部付近に置いた状態であったと考えられる。左上腕骨は頭蓋骨頭頂部のやや東側から、近位を北、前面を上にした状態で出土しており、左上腕骨よりも西側、頭蓋骨下位から左桡骨・左尺骨が近位をほぼ南側に向けた状態で出土している。左桡骨は後面を上、左尺骨は外側を上にした状態で、左桡骨がより上腕骨側に位置している。左肘関節は強屈し、手を肩関節あたりにのせた状態であったと考えられる。

仙骨の左右から右寛骨・左寛骨が関節状態を保って前面を上に向け出土している。右腓骨が左寛骨の東側から近位を北に向けて出土しており、右腓骨に一部重なるようにして右大腿骨が近位を南西に、内側を上に向け出土する。右大腿骨の近位端は右寛骨の寛骨臼に近接し、関節状態をおおむね保った状態であったと考えられる。さらに、右大腿骨の遠位側に重なるように近位を北側、前面を上に向けた右脛骨が出土している。左大腿骨は、左寛骨の東側から近位を西側、内側を上にした状態で出土し、大腿骨の遠位側に一部重なるようにして左脛骨が近位を北東、後面を上に向け、左脛骨の下から長軸を揃えた状態で、左腓骨が近位を北東に向けて出土している。左腓骨と左脛骨がおおむね位置関係を保ちながらも関節状態を維持していないことから、左右ともに膝を立てた状態で埋葬され、軟部組織の腐朽に伴い左側に倒れたと考えられる。また、左右の脛骨遠位は上甕の南側に近接しており、その南側から左右の足根骨がまとまって出土している。このことから左右の足をそろえた状態であったと考えられる。

以上の出土状況から、合口甕棺の下甕に仰向けで頭から挿入され、上肢は、右肘を屈し右手を左胸部あたりにのせ、左肘は強屈した状態で手を肩にのせ、下肢は立膝の状態であったと考えられる。埋葬姿勢は仰臥屈葬と推定される。軟部組織の腐朽後に下肢は左側に倒れたと考えられる。また、頭蓋骨に関しては軟部組織腐朽に伴い、甕棺の傾斜に沿って前方に転じたものと考えられる。

【ST19】（第49図）

本人骨は、合口甕棺の下甕から全身が出土している。下甕の東側、上甕口縁部付近から頭蓋骨が、顔面を北西に、後頭骨を東側に向けた状態で出土している。頭蓋骨の下から下顎骨が、左側を西にむけた状態で出土しており、上下顎はほぼ咬合状態である。頭蓋骨は軟部組織が腐朽する前にやや北側に傾いたものと考えられる。

甕の中央、頭蓋骨の南側から胸骨から腰椎・仙骨までが連なった状態で出土しており、その周辺から肋骨が出土している。保存状態が良好ではないため関節状態にはないが、右肋骨は椎骨の右側、左肋骨は椎骨の左側から出土している。また、胸椎北側から胸骨柄が出土している。

下顎骨の西側からは左右鎖骨が出土しており、どちらも胸骨端を西側に向け胸骨付近によせた状

態である。椎骨の南側から左上腕骨が出土しており、上腕骨と関節状態を保って左尺骨が遠位を西に向けて出土している。左尺骨の上位からおよそ長軸を揃えた状態で左橈骨が出土している。左肘関節は内側に軽く屈し前腕は回内位にあったと考えられる。頭蓋骨の下位、椎骨の北側から右上腕骨が遠位を東側、前面を上に向けた状態で出土しており、右上腕骨の遠位付近から右橈骨が近位を北側、後面を上に向けた状態で出土している。右橈骨の西側から右尺骨が近位を北西、内側を上に向け出土しており、右尺骨と右橈骨の遠位は近接した状態である。右肘関節は軀幹骨側に屈し、前腕は回内位である。腰椎付近から手の指の骨が数点出土している。

左右寛骨は仙骨と関節状態を保って出土している。左大腿骨は左寛骨の上位、近位を南西側寛骨臼付近に、外側を上に向けた状態で出土しており、左大腿骨の遠位側付近から近位を接した状態で左脛骨が近位を北東、外側を上に向けた状態で出土しており、左腓骨が左脛骨に長軸を揃えた状態で出土している。右大腿骨は大腿骨頭を寛骨臼に接した状態で近位を南西、背側を上に向けた状態で出土しており、右大腿骨の遠位に近位を接して長軸を揃えた状態で右下腿の骨が近位を北東、内側を上に向けた状態で出土している。右脛骨の遠位付近より足根骨がまとまった状態で出土している。

以上の出土状況より、合口甕棺に足から挿入され、頭位を東に仰臥位で埋葬されたと考えられる。上肢は、右肘関節を軀幹側に屈し手を腹部上におき、左肘関節は軽く屈し手を腰のあたりに置いた状態、下肢は股関節・膝関節左右ともに強屈し、右側に傾けた状態で埋葬されたと考えられる。

【ST23】（第49図）

合口甕棺の下壺から人骨が出土している。頭蓋骨は下壺の南西側から右側頭部を上に向け、顔面を北に向けた状態で出土している。下顎骨は、頭蓋骨の北東側からオトガイを東側、左側下顎骨を上、咬合面を西側に向けた状態で出土している。上下顎は咬合状態ではなく、顎関節も関節状態を保っていない。本来頭位南向き、顔面北向きで埋葬されていたが甕の埋置角が急であったため、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が大きく動いたと考えられる。

下顎骨の北東側から右橈骨・左尺骨が近位を北東に向け、長軸を北東-南西に揃えた状態で出土している。右橈骨の北西側から左橈骨が近位を東に向けた状態で出土し、左橈骨の南西側から左尺骨が近位を南東に向け遠位を右尺骨の上位にのせた状態で出土している。左右ともに前腕は回内した状態と考えられる。このことから、左右の肘関節を屈曲させ、右手は肩関節部におき、左手は胸部付近にしていたと考えられる。

左橈骨の北側から椎骨が連なった状態で出土し、第4・第5腰椎は仙骨と関節状態を保ったまま出土している。仙骨の北西側から左寛骨が仙骨と関節状態を保って出土している。

左寛骨の東側から右大腿骨が近位を西側下方に向けて出土している。右大腿骨の北側から右脛骨が近位を東側上方に向けて出土している。右脛骨の南側から右腓骨が出土している。また、左寛骨の北側寛骨臼付近から左大腿骨が近位を南西側下方に向けた状態で出土しており、左股関節は関節状態を保っていると考えられる。左大腿骨の北西側から、左脛骨・左腓骨が近位を北東上方に向け背面を大腿骨側に向けた状態で出土しており、左膝関節は関節状態を保っていると考えられる。このことから、本来は左右ともに立膝の状態で埋葬されたと考えられる。

以上の出土状況より、本人骨は南を頭位にして足から下壺に挿入されたと考えられる。埋葬姿勢は両腕を屈し、右手は肩関節付近に、左手を胸部付近に置いた状態で、立膝の仰臥屈葬位であると考えられる。甕の傾斜に従って頭蓋が下壺の底部側に転じたものと推定される。

【ST24】

合口甕棺の上甕から人骨が出土している。本人骨の遺存状態は良好ではなく、骨片が残るのみであったため埋葬姿勢などは不明である。

【ST25】（第50図）

合口甕棺の下甕から人骨が出土している。下甕底部付近南西側から頭蓋骨片が、下甕底部付近の北東側から下顎骨片が出土している。頭蓋骨は残存状態が良好ではないが、残存する上顎骨と下顎骨の位置関係から上下顎は咬合状態にあったと考えられる。

下顎の東側から右上肢が出土しており、最も南側から前腕骨片と考えられる長管骨片が、その北側から上腕骨片が、その北側から右尺骨が近位を東に、外側を上に向けた状態で出土している。右尺骨の北側から手の基節骨が、左橈骨が近位を北東側に向けて出土している。右上肢は肘関節を強屈し、手を肩関節部分に置いた状態であったと考えられる。

右尺骨の北東側からは胸椎・腰椎・仙骨まで連なった状態で出土している。

仙骨と解剖学的位置関係を保った状態で左右の寛骨が腹側を上に向けた状態で出土している。左寛骨の上位、寛骨臼付近から左大腿骨が近位を北、後面を上に向けた状態で出土しており、遠位の上方から左脛骨が近位を南に前面を上に向けた状態で出土している。左脛骨と長軸をそろえた状態で左腓骨が出土している。右寛骨の東側から右大腿骨が長軸をおよそ南北に向けた状態で、右大腿骨の東側から右脛骨・右腓骨が長軸をおよそ南北にむけた状態で出土している。

以上の出土状況から、頭位を南西にむけ、仰向けの状態で頭から下甕に挿入されたものと考えられる。右肘関節は強屈し、手を肩関節に置いた状態、膝関節は立膝の状態であり、埋葬されていたものが、左右下肢の軟部組織の腐朽に伴い、下肢が左側に倒れたと推測される。

【ST27】（第50図）

合口甕棺の下甕から人骨が出土している。頭蓋骨は、顔面を西に、後頭部を東に向けた状態で、上下顎は咬合状態を保っている。

頭蓋骨の左右から左右の鎖骨がそれぞれ出土しており、ともに胸骨端を下甕の口縁方向に向けている。右鎖骨の北側から右肩甲骨が、そのさらに北側から右上腕骨が近位を北東に向けた状態で出土している。左鎖骨の南側から左上腕骨が近位を東に向けた状態で出土しており、左右の上腕骨はともに近位を東側に向け遠位をやや躯幹部分に寄せたような状態である。右尺骨と右橈骨は右上腕骨の南西側から出土しており、橈骨がより上腕骨側に位置する。そのため、左右前腕は回内し、右肘関節をやや軽屈した状態で出土しており、右手を骨盤付近にのせた状態と考えられる。

下肢は、右前腕の遠位端の下位より寛骨と考えられる骨片が出土している。右大腿骨が右前腕の西側、寛骨片の北側から長軸を南北に向けた状態で出土しており、それと長軸をそろえて右脛骨が出土している。左の大腿骨は寛骨片の南側から長軸を南北に向けた状態で出土している。寛骨片と大腿骨の位置関係が近接すること、右大腿骨と右脛骨の位置関係から、股関節・膝関節を強屈していたと考えられる。軟部組織の腐朽に伴い膝が左右に倒れ開いた状態となったと考えられる。

以上の出土状況から、頭位を東に向け、合口甕棺の下甕に仰向けの状態で頭から挿入され、埋葬姿勢は、肘を軽く曲げ、手を腹腔あたりにのせ、膝を立てた仰臥屈葬位であると推定される。

【ST30】

合口甕棺の下甕中央部から人骨が出土している。本人骨の遺存状態は良好ではなく、骨片が残るのみであったため埋葬姿勢などは不明である。

[ST31] (第51図)

合口甕棺の下甕から人骨が出土している。甕の南側、下甕の口縁部付近から頭蓋骨が顔面を北東側に向けて出土している。左下顎骨が外面を上に向けて出土しており、その東側から下顎体中央部がオトガイを上、咬合面を南西部に向けた状態で出土している。

下顎骨の北西側から左上肢が出土しており、左上腕骨が近位を南西に向けて、左前腕が近位を北東に向けて、頭蓋骨側から尺骨・橈骨・上腕骨の順で長軸をそろえて出土している。このことから、左肘関節は強屈し、手を肩関節あたりに置いた状態であったと考えられる。左上肢の東側から右前腕が近位を東に向け、長軸をそろえた状態で出土している。右上腕骨が残存していないが、前腕の位置から右肘関節は腹側に屈し手を左腹腔あたりに乗せた状態であったと考えられる。

右前腕の北側、遠位端の上位から左大腿骨が近位を北西、後面を上に向けた状態で出土している。左大腿骨の近位周辺に寛骨片と考えられる骨片が出土している。左大腿骨の遠位付近におおよそ近位を接する状態で左脛骨が近位を南、前面を上に向けて出土している。左脛骨の東側から右大腿骨が近位を南、後面を上にして、右脛骨が近位を南、前面を上にした状態で出土しており、その付近から右腓骨が出土している。このことから、左右の膝関節は関節状態を保って出土しており、膝を強屈し右側に倒した状態であったと考えられる。

以上の出土状況から、頭位を南西にして合口甕棺の下甕に足から挿入され、仰向けの状態で埋葬されたと考えられる。埋葬姿勢は右肘を屈し右手を左腹腔上にのせ、左肘は強屈し手を肩関節にのせた状態、下肢は膝関節を強屈し右側に倒した状態の、仰臥屈葬で埋葬されたと考えられる。

[ST32] (第51図)

合口甕棺の下甕から人骨が出土している。頭蓋骨片が下甕の南東側、底部付近から出土している。頭蓋骨の保存状態は良好ではないため上下顎の関節状態などは不明である。

頭蓋骨の北西側から右上腕骨と考えられる長管骨片が出土しており、右上腕骨の西側から右尺骨が近位を北、遠位を南に向けた状態で出土している。また、右橈骨が、右尺骨の西側に近接し、長軸を東西にした状態で出土している。右前腕は、本来肘関節を軽屈して手を腹部付近に置いていたものが、軟部組織の腐朽に伴い崩落した際に尺骨と橈骨が肘関節を起点として別方向に動いたと推定される。頭蓋骨の南西側からも左上腕骨が近位を南東に向けた状態で出土している。左上腕骨の北西側から左尺骨が近位を西に向けた状態で、また左橈骨が左尺骨の北側から、左尺骨と近接し長軸をそろえた状態で、近位を西に向けた状態で出土している。

左橈骨の西側から仙骨片・左寛骨片が出土している。仙骨片・左寛骨片の北側から、左大腿骨が近位を東に向けた状態で出土しており、さらにその北側から右大腿骨が近位を東に向けた状態で出土している。大腿骨と寛骨の間から左脛骨が近位を東、後面を上に向けて出土している。左脛骨遠位西側から左大腿骨頭が出土している。

以上の出土状況より、頭位を南東に向け、下甕に頭から挿入された状態で埋葬されたと推定される。保存状態が良好ではないが、仰向けの状態で右肘関節を屈し、左右股関節・膝関節は強屈した、仰臥屈葬位と考えられる。

[ST33] (第52図)

合口甕棺の下甕から人骨が出土している。頭蓋骨は下甕の南東側から頭頂部を東に、後頭部を上、顔面を下に向けて出土している。上顎骨は頭蓋骨の西側から咬合面を西に、前面を下に向けて出土している。下顎骨は、右側のみ残存しており、下甕の北側からオトガイを北に、内側を上に向けて出土している。上顎骨と下顎骨が離れた場所に位置することから顎関節は関節状態を保っていない

い。下顎骨の南側、頭蓋骨と下顎骨の間から椎骨・肋骨が出土している。

下顎骨の西側から右鎖骨が出土している。右鎖骨の南側から右上腕骨が近位を北、前面を上に向けた状態で出土している。右上腕骨の南東側から右尺骨が近位を北西、前面を上に向けて出土しており、上腕骨と尺骨の位置関係から解剖学的位置関係を保っていると考えられ、肘関節を軽く屈した状態である。左鎖骨は下顎の下位から出土している。右上腕骨の南側から左尺骨が近位を南西、内側を上に向けた状態で出土している。左尺骨の南西側から左橈骨が近位を東、後面を上に向けた状態で出土している。左橈骨と左尺骨は解剖学的位置関係を保っていない。

右尺骨の南側から右寛骨が出土している。右寛骨の西側から右大腿骨が近位を東、後面を上に向けた状態で出土しており、右股関節は関節状態をある程度保っていると考えられる。右大腿骨の南東側から右脛骨が近位を南西、内側を上に向けた状態で出土している。右脛骨の南東側から、左大腿骨が近位を北東、後面を上に向けた状態で出土している。左大腿骨の北西側から、左脛骨・左腓骨が近位を南西、内側を上に向けた状態で、長軸を南西-北東に揃えて出土している。このことから、左右膝関節は関節状態を保っていないものの、本来は立膝の状態であったものが右側に倒れたと考えられる。

以上の出土状況より、本人骨は北を頭位にして足から合口甕棺の下甕に挿入されたと考えられるが、甕の埋置角が急であったため、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が下甕側に落ち込んだと推定される。埋葬姿勢は仰向きで右肘関節を屈し、膝を立てた仰臥屈葬位であると考えられる。

【ST34】（第52図）

合口甕棺の下甕底部付近にかけて人骨が出土している。この墓は上甕が口縁部側を上、底部を下甕底部に向け、下甕の底部付近に落ち込んだ状態で検出されており、上甕の口縁付近北東端から頭蓋骨が顔面を南東、頭頂部を北に向けた状態で出土している。歯牙は上甕南西及び下甕内に散乱した状態である。

上甕口縁部東端直下から、右橈骨が前面を下、近位を南西にした状態で出土し、その直下から右尺骨が出土している。右前腕は長軸方向を揃えた状態で出土し解剖学的位置関係を保っている。頭蓋骨の直下から左橈骨が近位を西に向けた状態で出土している。右前腕の北東から左中手骨が近位を北西に向けた状態で出土している。

右前腕の東、下甕内から右大腿骨が遠位を上方に向け直立した状態で出土した。右大腿骨の北西から左大腿骨が遠位を上方に向け直立した状態で出土している。右大腿骨の直下から右脛骨が背面を上、近位を南東にした状態で出土している。右脛骨の北東から左脛骨・腓骨が近位を南東、背面を上にした状態で出土した。左右大腿骨は遠位を上にして直立した状態であり、左右脛骨・腓骨は近位を南側に向けて倒れており、膝関節は関節状態を保っていないが、立膝の状態でも埋葬され、軟部組織の腐朽に伴い脛骨が東側に倒れこんだものと考えられる。左脛骨の直下、右脛骨の北西から右距骨が出土しており、関節状態を保っている。

上顎の歯牙が歯槽骨とまとめて下甕底部付近から出土していること、前腕や下肢骨がおおむね関節状態を保つことから、軟部組織が腐朽する前に上甕が転落し下甕の中に落ち込んだと考えられる。頭蓋や上肢は上甕の転落に伴い大きく動いているが、下甕から出土した肢骨は原位置をほぼ保っている。

以上の出土状況から、本人骨は合口甕棺の下甕に足から挿入され、頭位を南西にし、仰向けで膝を立てた仰臥屈葬位の状態であったと推定される。

【ST36】

合口甕棺の下甕から部位不明の頭蓋骨片のみが出土しており、遺存状態が良好ではないことから埋葬姿勢は不明である

【ST39】

合口甕棺の破損した上甕口縁部・胴上部および、比較的残りの良い下甕口縁部にかけて人骨が出土している。頭蓋骨は上甕の北東側から顔面部を南西に、左側頭骨を上に向けて出土している。頭蓋骨の南西側から右尺骨が近位を北西に向けて出土している。右尺骨の南西側から右橈骨が出土している。頭蓋骨の西側から、左尺骨・左橈骨が近位を南西、前面を上に向けた状態で長軸を南西-北東にそろえて出土している。

頭蓋骨の北西側から右大腿骨が近位を南西、外側を上に向けた状態で出土している。右大腿骨の南西側から右脛骨が出土している。下甕口縁部中央付近、左尺骨の南西側から左大腿骨が近位を北東、背面を上に向けて出土している。また下甕口縁部西側、左大腿骨の西側から左脛骨が前面を上に向けて出土している。

以上の出土状況より、本人骨は北東を頭位にして足から下甕に挿入されたと考えられる。右肘関節を強く屈曲させていた可能性はあるものの、埋葬後に甕棺が崩れたことにより人骨が原位置を保っておらず、詳細な埋葬姿勢は不明である。

【ST41】

本人骨の遺存状態は良好ではなく、埋葬姿勢などは不明である。

2. 保存状態

【ST01】

〔人骨所見〕

本人骨の遺存状況は良好ではない。頭蓋骨は頭頂骨の一部と左側頭骨を除いて遺存している。下顎骨は左側下顎体・枝が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りある。

(u^1)			(i^2)			(i^2)			(u^1)	
m^2	m^1	○	○	○	i^1	○	○	m^1	m^2	
m_2	m_1	○	i_2	i_1	i_1	i_2	○	m_1	m_2	
/	/	(○)	(i_2)	(i_1)	(i_1)	(i_2)	/			(u_1)

(○)歯槽開放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c 齶歯 以下同様)

軀幹骨は椎骨片3点・不明肋骨1点が遺存している。

下肢骨の遺存状況は、右大腿骨の骨体部、その他、不明大腿骨片・不明腓骨片・不明脛骨片・指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は椎骨が癒合していないこと、乳歯の萌出状態と永久歯の形成状況から3歳前後の幼児と推定される。

〔特記事項〕

眼窩にクリブラ・オルビタリアが確認される。

【ST04】

〔人骨所見〕

本人骨の遺存状態は比較的良好である。頭蓋骨は前頭骨と後頭骨右側と頭頂骨、右側頭骨が遺存しており、顔面部は左側の眼窩上縁、頬骨を除いておおむね遺存している。下顎骨は左下顎枝を除きほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	o	P ¹	P ²	P ³	c	I ¹	I ²		I ¹	I ²	c	o	P ¹	P ²	P ³	o	o	o	
x	M _c	O	P ₁	P ₂	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M _c	M _c	M _c	M _c	M _c	M _c
	c																		c

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の $2^+ a-2^+ b$ である。

躯幹骨は、第1-2頸椎と第7頸椎、その他頸椎2点・上部胸椎3点・不明椎骨片・不明肋骨片が遺存している。

上肢骨の遺存状態は以下の通りである。左鎖骨は近位端以外が遺存している。左肩甲骨は関節窩の一部と烏口突起が、右肩甲骨は関節窩から烏口突起までが遺存している。左右上腕骨は骨体部が遺存している。右橈骨は手根関節面を除く遠位側骨体部が一部遺存している。

下肢骨の遺存状況は以下の通りである。左右大腿骨は骨頭の一部と骨体部はおおむね遺存している。左右脛骨はともに内側上関節面から骨体部までがおおむね遺存している。左腓骨は骨体部がおおむね遺存している。その他、不明中節骨と思われる骨が1点遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・乳様突起の発達から男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度が橋原（1957）の $2^+ a-2^+ b$ であることから熟年であると推定される。

〔特記事項〕

鼻骨に治癒した骨折の痕跡が認められる。

上顎の左右第一切歯間に過剰歯がみられる。上顎左側第一小臼歯の歯槽窩が小さいことから矮小歯だった可能性がある。

下顎左側第二・第三大臼歯、下顎右側第二大臼歯は齲蝕である。齲蝕の進行度は、下顎左側第二・第三大臼歯が C₂、下顎右側第二大臼歯が C₃ を示す。下顎右第一大臼歯の歯槽に齲蝕由来の膿胞の痕跡がみられる。

左右脛骨と左腓骨に骨膜炎による肥厚がみられる。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、頭蓋最大長が175mmで比較群中において最小の値を示す。顔高が124mmで隈・西小田弥生人骨と近似する。鼻幅は25mmであり、比較群中で最小の値を示す。鼻高は56mmで比較群中において最大の値である。鼻示数は44.6で狭鼻型を示す。全側面角は81.5°で比較群中において最小の値を示し、津雲・吉胡人骨と同じ値である。歯槽側面角は、81°であり、比較群中で最大の値である。前眼窩間幅は19mmで、これは北部九州弥生人骨と同様の値であり、比較群中において中間的な値を示す。鼻根横弧長は、27mmであり比較群中において最大の値を示す。鼻根湾曲示数は70.4で、比較群中において最小の値を示し、鼻根部がやや突出している傾向を示すが、本個体の鼻根部に治癒した骨折所見が認められることと関連する可能性もある。鼻根最小幅は9.5mmで、西北九州弥生人骨に次いで2番目に大きい値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が32mmであり、比較群中で小さな値を示す一方、下顎枝高は66mm、下顎枝幅は37.5mmを示し、それぞれ比較群中で二番目に大きい値、ないし最大の値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径は39.3mm、栄養孔位横径は28.2mm、栄養孔位周は105mmでいずれも比較群中で最大の値であり、栄養孔位断面示数は71.6であり比較群中で中間の値を示す。ヒラメ筋線

の後方への突出がやや明瞭であることも一つの要因であるが、特定部位の筋発達というよりむしろ脛骨が全体的に太いことに起因する。

[ST07]

[人骨所見]

本人骨の保存状態は極めて良好である。頭蓋骨は左頬骨以外ほぼ完存している。下顎骨は左下顎骨を欠損するがほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	M ¹	O	A	P ¹	A	O	I ¹	I ¹	I ¹	x	x	x	O	M ¹	x
O	x	M ₂	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	x	M ₂	M ₁	x

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2⁺a-3⁺である。

軀幹骨は、椎骨は完存しており、左肋骨10点・右肋骨10点・胸骨が遺存している。仙骨は第一仙椎から第三仙椎部分までと耳状面付近が遺存している。

上肢骨の残存状態は以下の通りである。左鎖骨は胸骨端から骨体部にかけて遺存し、右鎖骨はほぼ完存している。左肩甲骨は鳥口突起と関節窩から外側縁が遺存し、右肩甲骨は関節窩から鳥口突起にかけて遺存している。左上腕骨は骨体部と上腕骨滑車付近が遺存し、右上腕骨は骨頭から骨体中央部あたりまで遺存している。左橈骨は手根関節面の一部以外遺存し、右橈骨はほぼ完存している。左右尺骨は肘頭付近以外ほぼ完存している。その他、右手骨は中手骨4点・基節骨3点・中節骨5点・末節骨1点・有頭骨が遺存している。

下肢骨の残存状況は以下の通りである。左右寛骨は坐骨の一部と腸骨の一部以外遺存している。左大腿骨は外側顆と骨体部が遺存し、右大腿骨は大腿骨頭部以外ほぼ完存している。左脛骨は内果と上関節面以外が遺存し、右脛骨は内果以外ほぼ完存している。左腓骨片が遺存し、右腓骨は骨体部が遺存している。左足骨は第一から第三中足骨・踵骨・舟状骨・距骨・内側楔状骨・中間楔状骨が遺存し、右足骨は中足骨2点・舟状骨・踵骨・距骨・第二楔状骨が遺存している。

[性別と年齢]

性別は眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達していないこと、恥骨下角が大きいことから女性と判定される。年齢は恥骨結合面が phase6(Sakaue2006)、耳状面が Phase7.8 (Lovejoy1985)、歯牙咬耗度が橋原(1957)の2⁺a-3⁺であることから熟年後半-老年であると推定される。

[特記事項]

上顎右側犬歯・第二小臼歯は齶蝕である。齶蝕の進行度はC₁を示す。腰椎にリッピングが認められる。また左橈骨の遠位端付近に骨折の所見が認められる。遠位骨端の背側転位が確認され、骨折線は関節内に確認されることから Gartland I型と考えられる(田島1990)。手を背屈位にして転倒することで発生し、現代では中年以降骨萎縮を生じた女性に頻度が高い傾向がある。背側に転位した状態で変形治療している。

[形質的特徴]

頭蓋骨は、最大長が182mm、頭蓋最大幅が145mmであり、比較群中で最大の値を示す一方、Ba-Br高は129mmと比較群中でも小さい値を示す。頭長幅示数は79.7で中頭であり、これは横隈狐塚人骨と同様の値であり、比較群中でも大きな値である。一方、頭長高示数は70.9で高頭、頭幅高示数は88.9で平頭であり、それぞれ比較群中において最小の値を示す。中顔幅は100mmであり、これは横隈狐塚第7次人骨と同様の値であり、比較群中でも大きい値を示す。顔高は109.5であり、比較群中において小さい値を示す。上顔高は72mmで隈・西小田人骨と近い値を示し、比較群中で

も大きい値をとる。ウィルヒョウ顔示数は、109.5で西北九州弥生人骨と同じ値で、比較群中において中間の値をとり、過低顔を示す。ウィルヒョウ上顔示数は72で隈・西小田人骨と同じ値で、比較群中において大きい値をとり、低顔を示す。眼窩幅は40.5mmで、比較群中で低い値を示す。眼窩高は33mmで、比較群中で中間の値を示す。眼窩示数は81.5で中眼窩を示す。鼻幅は26mmであり比較群中で中間の値を示し、鼻高は51mmで比較群中でも大きい値を示す。鼻示数は50.9で中鼻であり、比較群中でも大きい値を示す。全側面角は81.1°で中顎であり、比較群中において最小の値を示す。歯槽側面角は71°で中顎であり、比較群中において中間の値を示す。前眼窩間幅は19mmであり、土井ヶ浜弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きな値を示す。鼻根横弧長は28mmであり、比較群中で最大の値を示す。鼻根湾曲示数は67.9で、比較群の値と比べて大幅に小さい値を示し、鼻根最小幅は9mmで、比較群中で大友弥生人骨に次いで二番目に大きい値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が28mmであり、比較群中でも小さい値を示す。下顎枝高は56mmであり、比較群中において中間の値を示す。下顎枝幅は37.5mmであり、比較群中で最大の値を示す。

尺骨は、最小周が35mmであり、比較群中において横隈狐塚弥生人骨に次いで2番目に大きい値を示す。尺骨矢状径が11.2mmであり、これは北部九州弥生人骨と同様の値であり、比較群中において中間的な値を示す。尺骨横径は15.9mmで、大友弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において最大の値を示し、骨間縁の発達が明瞭である。骨体断面示数は70.4で北部九州弥生人骨と近似し、比較群中において北部九州弥生人骨に次いで2番目に小さい値を示す。

大腿骨は、骨体上横径が29.5mm、骨体上矢状径は22.3mm、骨体上断面示数は75.6で、比較群中においてそれぞれ中間的な値を示す。縄文時代人骨のような柱状性の形成はみられないが、大腿骨の粗線に付着する筋群の発達は明瞭である。

脛骨は、栄養孔位最大径は28mmで比較群中において最小の値を示す。これはヒラメ筋線の後方への突出が明瞭でないことに起因する。栄養孔位横径は20.6mm、栄養孔位周は80mm、最小周は65mmであり、それぞれ比較群中において小さい値を示す。栄養孔位断面示数は73.7mmで比較群中において大きい値を示す。

[ST10]

[人骨所見]

遺存状況は良好である。頭蓋骨はほぼ完存し、下顎骨は、右下顎枝の一部以外は遺存している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

○	■	□	△	△	○	I ²	I ¹	I ¹	I ²	○	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₂	M ₂	O	△	△	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2° a-2° bである。

軀骨の遺存状況は以下のとおりである。椎骨については、頸椎1点、胸椎12点、腰椎5点が遺存している。肋骨については、左肋骨第1・第2・第3肋骨とその他の左肋骨片が少なくとも5点、右は第1肋骨・第2肋骨とその他右肋骨が少なくとも7点、ほかに不明肋骨片が遺存している。胸骨については、胸骨柄は完存しているが、胸骨体は小片のみ遺存している。

上肢骨の遺存状況は以下の通りである。左右鎖骨はともに完存している。左右肩甲骨はともに烏口突起から関節窩、外側縁が遺存している。左上腕骨は骨頭の後面と滑車を除き完存している。右上腕骨は上腕骨頭と骨体部、上腕骨滑車部がそれぞれ遺存している。左右ともに尺骨・橈骨は完存している。左手は有頭骨と舟状骨が遺存している。左右不明の基節骨・中手骨が計14本遺存して

いる。

下肢骨の遺存状況は以下の通りである。左右寛骨は耳状面付近以外はほぼ完存している。仙骨は仙骨底から第2仙骨孔付近まで遺存している。左大腿骨は大転子部以外遺存し、右大腿骨は完存している。左右膝蓋骨は上面の一部を欠損している。左右ともに脛骨はほぼ完存している。左腓骨は遠位端と骨体部が遺存し、右腓骨は完存している。右腓骨の近位には関節炎が認められる。左足は、舟状骨・距骨・第1中足骨・第2中足骨が完存しており、踵骨は破片として遺存している。右足は、舟状骨・距骨・第1中足骨が完存している。そのほかにも中足骨片が多数遺存している。

[性別と年齢]

性別については、眼窩上隆起や乳様突起が発達していること、恥骨下角と大坐骨切痕の角度が小さいことから男性と判定される。

年齢については、歯牙咬耗度が柘原(1957)の2° a-2° bであること、恥骨結合面が phase5-6(Sakaue2006)であることから熟年-老年であると推定される。

[特記事項]

第4胸椎、第1腰椎-第5腰椎には重度の骨棘形成が認められ、変形性脊椎症と考えられる。肋骨には肋軟骨の骨化が認められる。右膝蓋骨には関節炎が認められる。右脛骨の遠位に骨膜炎が認められる。肩甲骨関節窩や大腿骨遠位関節面に骨増殖が認められるが、いずれも軽度であり、椎骨の関節症と比較すると関節症の重症度が低い。左右の脛骨の遠位脛骨幹部に重度の骨膜炎が確認された。

[形質的特徴]

頭蓋骨は、頭蓋最大長が185.5mmで、横隈狐塚第7次弥生人骨に次いで2番目に大きい値を示す。頭蓋最大幅は154.5mm、Ba-Br高は142mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。頭長幅示数は83.2で短頭であり、これは比較群中において最大の値を示す。頭長高示数は76.5で高頭であり、これは比較群中において中間的な値を示す。頭幅高示数は91.9で平頭であり、比較群中において最小の値を示す。頬骨弓幅は141mmで、比較群中において中間的な値を示す。中顔幅は102mmで、比較群中において小さい値を示す。顔高は127mmで、横隈狐塚第7次弥生人骨と近似し、2番目に大きい値を示す。上顔高は75.5mmで、隈・西小田人骨と同様の値を示し、比較群中において大きい値を示す。コルマン顔示数は90.0で高顔の狭顔、コルマン上顔示数は53.5で中上顔であり、それぞれ比較群中において大きい値を示す。ウィルヒョウ顔示数は124.5で正顔であり、横隈狐塚Ⅱ弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において同人骨に次いで2番目に大きい値を示す。ウィルヒョウ上顔示数は74.0で低顔であり、比較群中において横隈狐塚第7次弥生人骨に次いで2番目に大きい値を示す。眼窩幅は42mmであり、比較群中において最小の値を示す。眼窩高は35mmで、他の北部九州弥生時代人骨と大差なく、比較群中において大きい値を示す。眼高示数は83.3で中眼窩であり、比較群中において最大の値を示す。鼻幅は26mmで横隈狐塚Ⅱ弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において小さい値を示す。鼻高は51.1mmであり、比較群中において小さい値を示す。鼻示数は50.8で中鼻であり、比較群中において小さい値を示す。全側面角は86.5°で正顎、歯槽側面角は83°で中顎であり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。前眼窩間幅は19.5mmで、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において大きい値を示す。鼻根横弧長は30mmで、比較群中において最大の値を示す。鼻根湾曲示数は65で比較群中において最小の値を示す。鼻根最小幅は10mmと、西北九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において同人骨に次いで2番目に大きい値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が37mmで比較群中において最大の値を示す。下顎枝高は62mmで比較群中において小さい値を示す。下顎枝幅は37mm、下顎枝示数は59.6であり、それぞれ比較群中において大きい値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が69mmで比較群中において最大の値を示す。

橈骨は、最大長が251mm、機能長が233mm、最小周が45mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。骨体横径は17.7mmで比較群中において大きい値を示す。骨体矢状径は12.2mmで比較群中において中間的な値を示す。骨体矢状径が比較群中において中間的な値を示す一方、骨体横径が比較群中において大きい値を示すことから、骨体断面示数は68.7と比較群中において小さい値を示す。骨間線の発達が明瞭であることと関連する。骨体中央横径は16.2mmで、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において小さい値を示す。骨体中央矢状径は12.9mmで、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。骨体中央断面示数は79.9と比較群中において最大の値を示す。長厚示数は19.3であり比較群中において小さい値を示す。

尺骨は、最大長が273mm、機能長が241mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。最小周は39mmであり比較群中において大きい値を示す。尺骨矢状径は15.2mmで比較群中において最大の値を示す。尺骨横径は18mmで、横隈狐塚第7次弥生人骨と同様の値を示し、同人骨とともに比較群中において最大の値を示す。長厚示数は16.2で、比較群中において小さい値を示す。骨体断面示数は84.4で、比較群中において大きい値を示す。骨間線の発達も明瞭であるが、周径が大きいことからわかるように頑丈な傾向にある。

大腿骨は、骨体中央部矢状径が30mm、骨体中央部横径が29.7mm、骨体中央周が94mmで、それぞれ比較群中において大きい値を示す。骨体上横径は34mmで、比較群中において最大の値を示す。骨体上矢状径は28mmで、比較群中において大きい値を示す。骨体中央断面示数は101で、比較群中において最小の値を示す。骨体上断面示数は82.2で、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において小さい値を示す。縄文時代人骨のような大腿骨の柱状性は形成されていないが、粗線に付着する筋群の発達は明瞭である。

脛骨は、全長が374mm、最大長が380mm、中央最大径が35.5mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。一方、中央横径は19.2mmと比較群中において最小の値を示す。栄養孔位最大径は37.3mmで、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において最大の値を示す。一方、栄養孔位横径は22.4mmと比較群中において最小の値を示す。骨体周は91mm、栄養孔位周は99mm、最小周は80mmであり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。中央断面示数は、中央横径が小さく中央最大径が大きいことから、54と比較群中において最小の値を示す。栄養孔位断面示数も同様に、栄養孔位横径が小さく栄養孔位最大径が大きいことから、60.1と比較群中において最小の値を示す。長厚示数は21.3であり、比較群中において最小の値を示す。左脛骨のヒラメ筋線は、上部に隆起が形成されるのみであり、栄養孔位最大径の値は鉛直線の形成によって考えると考えられる。右脛骨のヒラメ筋線の発達は明瞭であることが、下腿の栄養孔位最大径の左右差の要因である。腓骨の周径が大きく腓骨中央周／脛骨中央周の比が縄文時代人骨に近い値になっているが、筋の起始部の凹みは縄文時代人骨ほど明瞭とは言えない。

[ST12]

[人骨所見]

遺存状態は良好ではない。頭蓋骨は右側錐体が遺存するのみである。四肢骨は詳細部位不明の長管骨が遺存するのみである。歯牙の残存状況は以下の通りである。



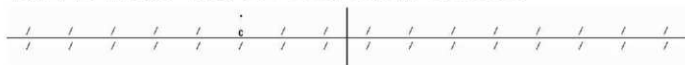
〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。下顎左側第2乳臼歯が遺存していることから、10歳以下の未成人である。

〔ST13〕

〔人骨所見〕

遺存状態は良好ではない。頭蓋骨は前頭骨・頭頂骨・右側頭骨の一部、右頬骨が遺存している。下顎はオトガイ隆起部が一部遺存している。残存歯式は以下の通りである。



上肢骨は、左右橈骨・右尺骨・左中手骨の骨体部のみが遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨・左右脛骨、中足骨の骨体部のみが遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は推定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔ST14〕

〔人骨所見〕

遺存状況はやや良好である。頭蓋骨はほぼ完存している。下顎骨は右下顎頭以外遺存している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。



歯牙咬耗度は柘原(1957)の1° c-2° bである。

軀幹骨の遺存状況は以下のとおりである。椎骨は環椎・軸椎と小片が遺存している。

上肢の遺存状況は以下の通りである。左鎖骨は肩峰端以外が遺存している。左肩甲骨は烏口突起から関節窩、外側縁が、右肩甲骨は烏口突起から関節窩、外側縁が遺存している。左上腕骨は小片のみが遺存している。左橈骨は骨体部が遺存しているが小片である。右上腕骨は骨体部が遺存している。右尺骨は完存している。右橈骨は小片のみ遺存している。中手骨が1本、手根骨側を欠いて遺存している。

下肢の遺存状況は以下のとおりである。左大腿骨・右大腿骨は骨体部が遺存している。左脛骨は骨体部が遺存しているがいずれも骨片である。右脛骨はほぼ風化しており遺存状況は非常に悪い。その他小片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼高上隆起や乳様突起が発達していることから、男性と判定される。

年齢は、歯牙咬耗度が柘原(1957)の1° c-2° bであることから、熟年と推定される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、頭蓋最大長が178mmで、比較群中において最小の値を示す。一方、頭蓋最大幅は151mmで、比較群中において最大の値を示す。Ba-Br高は140mmで、横隈孤塚第7次弥生人骨と近

似した値を示し、比較群中において大きな値を示す。頭長幅示数は85.3で過短頭であり、比較群中において最大の値を示す。頭長高示数は78.6で高頭であり、比較群中において大きな値を示す。頭幅高示数は92.1で中頭であり、比較群中において最小の値を示す。頬骨弓幅は137mmで、横隈狐塚第7次弥生時代人骨と同様の値を示し、比較群中において中間的な値を示す。中顔幅は100mmで、比較群中において最小の値を示す。顔高は133.5mm、上顔高は81mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。コルマン顔示数は95.3で高顔の過狭顔、コルマン上顔示数は57.8で高上顔の狭上顔、ウィルヒョウ顔示数は131.8で狭顔、ウィルヒョウ上顔示数は80で狭顔であり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。鼻幅は25mmで比較群中において最小の値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が41.8mmで、比較群中において最大の値を示す。

尺骨は、骨間縁の発達が明瞭であるため、尺骨矢状径が14.9mmと比較群中において最大の値を示す。尺骨横径は17.5mmで、その他の弥生人骨との間に大きな差はみられない。骨体断面示数は84.9であり、比較群中において大きな値を示す。

[ST16]

[人骨所見]

本人骨の遺存状況は非常に良好である。頭蓋はほぼ完存し、下顎骨も左下顎頭以外はほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

x	x	o	P ²	P ¹	o	o	o	o	o	o	x	x	x	x	x
x	x	x	P ₂	P ₁	c	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	c	P ₁	o	/	△	o

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2° a-2° bである。

軀幹骨は、胸椎8点・腰椎5点・仙骨片・左肋骨片10点・右肋骨片11点が遺存している。

上肢骨の遺存状態は以下の通りである。右鎖骨がほぼ完存し、左鎖骨は胸骨端以外が遺存する。右肩甲骨は鳥口突起から関節窩までが遺存している。右上腕骨は遠位側および遠位関節面以外が遺存し、左上腕骨は近位・遠位骨端以外が遺存している。左右橈骨及び左右尺骨は遠位端以外が遺存している。また、左右の有頭骨、右月状骨、左第1中手骨、右第2中手骨、右第3基節骨が遺存している。

下肢骨の遺存状態は以下の通りである。左右共に寛骨は、恥骨部以外は遺存している。大腿骨は左右共に骨体部が遺存している。右脛骨は遠位端以外、左脛骨は近位端以外が遺存している。腓骨は左右共に骨体部が遺存している。また、左右距骨、右第1基節骨、左内側楔状骨、中手骨1点が遺存している。

[性別と年齢]

眼高上隆起・乳様突起・外後頭突起が発達していることから性別は男性であると判定される。また、恥骨結合面がPhase4 (Sakaue2006)、耳状面がPhase6-8(Lovejoy1985)であることから熟年-老年と推定される。

[特記事項]

第2・3腰椎が癒合し、その他腰椎および第12胸椎にも重度の骨棘形成が認められ、変形性脊椎症と考えられる。左尺骨・橈骨および右橈骨の関節面に関節炎の所見が認められる。

[形質的特徴]

頭蓋骨は、頭蓋最大長が187.5mm、頭蓋最大幅が153mmであり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。Ba-Br高が138mmで、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において

大きい値を示す。頭長幅示数は816で短頭であり、比較群中において最大の値を示す。頭長高示数は736で中頭であり、比較群中において小さい値を示す。頭幅高示数は90.1で平頭であり、比較群中において最小の値を示す。頬骨弓幅は143.9mmで比較群中において最大の値を示す。中顔幅は105.5mmで、比較群中において大きい値を示す。顔高は127.1mmで、横隈狐塚第7次弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。上顔高は77mmで、比較群中において最大の値を示す。コルマン顔示数は88.3で中顔であり、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において中間的な値を示す。コルマン上顔示数は535で中上顔であり、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。ウィルヒョウ顔示数は120.4で正顔であり、比較群中において大きい値を示す。ウィルヒョウ上顔示数は72.9で低顔であり、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。眼高幅は44mmであり、比較群中において最大の値を示す。一方、眼高は32mmで比較群中において最小の値を示す。眼高示数は、眼高が小さく眼高幅が大きいこと、72.7と低眼高であり、比較群中において最小の値を示す。鼻幅は29mm、鼻高は57mmであり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。鼻示数は50.8で中鼻であり、比較群中において中間的な値を示す。全側面角は84.5°で中顎であり、北部九州弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において最大の値を示す。歯槽側面角は78.5°で突顎であり、比較群中において最大の値を示す。前眼高間幅は19mmで、北部九州弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において大きい値を示す。鼻根横弧長は28mmで、比較群中において最大の値を示す。鼻根湾曲示数は67.8であり、比較群中において最小の値を示す。鼻根最小幅は10mmで比較群中において大きい値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が69mmで、比較群中において最大の値を示す。三角筋粗面の発達は明瞭である。

橈骨は、最小周が45mm、骨体横径が18.9mm、骨体矢状径が13.4mmであり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。骨間縁の発達は明瞭であるが橈骨は全体的に頑丈である。骨体断面示数は70.8であり、比較群中において小さい値を示す。

尺骨は、尺骨矢状径が13.6mmで、比較群中において最大の値を示す。尺骨横径は17.4mmであり、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。橈骨と同様、骨間縁の発達は明瞭で、かつ全体的に頑丈である。骨体断面示数は77.9であり、比較群中において小さい値を示す。

大腿骨は、骨体上横径は30.1mmで、比較群中において最小の値を示す。骨体矢状径は27.3mmで、比較群中において大きい値を示す。上骨体断面示数は、骨体上横径が大きく骨体矢状径が小さいことから、90.6と比較群中において最大の値を示す。縄文時代人骨のような柱状性の形成はみられないが、粗線に付着する筋群の発達は明瞭である。

脛骨は、栄養孔位最大径は36.3mmで、北部九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。栄養孔位横径は27.8mm、栄養孔位周は100mm、最小周は84.5mmであり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。栄養孔位断面示数は76.5で、比較群中において最大の値を示す。左右ともにヒラメ筋線の発達も顕著であるがそれ以上に鉛直線の形成が明瞭である。

[ST19]

[人骨所見]

本人骨の遺存状態は良好である。頭蓋骨は右頬骨と右側頭骨以外ほぼ完存している。下顎骨は左下顎角以外遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ¹	x	O	Δ	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ¹	
M ₂	x	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	Δ	Δ	M ₁	M ₂
			C	C						C	C	C		

歯牙咬耗度は橋原（1957）の2° a-2° bである。

躯幹骨の残存状態は以下の通りである。第5 - 第12胸椎が遺存しているが、それよりも上位のものも破片のみ遺存している。腰椎は第1 - 第5まで遺存している。左右の第一肋骨、左肋骨片4点、右肋骨片が6点、胸骨柄、胸骨体片が遺存している。

上肢の遺存状態は以下の通りである。左右鎖骨は肩峰端以外遺存している。右肩甲骨は関節高周辺のみ遺存している。左右上腕骨は近位側及び骨頭以外遺存している。左橈骨は完存している。右橈骨は橈骨頭以外遺存している。左右尺骨は肘頭以外遺存している。

下肢の遺存状態は以下の通りである。仙骨は仙骨底の一部のみ遺存している。左寛骨は恥骨上枝と坐骨恥骨枝以外が遺存している。右寛骨は恥骨結合面を含む恥骨の一部と腸骨の一部が遺存している。左大腿骨はほぼ完存している。右大腿骨は遠位端以外遺存している。左右脛骨はほぼ完存している。左腓骨は腓骨頭以外遺存している。右腓骨は骨体部のみ遺存している。その他、右距骨、右踵骨、右立方骨、右舟状骨、右外側楔状骨がほぼ完存している。また、左距骨、左踵骨、左右第一中足骨、右中足骨が1点、左中足骨が1点、左右不明中足骨が6点、左右不明基節骨が3点、左右不明の膝蓋骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

眼窩上隆起・外後頭隆起・乳様突起が発達していること、恥骨下角が小さいことから男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度が橋原（1957）の2° a-2° bであること、恥骨結合面がPhase5（Sakaue 2006）であることから熟年と推定される。

〔特記事項〕

顔面と鎖骨に赤色顔料が認められる。また、上顎の大臼歯部に歯周病の所見が認められる。下部胸椎に重度の、腰椎に中度の骨棘形成が認められる。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、頭蓋最大長が183mmであり、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において中間的な値を示す。Ba-Br高は142mmで、比較群中において最大の値を示す。頭長高示数は77.6で高頭であり、比較群中において大きい値を示す。顔高は128mmであり、比較群中において最大の値を示す。上顔高は75mmで、北部九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において大きい値を示す。眼窩幅は43mmで、隈・西小田弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において大きい値を示す。一方、眼窩高は33.4mmであり、比較群中において小さい値を示す。眼窩示数は77.6と中眼窩であり、眼窩高が小さく眼窩幅が大きいため比較群中において小さい値を示す。鼻幅は29mm、鼻高は54mmであり、比較群中において最大の値を示す。鼻示数は53.7で広鼻であり、比較群中において大きい値を示す。全側面角は86°で正顎であり、比較群中において最大の値を示す。歯槽側面角は67°で過突顎であり、比較群中において最小の値を示す。前眼窩間幅は235mm、鼻根横弧長は31mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。鼻根湾曲示数は75.8で、比較群中において最小の値を示す。鼻根最小幅は9mmで、横隈孤塚第7次弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において大きい値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が37.5mmで、比較群中において最大の値を示す。下顎枝高は68.8mmで、

横隈狐塚第7次弥生人骨と同様の値であり、比較群中において最大の値を示す。下顎枝幅は39mmで、比較群中において最大の値を示す。下顎枝示数は65で、比較群中において最大の値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が67mmで横隈狐塚第7次弥生人骨と同様の値を示し、比較群中において最大の値を示す。

橈骨は、最小周が46mmで、比較群中において最大の値を示す。骨体横径は17.3mmで、比較群中において中間的な値を示す。骨体矢状径は14.4mmで、比較群中において最大の値を示す。骨体断面示数は83.5であり、比較群中において最大の値を示す。

尺骨は、最小周が42.5mm、尺骨矢状径が16mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。尺骨横径は17.9mmで、比較群中において大きい値を示す。骨体断面示数は89.3で、比較群中において最大の値を示す。橈骨・尺骨ともに骨間縁の発達はやや明瞭である。

大腿骨は、骨体上横径が31mmで、比較群中において小さい値を示す。一方、骨体上矢状径は27mmで、比較群中において大きい値を示す。縄文時代人骨ほどではないが柱状性の形成がみられる。上骨体断面示数は、骨体上矢状径が大きく骨体上横径が小さいことから、87と比較群中において大きい値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径が40.4mmで、比較群中において最大の値を示す。栄養孔位横径は25mmで、比較群中において大きい値を示す。栄養孔位周は100mm、最小周は82mmで、それぞれ比較群中において最大の値を示す。栄養孔位断面示数は61.8で、比較群中において最小の値を示す。鉛直線の形成は見られないがヒラメ筋線の発達は明瞭である。

腓骨は、最小周が43mmで、比較群中において最大の値を示す。

[ST23]

[人骨所見]

本人骨の遺存状態は比較的良好である。頭蓋骨は前頭骨の右側・右頭頂骨の一部・右蝶形骨・右側頭骨・後頭骨の右側が遺存し、顔面骨は右眼窩上隆起・鼻骨の一部が遺存する。下顎骨は右オトガイ孔及び下顎体の一部を除く下顎骨右側が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである

•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	
M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	/	C	P ¹	P ²	/	M ¹	M ²
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•

歯牙の咬耗度が橋原(1957)の2° a-2° bである。

椎骨は腰椎の一部・仙骨の一部が遺存する。

上肢骨は左右橈骨の骨体部・左右尺骨の骨体部が遺存する。

下肢骨は、左脛骨及び左恥骨の一部、左右大腿骨の骨体部・左右脛骨の骨体部・左右腓骨の骨体部が遺存する。

[性別と年齢]

性別は、外後頭隆起・眼窩上隆起・乳様突起が発達していないこと、前頭結節が発達していることから、女性と判定される。年齢は、冠状縫合・矢状縫合の内板が閉鎖し、ラムダ縫合の内板が閉鎖途中であること、外板は全て閉鎖途中であることに加え、歯牙の咬耗度が橋原(1957)の2° a-2° bであることから、成年後半-熟年であると推定される。

[形質的特徴]

橈骨は、最小周が37.5mmで、他の弥生時代人骨と大きな差はない。

尺骨は、最小周が36.5mmで、横隈狐塚第7次弥生人骨と同様の値であり、比較群中において最

大の値を示す。尺骨矢状径は11.6mmで、その他の弥生人骨と大きな差は無い。尺骨横径は16.9mmで、比較群中において最大の値を示す。骨間縁の発達是不明瞭である。骨体断面示数は骨体横径が大きいためから68.6と、比較群中において最小の値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径は29.6mmで、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位横径は22.2mmで、北部九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において中間的な値を示す。栄養孔位周は83mmで、他の弥生人骨と大きな差はみられない。最小周は69mmで、隈・西小田弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において同人骨に次いで2番目に大きい値を示す。栄養孔位断面示数は72.8で、比較群中において中間的な値を示す。最大径や小さいことからわかるようにヒラメ筋線の発達は不明瞭である。本個体は大腿骨の粗線の発達も不明瞭であり、全身的に筋付着部の発達が低い。

腓骨は、最小周が35mmで、比較群中において中間的な値を示す。

[ST24]

[人骨所見]

本人骨の遺存状態は良好ではない。詳細部位不明の長管骨片が遺存するのみである。

[性別と年齢]

遺存状態が良好ではないため、性別・年齢ともに不明である。

[ST25]

[人骨所見]

本人骨の保存状態は良好ではない。頭蓋骨は前頭骨片・左頬骨・上顎骨が遺存している。下顎骨は下顎体と左側下顎頭が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。また、不明歯冠片が遺存している。

/	/	/	/	/	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	/
M ₂	/	/	/	/	/	I ₂	I ₁		x	x	x	x	x	x

歯牙咬耗度は橋原（1957）の2° a-2° bである。

躯幹骨は胸椎2点、腰椎5点、仙骨片が遺存している。

上肢骨は、左右橈骨および左右尺骨が骨体部のみ遺存している。その他、基節骨が2点と部位・左右不明の指骨が5点遺存している。

下肢骨は、右寛骨片および左寛骨の恥骨部が遺存している。右大腿骨は骨体部のみ遺存し、左大腿骨は骨頭から骨体部までが遺存している。左脛骨は近位関節面から骨体部まで、右脛骨は骨体部のみが遺存している。左右腓骨は骨体部のみ遺存している。また左第一基節骨が1点遺存している。

[性別と年齢]

性別は大頭骨頭のサイズや四肢の周径から男性の可能性が高いと考えられる。年齢は歯牙咬耗度が橋原の2° a-2° bであることから熟年以上と推定される。

[特記事項]

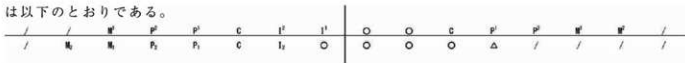
脛骨骨体部に軽度の骨膜炎がみられる。

[ST27]

[人骨所見]

本人骨の遺存状況は良好ではない。頭蓋骨は前頭骨・左右頭頂骨・右側頭骨が、顔面骨は左眼高部と鼻骨、上顎骨が遺存している。下顎骨は右側の下顎体の一部が遺存している。残存歯牙の歯式

は以下のとおりである。



歯牙咬耗度は橋原(1957)の1° a-2° aである。

上肢骨は左肩甲骨片・右鎖骨の一部が遺存している。左上腕骨は骨体部のみが遺存しており、右上腕骨は近位側骨体と上腕骨滑車部が遺存している。左右尺骨は骨体部が遺存している。その他、橈骨片・左有頭骨・中手骨片が遺存している。

下肢骨の遺存状況は以下の通りである。左右寛骨は大坐骨切痕周辺および恥骨の一部が遺存している。右大腿骨の骨体部中央部および左大腿骨の骨頭と近位側骨体部が遺存している。右脛骨のヒラメ筋線周辺骨体と左右不明の腓骨片が遺存している。

また、詳細部位は不明であるが基節骨片・中節骨片が遺存している。

[性別と年齢]

眼窩上隆起・乳様突起が発達していることから、性別は男性と判定される年齢は歯牙咬耗度が橋原(1957)の1° a-2° aであることから成年と推定される。

[ST30]

[人骨所見]

本人骨の遺存状態は良好ではない。頭蓋骨の右乳様突起部と詳細部位不明の長管骨片が遺存するのみである。

[性別と年齢]

遺存状態が良好ではないため、性別・年齢ともに不明である。

[ST31]

[人骨所見]

本人骨の保存状況は良好ではない。頭蓋骨は、左側頭頂骨・左側頭骨・後頭骨の一部が遺存している。下顎骨は、左下顎枝から下顎体にかけて遺存している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。



歯牙咬耗度は橋原(1957)の1° a-1° bである。

上肢骨の遺存状態は以下の通りである。左上腕骨は、骨体中央部が遺存する。尺骨・橈骨は左右共に骨体中央部が遺存する。

下肢骨の遺存状態は以下の通りである。大腿骨は、左右共に骨体中央部が遺存する。右脛骨は骨体中央部が遺存し、左脛骨は遠位側骨体及び近位関節面以外が遺存する。

[性別と年齢]

大腿骨のサイズから男性の可能性が考えられる。年齢は歯牙咬耗度が1° a-1° bであることから成年であると考えられる。

[ST32]

[人骨所見]

本人骨の保存状況は良好でない。頭蓋骨は破片としてのみ遺存している。歯牙片も一部認められ

るがいずれも遊離している。

残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	△	P ²	M ¹	M ²	M ³
x	○	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	○	○	M ₂

このうち、上顎の M² についての歯牙咬耗度は橋原 (1957) の 2^a a であった。

躯幹骨については、仙骨片が遺存している。

上肢は、右上腕骨骨体部、左橈骨・右尺骨が骨体部のみ遺存している。右橈骨は骨体部が破片として遺存している。左尺骨は破片として遺存している。

下肢は、左寛骨の恥骨部が遺存している。右大腿は骨体部が、左大腿骨は骨頭と骨体部が遺存している。左脛骨は骨体部が遺存している。右腓骨は骨体部が遺存している。左腓骨は破片のみである。その他にも長管骨片、小さな骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、恥骨下角が大きいことから、女性と判定される。年齢については、恥骨結合面が phase5-6(Sakaue2006) であり、歯牙咬耗度が橋原 (1957) の 2^a a であることから、熟年と考えられる。

〔形質的特徴〕

脛骨は、栄養孔位最大径が 35.8mm、栄養孔位横径が 23mm、栄養孔位周が 89mm であり、それぞれ比較群中において最大の値を示す。最大径の値は男性に近いが、ヒラメ筋線の後方への突出が顕著であることに起因する。栄養孔位断面示数は 64.1 で、比較群中において小さい値を示す。

腓骨は、最小周が 42mm で、比較群中において最大の値を示す。

〔ST33〕

〔人骨所見〕

保存状態は良好である。頭蓋骨は左側頭骨の一部を除いて遺存し、顔面骨は左右眼窩上縁・頬骨及び上顎の一部が遺存する。下顎骨は右側半分が遺存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

○	○	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	x	○	○	C	P ²	x	x	M ¹
○	○	M ₁	P ₂	P ₁	C	○	○	△	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂

軀幹骨は、肋骨及び椎骨が一部残存する。

上肢骨は、左右鎖骨の一部・肩甲骨片・右上腕骨の骨体部・右尺骨の遠位端から骨体部・左橈骨・左尺骨の近位端から骨体部・左右不明中手骨・左右不明中節骨が遺存する。

下肢骨は、寛骨臼から恥骨付近の右寛骨・左恥骨・右大腿骨の近位端から骨体部・左大腿骨の近位端から骨体部・近位端と遠位端の一部を除く右脛骨・左脛骨の遠位端から骨体部・左腓骨の遠位端から骨体部・右第一基節骨が遺存する。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨粗線が発達しているものの、外後頭隆起・眼窩上隆起・乳様突起が発達していないこと、前頭結節が発達していることから、女性と判定される。年齢は、恥骨結合面が phase5(40代後半 -)(Brooks and Suchey1990) であること、歯牙の咬耗度が橋原 (1957) の 1^c c-2^b b であること、内板・外板ともに癒合していることから、熟年であると推定される。

〔特記事項〕

上顎の右中切歯は抜歯された可能性がある。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、頭蓋最大長が183mmで、比較群中において最大の値を示す。一方、頭蓋最大幅は94mmと比較群中において最小の値を示す。Ba-Br高は129mmで、比較群中において中間的な値を示す。頭長幅示数は51.6で超長頭であり、頭蓋最大幅が小さく頭蓋最大長が大きいことから比較群中において最小の値を示す。頭長高示数は70.8で中頭であり、比較群中において最小の値を示す。頭幅高示数は137.2で狭頭であり、比較群中において最大の値を示す。

橈骨は、最小周が38mmで、北部九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において最大の値を示す。骨体横径は15.5mmで、比較群中において中間的な値を示す。骨体矢状径は11.1mmで、比較群中において大きい値を示す。骨体断面示数は71.6で比較群中において大きい値を示し、骨間縁の発達は明瞭ではない。

尺骨は、尺骨矢状径が11.3mmで、比較群中において大きい値を示す。一方、尺骨横径は13.7mmで、比較群中において小さい値を示す。骨体断面示数は、尺骨矢状径が大きく尺骨横径が小さいことから、82.5と比較群中において大きい値を示すが、骨間縁の発達は明瞭ではない。

大腿骨は、骨体上横径が28.6mmで、比較群中において小さい値を示す。骨体上矢状径は23.8mmで、比較群中において最大の値を示す。上骨体断面示数は、骨体上矢状径が大きく骨体上横径が小さいことから、83.2と比較群中において最大の値を示す。粗線の後方への突出は明瞭である。

脛骨は、栄養孔位最大径が27.1mmで、比較群中において最小の値を示す。栄養孔位横径は19.7mmで比較群中において小さい値を示す。栄養孔位周は76mmで、比較群中において最小の値を示す。最小周は66.5mmで、他の弥生人骨に比べて小さい値を示す。栄養孔位断面示数は72.8で、他の弥生人骨と大きな差はみられない。栄養孔位や周径の計測値からもわかるようにヒラメ筋線の発達は不明瞭であり、全体的に華奢である。

腓骨は、最小周が34.5mmで、比較群中において小さい値を示す。

[ST34]

〔人骨所見〕

保存状態は良好ではない。頭蓋骨は、頭頂骨・後頭骨・右側頭骨の一部、下顎骨片が遺存するのみである。残存歯式は以下の通りである。

·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·
/	M	M	P	P	/	I'	I'		I'	/	C	P	P	M	M	M			
·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·

上肢骨は、上腕骨・橈骨の骨体部と右橈骨遠位端が遺存している。そのほか、中手骨片が数点遺存している。

下肢骨は左右大腿骨・脛骨・腓骨の骨体部が遺存している。その他、中足骨と右距骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は外後頭隆起の発達から男性であると判定される。年齢は、歯牙の咬耗度が橋原（1957）の1°b - 1°cであること、第3大臼歯が萌出していることから、成年と推定される。

〔特記事項〕

下顎右犬歯に逆鞍上の摩滅がある。

〔形質的特徴〕

脛骨は、栄養孔位最大径が34.2mmで、比較群中において小さい値を示す。一方、栄養孔位横径

は29.3mmで、比較群中において最大の値を示す。栄養孔位周は91.5mmで、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位断面示数は、栄養孔位横径が大きく栄養孔位最大径が小さいことから、85.7と比較群中において最大の値を示す。栄養孔位の諸計測値からもわかる通りヒラメ筋線の発達は不明瞭であり、鉛直線の形成もみられない。

【ST36】

〔人骨所見〕

保存状態は良くない。部位不明の頭蓋片のみが認められる。また、歯牙も一部認められた。残存歯式は以下の通りである。



〔性別と年齢〕

推定可能な部位が依存していないため、性別は不明である。乳歯の萌出状態、および未萌出の永久歯が形成されていることから、年齢は幼児と推定される。

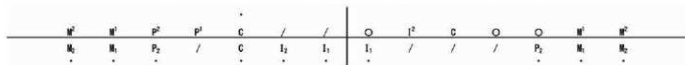
〔特記事項〕

下顎右第一大臼歯は未萌出であり、エナメル質も2-3mmほどしか形成されていない。

【ST39】

〔人骨所見〕

保存状態はよくない。頭蓋骨は、左右側頭骨の一部・外後頭骨の一部・左右蝶形骨の除き遺存し、顔面骨は左右眼窩上縁・左右頬骨・上顎の一部を遺存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度が柘原(1957)の2°aである。右上側切歯は矮小歯である。また、左下側切歯は鞍状の咬耗がある。

肱骨は左肩甲骨片が遺存する。

上肢骨は左前腕骨の骨体部・右橈骨の骨体部・左右尺骨の骨体部・左橈骨の遠位端から骨体部・左尺骨の遠位端から骨体部が遺存する。

下肢骨は左右大腿骨の骨体部・左右脛骨の骨体部・腓骨片が遺存する。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨粗線・外後頭隆起・眼窩上隆起が発達していること、前頭結節が発達していないことから、男性と判定される。年齢は、全ての縫合の内板が癒合し、全ての縫合の外板が癒合途中であることに加え、歯牙の咬耗度が柘原(1957)の2°aであることから、成年以上であると推定される。

〔形質的特徴〕

上腕骨は、骨体最小周が59.5mmで、比較群中において最小の値を示す。

橈骨は、最小周が40.5mm、骨体横径は14.6mmであり、それぞれ比較群中において小さい値を示す。一方、骨体矢状径は12.9mmで、比較群中において最大の値を示す。骨体断面示数は、骨体矢状径が大きく骨体横径が小さいことから、88.1と比較群中において最大の値を示すが、骨間線の発達は明瞭ではない。

尺骨は、最小周が32mmで、比較群中において最小の値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径が32.9mmで、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位横径は25.2mmで、その他の弥生人骨と大きな差はみられない。栄養孔位周は93.5mmで、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位断面示数は76.4で、比較群中において大きい値を示す。栄養孔位の計測値からもわかる通りヒラメ筋線の発達是不明瞭であり、鉛直線の形成もみられない。

3. 形質的特徴の検討

津古牟田遺跡から出土した人骨のうち計測可能であったのは男性10体(頭蓋骨5体、四肢骨10体)、女性2体(うち1体は計測項目中2項目のみ)のみであった。本来形質的特徴の比較分析は、集団を代表させるに足る個体数を用いた平均値によって行うべきである。しかし、日本列島内で唯一弥生時代人骨が数多く出土し、細かい地域性の検討(中橋1993)も行われつつある北部九州地域の中で、本遺跡から出土した人骨がどのように位置づけることができるかを検討することは極めて重要であると考えられる。また、比較集団として用いた横隈孤塚Ⅱと横隈孤塚第7次に関して、本来的には横隈孤塚遺跡で平均化すべきであるが、横隈孤塚遺跡Ⅱの個体の計測値が不明であるため、今回は分けて分析を行った。この2遺跡に関しても個体数が少ないため、その中に含まれる個体の特徴を強く示し集団の傾向を代表しきれていない可能性がある。以下、本遺跡出土人骨の平均値と比較群との比較を行っていく。

▽頭蓋

【男性(第3・4表)】

頭蓋最大長は、隈・西小田弥生人骨および北部九州弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において中間的な値を示す。頭蓋最大幅は、比較群中において最大の値を示し、Ba-Br高も横隈孤塚弥生人骨の値と近似し、比較群中において同人骨に次いで2番目に大きな値を示す。頭長幅示数(832)は短頭であり、比較群中において最大の値を示す。頭長高示数(766)は高頭であり、その他の弥生時代人骨と大差のない値を示す。頭幅高示数(916)は平頭を示し、比較群中において最小の値を示す。これらの値は、高頭という点では他の弥生時代人骨と同様の傾向を示すものの、他個体群と比較して非常に扁平な傾向が指摘される。

頬骨弓幅は比較群中において最大の値を示し、中顔幅は比較群中において比較的小さい一方、顔高、上顔高とも他の弥生時代人骨と大差のない値を示すため、相対的に幅が広いことが指摘できる。コルマン顔示数(89.2)・上顔示数(53.5)は中顔を示し、ウィルヒョウ顔示数(122.5)・上顔示数(73.5)は正顔・低顔を示す。

眼窩の形は、眼窩幅がやや広いため、眼窩示数(78.7)が中眼窩であり、北部九州弥生時代人骨と津雲縄文時代人骨の中間的な値を示す。

鼻型は、鼻幅が隈・西小田遺跡弥生人骨と同様の値を示し、北部九州弥生人骨との間に大差は見られない。一方、鼻高は比較群中において最大の値を示し、このことから鼻示数(50)は中鼻であり、比較群中において小さい値を示す。また、鼻彎曲示数(74.8)は比較群中において最小の値を示し、やや高い鼻立ちであることが指摘される。

下顎の特徴としては、オトガイ高・下顎枝幅の値が比較群中において最大であり、一方、下顎枝高が比較群中において小さい値を示す。

以上、個体数は少ないが、男性の顔面頭蓋の形質的特徴を概観すると、幅・高径ともサイズが大

第3表 主要頭蓋計測値の比較 (男性)

	津古幸田7次		奥穂飯塚7次 ⁽¹⁾			横綱飯塚 ⁽²⁾			熊・西小田 ⁽³⁾			北部九州 ⁽⁴⁾			土井ヶ浜 ⁽⁵⁾			深堀 ⁽⁶⁾			津雲・吉崎 ⁽⁷⁾			吉野浜 ⁽⁸⁾			西南日本 ⁽⁹⁾			
	N	SD	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M		
1 頭蓋最大長	4	183.5	4.1	7	186.3	18	182.6	56	183.0	118	183.7	52	182.8	21	182.8	26	184.2	16	181.8	108	181.4									
8 頭蓋最大幅	3	152.8	1.8	7	143.0	16	142.3	36	142.2	117	142.4	54	142.6	20	144.9	25	144.9	17	136.2	108	139.3									
17 Ba-Br高	4	140.5	1.9	6	140.7	11	138.7	46	138.0	101	137.7	43	134.7	15	134.6	16	135.5	17	139.4	108	139.3									
8/1 頭長幅示数	3	83.2	1.6	6	75.3	14	77.9	47	77.6	104	77.7	48	78.1	20	79.2	25	78.7	16	74.9	108	76.6									
11/1 頭長高示数	4	76.6	2.2	5	80.0	9	75.5	43	75.2	91	75.3	42	73.7	15	74.2	17	73.3	16	76.8	108	76.9									
17/8 頭幅高示数	3	91.6	1.3	6	100.0	10	97.6	38	97.2	91	97.0	43	93.4	14	93.1	17	93.5	17	102.5	108	100.1									
47 眉骨幅	2	142.5	2.1	4	137.0	6	136.8	38	141.2	103	140.0	27	139.4	12	138.4	7	141.0	18	135.2	106	134.5									
46 中顔幅	3	102.5	2.8	4	106.5	11	101.8	35	105.1	114	104.7	37	103.4	17	105.0	10	103.8	19	100.3	107	99.9									
47 顔高	4	126.5	1.7	5	127.2	11	126.0	32	124.3	80	123.8	36	123.4	14	117.1	11	115.7	11	117.3	66	122.2									
48 上顔高	4	75.6	0.9	6	75.8	15	71.9	48	75.5	114	74.8	35	72.4	17	68.1	12	66.3	15	69.8	92	71.8									
47/45 眼鼻数 (K)	2	89.2	1.2	4	91.0	3	93.1	25	88.3	71	88.4	24	88.5	12	84.6	7	80.4	11	86.4	64	91.4									
47/46 眼鼻数 (V)	2	122.5	2.9	4	121.5	6	124.8	25	119.3	74	118.4	34	119.3	14	111.8	9	110.4	11	116.5	65	122.2									
48/45 上顔示数 (K)	2	53.5	0.0	4	55.1	5	52.7	35	53.7	95	53.3	21	51.9	12	49.3	7	47.0	15	51.7	90	53.5									
48/46 上顔示数 (V)	2	73.5	0.7	4	74.5	10	69.4	33	72.6	105	71.5	31	70.0	17	64.8	10	63.1	15	69.9	91	71.8									
51 眼鼻比 (左)	3	43.0	1.0	6	42.7	14	42.6	39	43.0	89	43.2	38	42.7	15	43.1	9	43.2	18	42.0	108	43.0									
52 眼鼻比 (右)	3	33.8	1.1	6	34.8	18	34.9	39	35.2	93	34.5	40	34.2	15	32.8	9	33.2	18	34.4	108	34.4									
52/51 眼鼻比差 (左)	3	78.7	4.3	6	81.9	13	81.9	38	81.8	86	79.9	38	80.1	15	76.2	8	77.5	18	82.1	108	80.2									
54 鼻幅	5	26.8	2.0	6	27.4	16	25.9	48	26.8	117	27.1	38	27.1	16	27.8	12	26.5	17	26.0	108	25.9									
55 鼻高	4	54.5	2.6	6	53.8	18	53.5	50	53.1	116	52.8	39	53.1	16	51.0	12	48.1	16	51.4	108	52.2									
54/55 鼻平数	4	50.0	3.8	6	51.2	16	48.0	47	50.6	113	51.4	37	51.0	16	54.4	11	54.7	16	50.5	108	49.8									
72 側顔角	4	84.6	2.3	6	82.2	15	83.5	31	84.0	85	84.5	34	83.6	15	82.0	7	81.5	15	82.5	92	83.8									
74 側顔傾角	4	77.4	7.2	6	76.2	15	73.4	29	72.3	83	69.8	35	71.0	-	6	70.1	14	62.5	107	70.7										
50 顔幅傾角	4	19.8	2.8	7	19.7	14	17.2	55	19.5	114	19.0	26	18.3	14	18.8	28	19.8	18	18.8	89	17.7									
F 鼻根傾角	4	26.3	2.5	7	22.4	14	19.9	55	21.5	114	21.5	24	21.1	13	24.4	17	25.7	15	21.7	89	20.5									
50/F 鼻根背角	4	74.8	8.3	7	88.3	14	86.7	55	90.6	114	88.7	24	87.2	13	76.7	17	77.5	15	86.6	89	86.2									
57 鼻根傾小角	4	9.6	0.5	7	9.0	16	7.9	59	7.6	120	8.2	24	8.1	13	10.2	-	-	17	7.9	89	6.9									

(1) 奥穂飯塚2019、(2) 飯塚 (1993)、(3) 中橋 (1993)、(4) 中橋・永井 (1989)、(5) 飯塚 (1993)、(6) 西尾 (1997)、(7) 津雲・吉崎 (1992)、(8) 津雲 (1992)、(9) 中橋・永井 (1989)、(10) 飯塚 (1994)

第4表 主要下顎骨計測値の比較 (男性)

	津古幸田7次		奥穂飯塚7次 ⁽¹⁾			横綱飯塚 ⁽²⁾			熊・西小田 ⁽³⁾			北部九州 ⁽⁴⁾			土井ヶ浜 ⁽⁵⁾			深堀 ⁽⁶⁾			津雲・吉崎 ⁽⁷⁾			吉野浜 ⁽⁸⁾			西南日本 ⁽⁹⁾				
	N	SD	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M			
65 下顎開歯	-	-	3	128.3	4	132.5	18	135.3	49	132.9	35	131.2	3	127.3	30	131.2	18	122.7	85	123.7											
66 下顎角	-	-	1	112	1	120.0	13	111.5	33	108.4	42	106.8	-	-	46	103.1	19	102.8	86	97.1											
68 下顎長	-	-	1	67	1	68.0	16	75	44	75.1	42	76	3	75.3	46	75.9	19	73.3	86	65.2											
オトガイ高	4	37.1	4.0	6	34.5	20	34.8	32	35.6	89	35.7	47	33.3	3	30.7	31	32.3	16	32.1	85	35.6										
70 下顎枝高 (左)	2	61.0	1.4	4	68.8	9	65.4	18	64.1	28	64.5	45	62.2	3	61	38	62	15	59.8	87	59.6										
71 下顎枝高 (右)	2	38.0	1.4	4	36.3	13	34.1	26	36.5	46	37.4	54	36.4	3	34.3	53	33.8	19	35.9	87	34.7										
71/70 下顎枝示数	2	62.4	3.8	4	52.7	9	49.0	18	56.7	25	59.7	44	58.5	3	56.4	38	54.9	15	61.2	86	58.5										
79 下顎枝角	-	-	2	119.5	10	125.7	15	121.9	51	120.8	43	123.9	3	124	45	122.7	19	121.2	86	128.3											

(1) 奥穂飯塚2019、(2) 飯塚 (1993)、(3) 中橋 (1993)、(4) 中橋・永井 (1989)、(5) 飯塚 (1993)、(6) 西尾 (1997)、(7) 津雲・吉崎 (1992)、(8) 津雲 (1992)、(9) 中橋・永井 (1989)、(10) 飯塚 (1994)

大きく、高顔性が指摘される。これらの特徴は、北部九州地域で確認されている弥生時代人が有する、いわゆる渡来の形質 (中橋・永井 1989) と合致し、さらにその中でも、顔面幅径が大きく、鼻根部の凹凸が概して強いことが特徴として指摘されよう。

【女性 (第5・6表)】

頭蓋最大長・頭蓋最大幅は比較群中で最大の値を示す一方、Ba-Br高は、他の北部九州弥生時代人骨と比較して小さい値を示す。頭長幅示数 (79.7) は中頭、頭長高示数 (70.9) は高頭、頭幅高示数 (89.0) は平頭を示し、他の北部九州弥生時代人骨と比較し、サイズが大きく、幅が広いことが指摘される。

中顔幅・上顔高は他の北部九州弥生時代人骨と同様の傾向を示す一方、顔高は、オトガイ高の値が低いことと関連し、北部九州弥生時代人骨と比較して小さい値を示す。高顔形質を示すが弥生時代の比較集団の中ではやや幅が広いことが指摘できる。ウィルヒョウ顔示数 (109.5)・上顔示数 (72.0) は過低顔・低顔を示す。

眼高の形は、中眼高であり、眼高示数 (81.5) は北部九州弥生時代人骨と比べてやや小さい値を

第5表 主要頭蓋計測値の比較(女性)

	津古半田7次 (弥生)			豊原孤塚7次 ⁽¹⁾ (弥生)			横須賀塚 ⁽²⁾ (弥生)			熊・西小田 ⁽³⁾ (弥生)			北部九州 ⁽⁴⁾ (弥生)			土井ヶ浜 ⁽⁵⁾ (弥生)			西北九州 ⁽⁶⁾ (弥生)			津雲 ⁽⁷⁾ (縄文)			吉母浜 ⁽⁸⁾ (中世)			西南日本 ⁽⁹⁾ (近代)																	
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD															
1	頭蓋最大長	2	182.0	0.0	6	174.3	10	176.5	28	177.0	86	177.0	32	176.0	15	178.1	46	176.1	26	176.4	57	172.8	8	頭蓋最大幅	1	145.0	-	6	137.2	8	141.0	27	137.4	84	138.4	32	138.1	15	139.3	49	141.5	26	132.0	57	134.0
17	Ba-Br高	2	129.0	0.0	5	130.7	8	132.3	24	131.0	66	130.7	29	128.1	7	127.3	31	129.7	21	129.7	25	133.0	57	131.3	8/1	眼長指示数	1	79.7	-	6	78.7	7	79.7	23	77.4	72	78.1	30	78.5	16	80.3	26	74.9	57	77.6
11/1	眼長指示数	2	70.9	0.0	5	74.1	6	74.6	20	74.3	62	74.1	28	72.8	7	71.2	20	73.6	25	75.4	57	76.0	17/8	上顔高	1	89.0	-	5	94.4	5	92.4	20	95.7	56	94.9	29	92.8	7	92.5	20	91.9	25	100.7	57	98.0
45	頬骨弓幅	-	-	-	3	131.0	1	136.0	21	132.6	61	131.3	30	131.9	6	130.2	10	132.6	26	128.3	57	123.9	46	中顔幅	1	100.0	-	5	100.0	4	102.3	19	99.8	67	99.8	23	98.5	11	95.9	23	99.7	27	98.6	57	93.4
47	眼高	1	109.5	-	5	119.8	3	112.3	27	116.4	45	116.3	23	114.2	9	104.9	14	105.1	18	111.5	14	112.9	41/45	眼鼻指数(K)	-	-	-	2	92.8	-	15	87.6	34	88.7	17	86.6	6	81.7	7	79.2	19	86.5	14	90.8	
48	上顔高	1	72.0	-	5	73.4	6	66.3	23	71.5	66	70.1	22	68.3	12	60.9	17	62.0	19	66.5	55	68.2	41/46	眼鼻指数(V)	1	109.5	-	5	119.9	1	101.0	14	116.0	39	116.7	21	115.9	9	109.5	13	106.8	18	111.5	14	119.0
48/45	上顔指数(K)	-	-	-	3	57.5	1	43.4	20	54.5	49	53.7	17	51.8	6	47.6	7	48.0	22	51.6	55	55.0	48/46	上顔指数(O)	-	-	-	4	74.0	4	65.8	18	72.0	57	70.2	21	69.3	11	63.5	14	62.3	22	66.5	55	72.9
51	眼窩高(左)	1	40.5	-	6	41.8	7	41.9	21	41.6	66	41.6	24	40.3	10	41.1	22	41.7	25	41.1	57	40.5	52	眼窩高(右)	1	33.0	-	6	34.8	9	34.4	22	34.3	65	34.1	25	33.0	10	31.2	14	32.6	25	33.9	57	34.0
52/51	眼窩指数(左)	1	81.5	-	5	83.8	7	83.3	20	82.1	62	82.0	20	82.6	10	75.9	13	78.0	26	82.7	57	83.9	54	鼻幅	1	26.0	-	6	27.5	6	26.3	25	27.1	72	26.6	20	26.2	12	26.6	27	25.4	25	25.9	57	25.0
55	鼻高	1	51.0	-	6	52.5	6	49.8	25	50.2	71	49.8	23	49.0	12	46.3	21	44.9	25	48.6	57	48.6	54/55	鼻指数	1	51.0	-	6	52.4	6	52.9	25	54.0	69	53.0	30	53.0	12	57.4	20	56.1	25	53.5	57	51.4
72	全顔面角	1	81.1	-	4	82.8	4	82.8	19	83.3	48	83.5	22	83.6	10	81.5	12	81.5	22	82.8	55	83.0	34	歯槽側面角	1	71.0	-	4	74.5	4	72.5	18	70.9	47	67.9	22	70.5	-	13	68.7	22	61.8	55	67.1	
70	歯槽側面角	1	71.0	-	4	74.5	4	72.5	18	70.9	47	67.9	22	70.5	-	13	68.7	22	61.8	55	67.1	50/F	鼻根彎曲指示数	1	67.9	-	7	86.2	6	88.7	28	90.8	70	90.5	16	90.8	-	10	80.9	25	90.3	57	87.3		
57	鼻根彎曲指示数	1	67.9	-	7	86.2	6	88.7	28	90.8	70	90.5	16	90.8	-	10	80.9	25	90.3	57	87.3	57	鼻蓋最小幅	1	9.0	-	6	8.2	6	8.2	27	8.6	74	8.2	15	8.3	8	11.0	-	24	7.7	57	7.0		

(1) 美濃2009、(2) 紀下(1965)、(3) 中嶋(1992)、(4) 中嶋・森本(1980)、(5) 紀下(1961)、(6) 内藤(1971)、(7) 津雲・宮本(1992)、(8) 金堂(1982)、(9) 中嶋・森本(1985)、(10) 藤原(1954)

第6表 主要下顎骨計測値の比較(女性)

	津古半田7次 (弥生)			豊原孤塚7次 ⁽¹⁾ (弥生)			横須賀塚 ⁽²⁾ (弥生)			熊・西小田 ⁽³⁾ (弥生)			北部九州 ⁽⁴⁾ (弥生)			土井ヶ浜 ⁽⁵⁾ (弥生)			津雲・吉崎 ⁽⁷⁾ (縄文)			吉母浜 ⁽⁸⁾ (中世)			西南日本 ⁽⁹⁾ (近代)																			
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD																	
65	下顎骨間幅	-	-	3	123	1	121.0	8	127.8	34	126.8	22	124.8	5	123.6	22	123.9	28	118	19	114.1	48	下顎骨幅	-	-	2	102.5	2	94.5	8	104.3	26	100.4	25	102.5	-	36	95.7	26	95.9	19	91.6		
66	下顎骨長	-	-	2	69.5	1	66.5	10	71.2	26	72.5	25	71.4	6	73.2	34	74.3	28	71.9	18	67.9	70	オトガイ高	1	28.0	-	5	33.8	5	30.6	11	33.1	55	32.3	23	30.8	6	26.8	10	28.3	22	29.9	16	31.7
68	オトガイ高	1	28.0	-	5	33.8	5	30.6	11	33.1	55	32.3	23	30.8	6	26.8	10	28.3	22	29.9	16	31.7	70	下顎枝高(左)	-	-	2	62	2	58.5	4	59	20	59.2	28	57.3	6	50.8	30	56.4	23	56.1	19	55.5
71	下顎枝高(左)	-	-	2	62	2	58.5	4	59	20	59.2	28	57.3	6	50.8	30	56.4	23	56.1	19	55.5	71/70	下顎枝示数	-	-	4	34.3	4	35.3	11	35.6	34	35.3	31	34.7	6	31.3	40	32.6	28	34.7	19	32	
79	下顎枝角	-	-	2	126	1	134.0	8	127.8	34	125.2	26	126	6	127.8	37	122.5	26	121.5	16	128.6	48	下顎枝角	-	-	2	126	1	134.0	8	127.8	34	125.2	26	126	6	127.8	37	122.5	26	121.5	16	128.6	

(1) 美濃2009、(2) 紀下(1965)、(3) 中嶋(1992)、(4) 中嶋・森本(1980)、(5) 紀下(1961)、(6) 内藤(1971)、(7) 津雲・宮本(1992)、(8) 金堂(1982)、(9) 中嶋・森本(1985)、(10) 藤原(1954)

示すものの、眼窩高の値が極端に小さいということはないため、概ね同様の傾向を示し、津雲縄文時代人骨や西北九州弥生時代人骨とは異なる。

鼻型は、鼻幅は北部九州弥生時代人骨と比べてやや小さい値を示し、鼻高は北部九州弥生時代人骨と大差ない値を示す。鼻指数(51.0)は、広鼻よりの中鼻であり、比較群中において最小の値を示す。また鼻根部は、鼻根彎曲指示数(67.9)が、比較群中において最小の値を示し、高い鼻立ちであることが指摘される。

下顎の特徴としては、北部九州弥生時代人骨と比較すると、オトガイ高の値が小さい値を示す。

以上、女性の顔面頭蓋の形質的特徴を概観すると、個体数は少ないが、男性同様に幅径のサイズが大きく鼻根部の凹凸が既して強いことが指摘される。

▽比較分析(第43～45図、第7・8表)

・主成分分析(第43・44図、第7・8表)

男性については頭蓋9項目(頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br高・頬骨弓幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高)、女性については頭蓋9項目(頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br高・中顔幅・上顔高・眼窩幅・

眼窩高・鼻幅・鼻高)を用いて主成分分析を行った。

【男性】

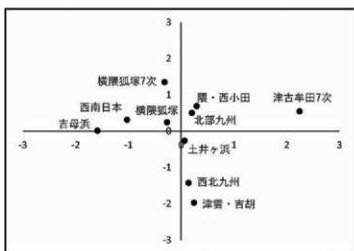
第一主成分(X軸:固有値2,579,寄与率28.653%)はBa-Br高と眼窩高と負の相関を、それ以外の項目と正の相関を示すが、Ba-Br高と眼窩高の主成分負荷量は低いと、概してサイズファクターと考えられる。特に幅径と強く正の相関があり、図の右側に位置するほど頭蓋のサイズが大きく、中でも頬骨の張り出した強い広顔を示すと見える。第2主成分(Y軸:固有値3,065,累積寄与率62.708%)は主に長・高径と正の相関を脳頭蓋の幅径と顔面部の幅径と負の相関を示し、図の上方に位置するほど長頭・高顔性を示す。

津古牟田第7次弥生時代男性人骨は、概して北部九州弥生時代人骨、特に隈・西小田弥生時代人骨に似て長頭・高顔性を示すが、一方で、頭蓋全体のサイズが大きく、顔の幅径がやや広い傾向にあることが指摘される。

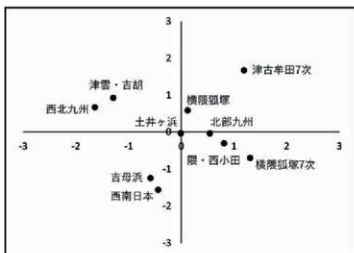
【女性】

第一主成分(X軸:固有値2,926,寄与率32.514%)は全項目と正の相関を示し、中でも高径と強く正の相関を示すことから、図の右側に位置するほど頭蓋全体のサイズが大きい。また、脳頭蓋よりも顔面部のサイズとの相関が高く、特に上顔高と鼻高との正の相関が高いが顔面部のどの項目とも比較的高い正の相関を示す。第2主成分(Y軸:固有値2,414,累積寄与率59.334%)は主に脳頭蓋の最大長と最大幅、および顔面部の幅径と正の相関を示し、Ba-Br高と顔面部の高径と負の相関を示すことから、図の上方に位置するほど脳頭蓋のサイズが大きく頬骨の張り出した広顔であり、図の下方に位置するほど長頭・高顔性であることを示している。

津古牟田第7次弥生時代女性人骨は、男性人骨と同様に、概して他の北部九州弥生時代人骨、特に隈・西小田弥生時代人骨、横隈孤塚第7次弥生時代人骨と顔面部のサイズは類似し、その高顔性も共通するが、その一方で、脳頭蓋のサイズや顔の幅径も広く、特に脳頭蓋の長径・幅径が大きいという点で縄文時代人骨や西北九州弥生時代人骨的特徴も有する。



第43図 男性頭蓋9項目による主成分分析



第44図 女性頭蓋9項目による主成分分析

第7表 主成分得点表 (男性)

	主成分負荷量	
	1	2
頭蓋最大長	0.336	0.196
頭蓋最大幅	0.966	-0.175
Ba-Br高	-0.018	0.788
頬骨弓幅	0.870	-0.166
上顔高	0.345	0.917
眼窩幅	0.568	-0.265
眼窩高	-0.277	0.830
鼻幅	0.407	-0.079
鼻高	0.299	0.861
固有値	2,579	3,065
累積寄与率 (%)	28.653	62.708

第8表 主成分得点表 (女性)

	主成分負荷量	
	1	2
頭蓋最大長	0.184	0.793
頭蓋最大幅	0.179	0.960
Ba-Br高	0.205	-0.544
中顔幅	0.487	0.467
上顔高	0.966	-0.179
眼窩幅	0.082	0.090
眼窩高	0.694	-0.530
鼻幅	0.519	0.049
鼻高	0.942	-0.177
固有値	2,926	2,414
累積寄与率 (%)	32.514	59.334

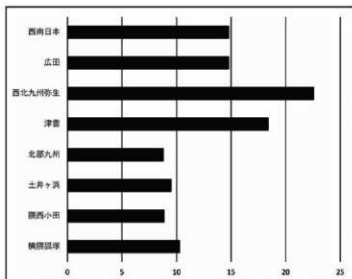
・ペンローズ形態距離による比較（第45図）

男性人骨について、頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br高・頬骨弓幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高を基に、津古牟田第7次弥生時代人骨と横隈塚第7次、隈・西小田、土井ヶ浜、北部九州、西北九州、広田、津雲縄文時代人骨、西南日本現代人骨とのペンローズ形態距離を算出し、第45図に示した。女性は計測個体数が少なく本分析を行うことができなかった。

ペンローズの形態距離分析の結果、隈・西小田・北部九州・土井ヶ浜・横隈塚第7次弥生時代人骨と近似する傾向にあり、西北九州弥生時代人骨・津雲縄文時代人骨との差が顕著であるといえる。

頭蓋形質まとめ

以上のことから、津古牟田遺跡第7次調査の男性の頭蓋形質はいわゆる渡来的な形質を示すといえる。中でも隈・西小田遺跡出土人骨と最も類似する傾向を示す。隈・西小田遺跡出土人骨は、福岡平野部の人々と比較しても著しい高顔性を有することが指摘されている（中橋1993）。また、男性の場合、脳頭蓋のサイズが大きい点や顔面部の幅径が大きい点も隈・西小田遺跡出土人骨と共通しているが、頭幅示数では短頭を示す点や頭高がやや低い点、鼻根部の凹凸がやや明瞭である点など異なる特徴を示す部分も散見される。稲作開始



第45図：ペンローズ形態距離による頭蓋比較分析（男性）

以来、福岡平野を中心として起きた大規模な人口増加によって生じたいわゆる渡来系弥生人が、各地域へ広がる際の在来住人との人口比によって弥生時代人骨の形質の地域性は生じたとされる（田中2014）。津古牟田遺跡出土の男性人骨の形質は北部九州地域内では隈・西小田遺跡出土人骨と最も類似する傾向を示すことから、三国丘陵域の大枠を外れるものではない。

一方、女性の頭蓋形質は、上顔高・眼窩示数・鼻示数の値や主成分分析の結果からもわかるように、女性も高顔性を示し、いわゆる渡来的な形質を示すという点では男性と大差ない。しかし、顔高やオトガイ高が低いこと、脳頭蓋のサイズが大きいという点でやや傾向を異にする。ほぼST7号1個体の値であることからこの個体の特徴であり、地域全体を代表するものではない可能性が高い。しかし、中橋（1989）で指摘されているように女性の頭蓋形態（特にMartinNo.1・8・5・48・55）に縄文の特徴が強く残存する傾向があること、また山鹿縄文時代人骨の女性で狭顔の個体が多くみられるなど、女性の頭蓋形質に関しては男性と傾向が全く同じというわけではない。これは形質の発現の仕方にもそもそも男女差があることに起因する可能性もあるが、あるいは社会の基本原則は双系でありながらもやや男性優位に傾きつつある（田中2000、田中2014）ことや、男性の活動の特殊化と女性の活動の均一化（米元2016）からも考えられるように、男女の通婚・交流圏の範囲に徐々に違いが出始めた結果と考えることもできよう。いずれにしても男女ともに三国丘陵域全体での検討を行う必要がある。隈・西小田遺跡出土人骨と異なる傾向を示す部位については、現時点では個体数が少ないことに起因する可能性が高く、積極的に評価することはできないが、今後北部九州・山口地域全体で個体の有する形質的変異幅の地域性の再検討を行っていく必要があるだろう。また、横隈塚遺跡Ⅱと7次の結果がやや異なる要因としてもそれぞれの個体数の少なさが挙げられる。

▽四肢

第9表 四肢骨計測値比較 (男性)

【男性 (第9表)】

上肢

・上腕骨：上腕骨の骨体最小周

は、横隈塚第7次弥生時代人骨と近似し、他の北部九州弥生時代人骨と比べ大きい値を示す。

・橈骨：最大長・機能長は比較群中において最大の値を示す。最小周・骨体横径は他の北部九州弥生時代人骨と比べてやや小さい値を示す。骨体中央横径・矢状径は他の北部九州弥生時代人

骨と近似する。長厚示数は他の北部九州弥生時代人骨と近似する一方、骨体断面示数・骨体中央断面示数は比較群中において最大の値を示す。

・尺骨：最大長・機能長は比較群中において最大の値を示す。最小周は他の北部九州弥生時代人骨と同様の傾向を示す。矢状径は概ね他の北部九州弥生時代人骨と同様の傾向を示す。一方、横径は他の北部九州弥生時代人骨よりやや小さい値を示し、このこと起因して骨体断面示数は他の北部九州弥生時代人骨と比べて大きい値を示す。長厚示数は他の北部九州弥生時代人骨よりやや小さい傾向を示す。

従来の指摘 (中橋・永井1989) 通り、上腕骨は相対的に華奢 (上腕最小周と大腿の比から) で、尺骨の骨体断面示数に関しては縄文との違いが明瞭であり、骨間縁の発達と関連し、すなわち前腕や手の動きに関する筋筋の発達を示唆され (土肥1996)、この点においても弥生時代人骨的な要素を踏襲すると言える。

下肢

・大腿骨：骨体中央断面示数は他の北部九州弥生時代人骨と近似し、骨体中央部横径は他の北部九州弥生時代人骨よりやや大きい値を示す。骨体中央周は他の北部九州弥生時代人骨と比べて大きい値を示す。骨体上横径は他の北部九州弥生時代人骨と比べてやや小さい値を示す。骨体上矢状径は他の北部九州弥生時代人骨と比べてやや大きい値を示す。このことから上骨体断面示数は他の北部

項目	縄文時代 (n)		弥生時代 (n)		古墳時代 (n)		中世 (n)		近世 (n)		現代 (n)		現代 (n)		現代 (n)										
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差									
上腕骨																									
1 最大長	-	-	-	5	302.0	22	302.0	29	305.2	18	311.2	11	291.4	26	284.3	14	296.8	106	295.2						
2 機能長	-	-	-	5	284.8	27	289.0	24	292.4	11	292.2	9	276.8	28	271.4	16	273.6	64	268.2						
3 骨体中央横径	-	-	-	5	32.6	23	32.6	23	33.1	61	33.1	61	32.7	34	32.4	80	34.1	30	32.6	21.8					
4 骨体中央周	-	-	-	5	19.4	23	19.2	26	17.4	61	17.6	61	17.9	33	17.6	50	17.8	30	17.6	106	16.9				
5 骨体上横径	-	-	-	5	63.3	67	63.3	67	64.9	61	64.9	61	64.9	61	64.9	61	64.9	61	64.9	61	64.9				
6 骨体上矢状径	-	-	-	5	70.6	23	69.9	75	67.8	51	68.5	50	68.7	33	68.2	50	68.3	29	66.1	101	63.7				
7a 骨体断面示数	-	-	-	5	82.2	23	76.3	76	74.9	61	76.5	61	75.7	33	75.0	50	72.9	30	78.0	106	78.1				
7b 骨体中央断面示数	-	-	-	5	30.8	22	31.2	26	29.1	61	28.6	61	28.4	11	28.2	36	29.2	14	27.4	104	26.9				
8 骨体上横径	-	-	-	1	251.0	-	2	242.5	-	37	236.5	57	236.6	16	244.8	6	231.5	27	230.7	17	228.0	64	218.9		
9 骨体中央横径	-	-	-	1	233.0	-	2	231.0	4	224.5	29	229.0	24	227.4	11	223.2	9	216.8	28	212.4	16	213.6	64	208.2	
10 骨体中央周	-	-	-	1	42.0	3.8	5	44.8	12	41.5	79	43.1	45.2	30	43.0	15	44.7	26	44.0	20	41.9	63	40.1		
11 骨体上横径	-	-	-	5	16.8	1.7	6	18.5	17	16.5	79	17.2	17.1	37.4	30	17.2	29	17.1	42	17.1	30	16.8	63	16.8	
12 骨体上矢状径	-	-	-	1	16.2	1.2	4	18.0	18	15.7	90	16.0	33	16.0	18	16.7	26	16.4	-	-	20	16.1	63	15.2	
13 骨体中央横径	-	-	-	5	12.8	1.3	6	12.7	17	11.8	79	12.5	12.1	31.0	12.4	12.6	25	12.4	42	12.0	30	12.1	63	11.7	
14 骨体中央周	-	-	-	1	13.0	-	4	13.5	17	12.1	90	12.6	12.4	31.4	12.4	12.9	26	12.4	-	-	20	11.8	63	11.9	
15 骨体上横径	-	-	-	1	19.3	-	2	18.8	4	17.1	29	18.4	19.0	10	19.5	5	20.5	27	20.5	16	19.8	61	20.4		
16 骨体上矢状径	-	-	-	5	76.8	6.6	5	69.2	17	72.5	79	72.6	61	68.9	39	72.4	25	72.3	42	70.2	30	71.0	60	71.4	
17a 骨体断面示数	-	-	-	1	79.9	-	5	72.0	17	77.3	90	78.6	73	77.8	18	80.0	29	75.2	-	-	20	77.5	-	-	
17b 骨体中央断面示数	-	-	-	1	272.0	-	-	1	244.0	12	283.2	26	288.8	10	287.8	9	249.6	9	249.6	18	249.1	14	247.4	62	236.2
18 骨体上横径	-	-	-	1	241.0	-	1	220.0	5	221.2	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	12	217.5	64	208.2	
19 骨体中央横径	-	-	-	1	37.0	4.0	4	40.2	13	36.2	63	37.4	35	37.1	34	37.2	37	38	37.9	17	37.5	65	35.9		
20 骨体中央周	-	-	-	7	13.4	2.0	6	12.4	17	13.1	100	13.2	49	13.2	43	13.5	29	15.0	50	14.3	19	12.8	63	12.8	
21 骨体上横径	-	-	-	7	16.4	1.5	8	18.2	8	15.8	115	16.2	16.2	38	17.2	26	17.2	26	17.2	50	16.5	19	17.2	64	16.4
22 骨体上矢状径	-	-	-	1	16.2	-	1	18.8	9	16.2	15	16.1	21	17.2	14	17.5	26	17.2	50	15.8	19	17.2	63	17.0	
23 骨体断面示数	-	-	-	7	78.9	7.8	8	74.8	17	78.8	100	78.4	49	77.2	43	78.9	26	88.0	10	85.3	11	73.9	63	73.8	
23 骨体中央断面示数	-	-	-	1	272.0	-	-	1	244.0	12	283.2	26	288.8	10	287.8	9	249.6	9	249.6	18	249.1	14	247.4	62	236.2
24 骨体上横径	-	-	-	1	241.0	-	1	220.0	5	221.2	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	12	217.5	64	208.2	
25 骨体中央横径	-	-	-	1	37.0	4.0	4	40.2	13	36.2	63	37.4	35	37.1	34	37.2	37	38	37.9	17	37.5	65	35.9		
26 骨体中央周	-	-	-	7	13.4	2.0	6	12.4	17	13.1	100	13.2	49	13.2	43	13.5	29	15.0	50	14.3	19	12.8	63	12.8	
27 骨体上横径	-	-	-	7	16.4	1.5	8	18.2	8	15.8	115	16.2	16.2	38	17.2	26	17.2	26	17.2	50	16.5	19	17.2	64	16.4
28 骨体上矢状径	-	-	-	1	16.2	-	1	18.8	9	16.2	15	16.1	21	17.2	14	17.5	26	17.2	50	15.8	19	17.2	63	17.0	
29 骨体断面示数	-	-	-	7	78.9	7.8	8	74.8	17	78.8	100	78.4	49	77.2	43	78.9	26	88.0	10	85.3	11	73.9	63	73.8	
29 骨体中央断面示数	-	-	-	1	272.0	-	-	1	244.0	12	283.2	26	288.8	10	287.8	9	249.6	9	249.6	18	249.1	14	247.4	62	236.2
30 骨体上横径	-	-	-	1	241.0	-	1	220.0	5	221.2	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	12	217.5	64	208.2	
31 骨体中央横径	-	-	-	1	37.0	4.0	4	40.2	13	36.2	63	37.4	35	37.1	34	37.2	37	38	37.9	17	37.5	65	35.9		
32 骨体中央周	-	-	-	7	13.4	2.0	6	12.4	17	13.1	100	13.2	49	13.2	43	13.5	29	15.0	50	14.3	19	12.8	63	12.8	
33 骨体上横径	-	-	-	7	16.4	1.5	8	18.2	8	15.8	115	16.2	16.2	38	17.2	26	17.2	26	17.2	50	16.5	19	17.2	64	16.4
34 骨体上矢状径	-	-	-	1	16.2	-	1	18.8	9	16.2	15	16.1	21	17.2	14	17.5	26	17.2	50	15.8	19	17.2	63	17.0	
35 骨体断面示数	-	-	-	7	78.9	7.8	8	74.8	17	78.8	100	78.4	49	77.2	43	78.9	26	88.0	10	85.3	11	73.9	63	73.8	
35 骨体中央断面示数	-	-	-	1	272.0	-	-	1	244.0	12	283.2	26	288.8	10	287.8	9	249.6	9	249.6	18	249.1	14	247.4	62	236.2
36 骨体上横径	-	-	-	1	241.0	-	1	220.0	5	221.2	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	12	217.5	64	208.2	
37 骨体中央横径	-	-	-	1	37.0	4.0	4	40.2	13	36.2	63	37.4	35	37.1	34	37.2	37	38	37.9	17	37.5	65	35.9		
38 骨体中央周	-	-	-	7	13.4	2.0	6	12.4	17	13.1	100	13.2	49	13.2	43	13.5	29	15.0	50	14.3	19	12.8	63	12.8	
39 骨体上横径	-	-	-	7	16.4	1.5	8	18.2	8	15.8	115	16.2	16.2	38	17.2	26	17.2	26	17.2	50	16.5	19	17.2	64	16.4
40 骨体上矢状径	-	-	-	1	16.2	-	1	18.8	9	16.2	15	16.1	21	17.2	14	17.5	26	17.2	50	15.8	19	17.2	63	17.0	
41 骨体断面示数	-	-	-	7	78.9	7.8	8	74.8	17	78.8	100	78.4	49	77.2	43	78.9	26	88.0	10	85.3	11	73.9	63	73.8	
41 骨体中央断面示数	-	-	-	1	272.0	-	-	1	244.0	12	283.2	26	288.8	10	287.8	9	249.6	9	249.6	18	249.1	14	247.4	62	236.2
42 骨体上横径	-	-	-	1	241.0	-	1	220.0	5	221.2	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	12	217.5	64	208.2	
43 骨体中央横径	-	-	-	1	37.0	4.0	4	40.2	13	36.2	63	37.4	35	37.1	34	37.2	37	38	37.9	17	37.5	65	35.9		
44 骨体中央周	-	-	-	7	13.4	2.0	6	12.4	17	13.1	100	13.2	49	13.2	43	13.5	29	15.0	50	14.3	19	12.8	63	12.8	
45 骨体上横径	-	-	-	7	16.4	1.5	8	18.2	8	15.8	115	16.2	16.2												

・**橈骨**：最小周骨体矢状径は概ね他の北部九州弥生時代人骨と近似した値を示す一方、骨体横径は他の北部九州弥生時代人骨と比べやや小さい値を示す。このため、骨体断面数は比較群中において大きい値を示している。

・**尺骨**：矢状径、横径・骨体断面数ともに他の北部九州弥生時代人骨と比べて大きい値を示し、相対的に矢状径が大きい傾向が指摘される。

従来指摘（中橋・永井1989）通り、尺骨の骨体断面数に関しては縄文との違いが明瞭であり、骨間線の発達と関連し、すなわち前腕や手の動きに関する諸筋の発達が示唆され（土肥1996）、この点においても弥生時代人骨的な要素を踏襲すると言えよう。

下肢

・**大腿骨**：骨体上横径・上矢状径は、他の北部九州弥生時代人骨と概ね近似した値を示す。上骨体断面数は比較群中において最大の値を示し、相対的に相対的に矢状径が大きい傾向が指摘される。

・**脛骨**：栄養孔位最大径は他の北部九州弥生時代人骨と近似した値を示す一方、栄養孔位横径・栄養孔位周・最小周は他の北部九州弥生時代人骨と比べてやや小さい値を示す。栄養孔位断面数は他の北部九州弥生時代人骨と近似した値を示し、相対的に矢状径が大きい傾向が指摘される。

・**腓骨**：最小周は他の北部九州弥生時代人骨と比べて大きい値を示し、個体数が少ないものの、男性同様にやや頑丈な傾向が指摘される。

下肢に関しては、大腿骨の柱状性は低いが矢状径が比較的大きく、栄養孔位断面数も弥生時代人骨と近似するという点で従来この地域の弥生時代人骨で指摘されている（中橋・永井1989）傾向を有する。また、ヒラメ筋線の後方への突出は明瞭な個体が多く、概して鉛直線の形成は確認されないという点も弥生時代的であるといえよう。

▽身長比較（第11表）

大腿骨最大長に Pearson の身長推定式を適用して身長を算出した。算出できたのは男性1体分（ST10号人骨）のみであり、計測可能な右大腿骨最大長の値を用いている。推定身長は164.8cmであり、他の集団と比較したところ、個体数が1体と少ないためか、隈・西小田弥生人骨と近い値を示すものの、北部九州・山口地域の弥生時代人骨よりやや大きな値を示すが、高身長を特徴とする点では同様の傾向を示す。また、西北九州弥生時代人骨・津雲貝塚の縄文時代人骨よりも大きな値を示す。今後、三国丘陵地域全体として検討を行うべきであるが、津古牟田遺跡出土の男性は北部九州弥生時代人骨の中でも高身長である。身長決定はヘテロシス

第11表 推定身長の比較（男性）

	男性	
	N	■
津古牟田7次※1（弥生）	1	164.8
横隈孤塚7次※2（弥生）	2	160.9
横隈孤塚2次※3（弥生）	8	162.4
隈・西小田（弥生）	37	163.5
北部九州（弥生）	80	162.1
土井ヶ浜（弥生）	36	163.7
西北九州（弥生）	16	159.8
津雲（縄文）	13	159.9
宮内美（中世）	18	159.7

※1は中橋（1993）より主に Pearson 式を用いている。

津雲貝塚人骨の身長は右大腿骨最大長より算出

※1は右大腿骨を用い、Pearson 式を用いている。

※2は末尾他2010の値を用いている。

※3は松本（1985）より右大腿骨を用い、Pearson 式を用いている

効果も含めた遺伝的要因に負うところが大きいにしても、栄養条件をはじめとする生活・環境要因の関連も無視できないと指摘されていること（中橋・永井1989）、上述のように当該集団の脛骨・腓骨の長径が比較群中において最大であることも踏まえれば、この高身長は栄養条件をはじめとする生活・環境要因にも一部起因するものであると考えられる。また、下腿が大腿骨と比べて相対的に長いという傾向は四肢プロポーションとしてはやや縄文的である（高椋2016）とも言え、隈・西小田遺跡出土人骨の特徴（中橋1993）とは異なる。また、脛骨に比して腓骨の周径が大きいという傾向も縄文時代人骨と類似している。この点からも生業や栄養状態などの後天的影響の一部起因する可能性が示唆される。

4. 津古牟田断体儀礼

本遺跡においては、断体儀礼の可能性のある事例が2例認められた。ST7とST10である。それぞれに関し、若干言及したい。

ST7に関しては、全身の骨はほぼ関節状態あるいは解剖学的位置関係を保っているにもかかわらず、左の桡骨のみ近位と遠位が逆になっている。すなわち、桡骨近位を掌側に、遠位を肘関節側にした状態で出土している。また、ST10に関しても同様に全身がほぼ関節状態あるいは解剖学的位置関係を保っているにもかかわらず、胸骨、左足根骨および中足骨が本来の位置から離れた場所から出土している。胸骨は、ST10に見られる仰臥位であれば本来胸椎の直上ないしはそこから滑り落ちその近辺から出土する。ただし、ST10に関しては、胸骨柄・胸骨体が上下に重なった状態で、右膝関節直下から出土している。加えて同個体の左足根骨および中足骨が腰椎の左右の位置から出土している。左距骨は第4・5腰椎の右側（北東）から出土しており、左舟状骨・左第1・2中足骨は第4・5腰椎の左側（南西）から出土している。加えて、これらの骨の下には1cm程度土が堆積している。したがって、これらの左足は本来腹部上に置かれていたものが、軟部組織の腐朽に伴い腰椎の左右に落ち込んだと考えられる。

このような人骨の移動の要因として、①動物による移動②軟部組織腐朽時の移動③人為的移動が考えられる。まず、①に関しては、上述のいずれの事例も壙そのものに大きな破損がほとんどみられないことから、この可能性は低いと考えられる。②に関しては、本遺跡で見られる壙内面の傾斜・埋置角と移動部位から判断するとこの可能性は考えにくい。最後に③に関しては、列島先史社会においては、縄文時代以来古墳時代まで遺体の毀損行為が散見され、頭部や脚部・躯幹骨などの離断部位に反映されるように死者の蘇りを阻止するための儀礼行為であったと推定されている（田中2008）。本遺跡と同時期の壙棺における一部人骨の移動例は、横隈塚遺跡（岩橋他1990）、西新町遺跡（田中他2001）で確認されており、胸骨を離断しているST10に関してはこれらに類する儀礼であると推定される。一方でST7に関しては、移動部位が前腕部であり類例は見られず、先行研究に見られる断体儀礼の意味から逸脱している。今後類例の検討が必要ではあるが、ST7号人骨の離断された左腕骨に骨折痕が認められることから、生前の疾患に関連する行為の可能性を考慮しておく必要があろう。

おわりに

津古牟田第7次遺跡出土人骨の特徴は以下の通りであり。

- ・本遺跡出土人骨は全部で21体であり、男性10体（うち成年4体、熟年以上6体）、女性4体（うち成年後半・熟年1体、熟年3体）、性別不明7体（うち幼児2体、10歳以下の未成人1体、年齢不明4体）である。
- ・埋葬姿勢は、足から下壙に挿入された個体が11体、頭から下壙に挿入された個体が4体であり、仰臥屈葬が13体、側臥屈葬が1体、埋葬姿勢不明が7体である。
- ・頭蓋形質に関して、男女ともに長頭又は高頭性を示す。また、隈・西小田遺跡出土人骨に匹敵する著しい高頭性を示し、いわゆる渡来的形質を保持しているといえよう。また、頭蓋骨のサイズが全体的に大きいという特徴も示し、この点も隈・西小田遺跡出土人骨と共通する。ただし男女ともに幅径が大きいなど、いわゆる渡来的形質との差異も認められる。また女性人骨に関しては顔高やオトガイ高が低いこと、脳頭蓋のサイズが大きいという特徴がみられ、縄文時代人骨や西北九州弥生人との共通点も指摘される。男女で形質の特徴の傾向がやや異なる要因として、そもその個体

数の少なさ・形質発現の生物学的な男女差も考えられるが、通婚・交流圏の男女差なども考慮する必要があるだろう。

- ・クリブラ・オルビタリアが1体 (ST01) 確認される。
- ・過剰歯1体 (ST04)、齶歯2体 (ST04・07)、歯周病1体 (ST19) が確認される。
- ・抜歯の可能性のある個体1体 (ST33) が確認される。
- ・変形性脊椎症2体 (ST10・16)・重度の骨膜炎が2体 (ST04・25) 確認される。
- ・ST04号人骨に鼻骨骨折、ST07号人骨に左橈骨骨折が確認される。
- ・四肢骨の特徴として、上肢は男女ともに下肢に比してやや華奢である。これは、上肢骨がサイズや太さの点で頑丈でないということではなく、下肢骨のサイズや太さがより顕著なためである。骨間縁の発達は明瞭であり、すなわち前腕や手の動きに関する諸筋の発達が示唆され、この点でも縄文時代人骨との違いが明瞭である。下肢に関しては、男女ともに、大腿骨の柱状性が低い点やヒラメ筋筋の後方突出が明瞭な個体が多い点などから当該地域出土弥生時代人骨の傾向 (米元2016) と大きな齟齬はなく、水稲農耕を主生業とする人々の特徴を有する。その一方、男性人骨に関しては腓骨の鉛直線の形成や長大化などからもわかるようにやや弥生的ではない形質の特徴も示しており、この点に関しては当該地域の生業活動の特殊性に起因する可能性が考えられる。三国丘陵出土人骨の筋発達のパターンが同時期の福岡平野の筋発達のパターンとはやや異なり、相対的に縄文時代人骨に類似する部分も確認されること、その特徴が女性よりも男性で顕著であることはすでに指摘されるとおりであるが (米元2016)、津古牟田遺跡第7次調査出土人骨も同様の傾向を示すといえよう。

【謝辞】

最後になりましたが、本研究と発表の機会を与えて頂き、貴重なご教示、ご助力を賜った山崎頼人氏を始めとする小郡市教育委員会の皆様に感謝致します。

【文献】

- 阿部英世 1955 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2
- 鑄鍋命達 1955 「九州人下肢骨の研究」『人類学研究』2
- 岩橋由季・高椋浩史・米元史織・石田智子・李ハヤン・谷澤亜里・早川和賀子・舟橋京子・田中良之 2010 「横隈狐塚遺跡第7地点出土人骨について」『横隈狐塚遺跡7』小郡市教育委員会。
- 石川梧・小椋秀亮・塩田重利・砂田今男ほか 1986 『新歯学大辞典ポケット版』永末書店
- 九州大学医学部第二解剖学教室編 1988
- 金高勘次 1928 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』43
- 九州大学医学部第二解剖学教室編 1988 『日本民族・文化の生成2』
- 清野謙次・宮本博人 1926 「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41
- 専頭時義 1957 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4
- 高椋浩史 2016 「西日本地域の縄文時代から弥生時代にいたる身体・四肢プロポーションの時代変化」『田中良之先生追悼論文集：考古学は科学か』中国書店
- 田島達也 1990 「第6章 前腕と手」『神中整形外科学各論』南山堂
- 田中良之 2000 「墓地から見た親族・家族」『古代史の論点2 女と男、家と村』小学館

- 田中良之 2008 「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念
論文集刊行会
- 田中良之 2014 「いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像」『列島初期稲作の担い手は誰か』
すいれん舎
- 田中良之・平美典・坂元雄紀・重松辰治・石川健 2001 「西新町遺跡第 10 次調査出土人骨について」
『西新町遺跡 7: 西新町遺跡第 10 次調査報告書』福岡市教育委員会。
- 橋原博 1957 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31
- 土肥直美 1996 「人骨の骨格案内 - 骨が語る人間の履歴」『人間史をたどる - 自然人類学入門 -』
朝倉書店
- 内藤芳篤・栄田和行 1967 「埋葬・人骨・深掘遺跡」『人類学考古学研究報告』
- 内藤芳篤 1971 「西北九州出土の弥生人骨」『人類学雑誌』79
- 中橋孝博 1989 「3. 弥生人の形質 2. 男女差」『弥生文化の研究 1』雄山閣出版
- 中橋孝博 1993 「福岡県筑紫野市・隈・西小田地区遺跡群出土の弥生人骨」『筑紫野市埋蔵文化
財調査報告書第 38 集』筑紫野市教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文 1985 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」『吉母浜遺跡』下関教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文 1989 「弥生人の形質、男女差、寿命」『弥生文化の研究 1』雄山閣出版
- 原田忠昭 1954 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」『人類学研究』1
- 松下孝幸 1981 「佐賀県大友遺跡出土の弥生人骨」『大友遺跡』呼子町郷土史研究会
- 松下孝幸 1985 「横隈狐塚遺跡Ⅱ V 人骨」『小郡市文化財調査報告書第 27 集』小郡市教育委
員会
- 溝口静夫 1957 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4
- 米元史織 2016 「筋付着部の発達度からみる弥生時代の生業様式の地域的多様性」『田中良之先生
追悼論文集：考古学は科学か』中国書店
- 米元史織・高椋浩史・舟橋京子・田中良之 2010 「横隈狐塚第 7 次調査出土弥生人骨の形質的特徴」
『横隈狐塚遺跡 7』小郡市教育委員会
- Brooks S. and Suchey J.M. 1990. Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the
Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5.
- Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains.
Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
- Sakaue K. 2006. Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese
skeletal material. *Anthropol Science*. 114
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. 1985. Chronological metamorphosis of the
auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American
Journal of Physical Anthropology*, 68



4号人骨正面観



7号人骨正面観



10号人骨正面観



4号人骨側面観



7号人骨側面観



10号人骨側面観



4号人骨上面観



7号人骨上面観



10号人骨上面観

写真図版2



14号人骨正面観



16号人骨正面観



19号人骨正面観



14号人骨側面観



16号人骨側面観



19号人骨側面観



14号人骨上面観



16号人骨上面観



19号人骨上面観



33号人骨正面観



7号人骨上肢



10号人骨下肢



33号人骨側面観



7号人骨下肢



16号人骨上肢



33号人骨上面観



10号人骨上肢

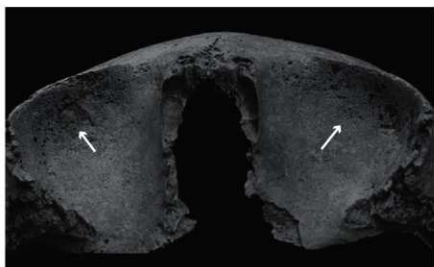


16号人骨下肢

写真図版 4



19号人骨上肢



1号人骨クリブラ・オルビタリア



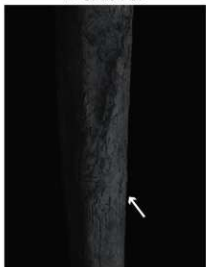
19号人骨下肢



16号人骨変形性脊椎症



16号人骨変形性脊椎症 (L線)



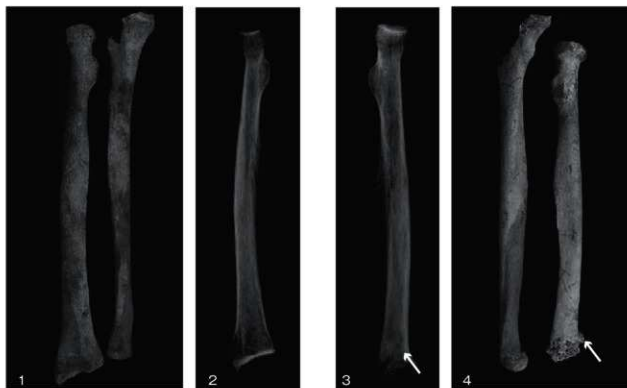
4号人骨脛骨の骨膜炎



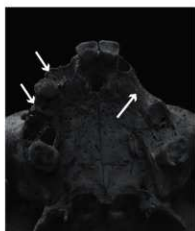
10号人骨変形性脊椎症



4号人骨鼻骨の骨折



19号 歯周疾患による
生前歯牙喪失(左側面観)



7号 歯周疾患による
生前歯牙喪失とう蝕(口蓋側)



7号 歯周疾患による
生前歯牙喪失(左側面観)

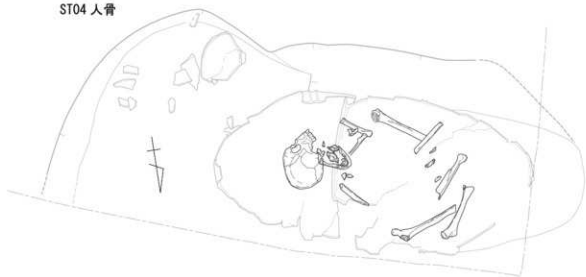


33号 上顎中切歯抜歯

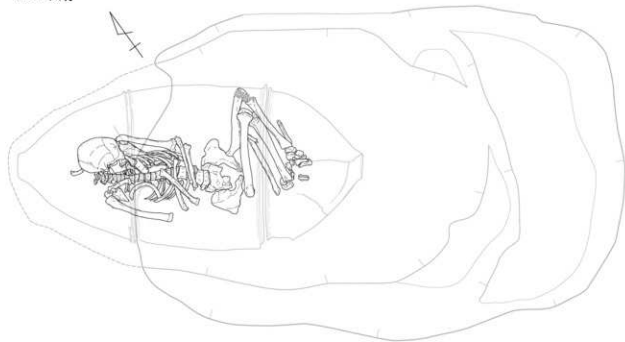
ST01 人骨



ST04 人骨

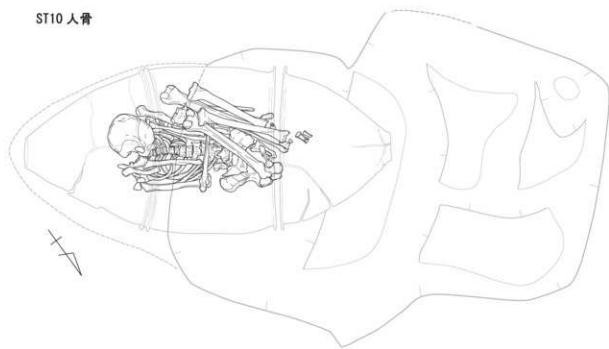


ST07 人骨

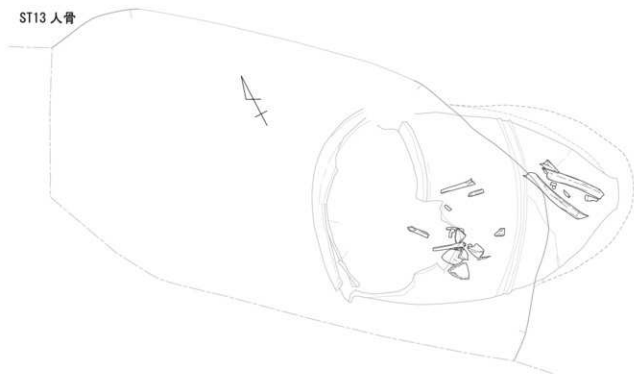


第46图 1·4·7号墓棺出土人骨实测图 (S=1/15)

ST10 人骨

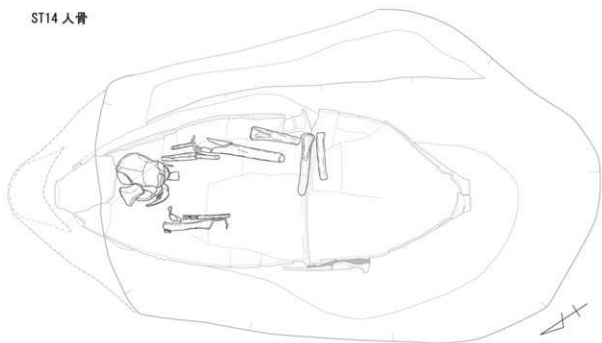


ST13 人骨

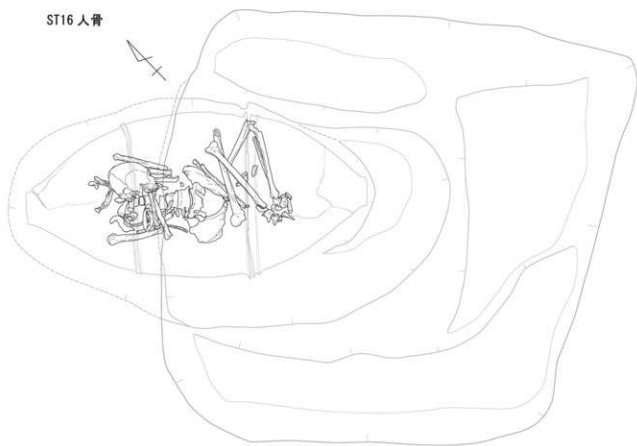


第47图 10·13号墓棺出土人骨实测图

ST14 人骨

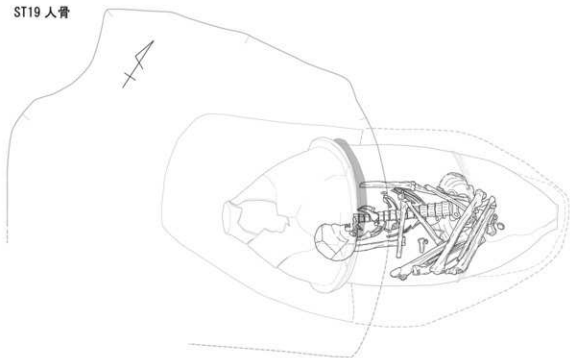


ST16 人骨

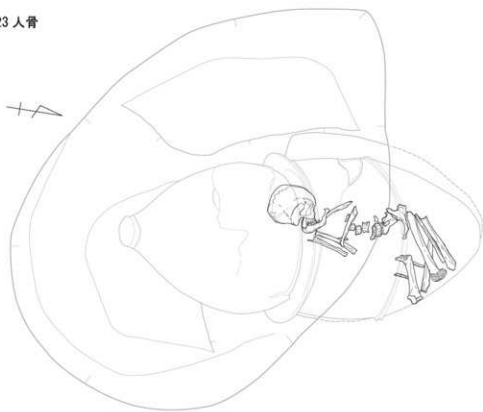


第48图 14・16号甕棺出土人骨实测图 (S=1/15)

ST19 人骨

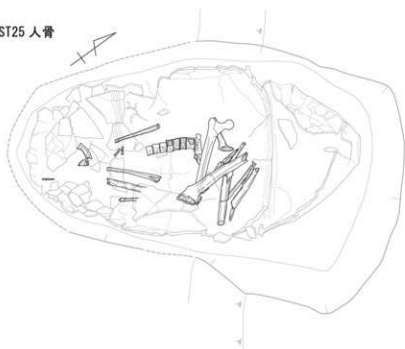


ST23 人骨

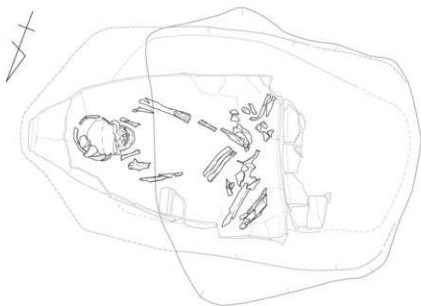


第49图 19・23号甕棺出土人骨实测图 (S=1/15)

ST25 人骨

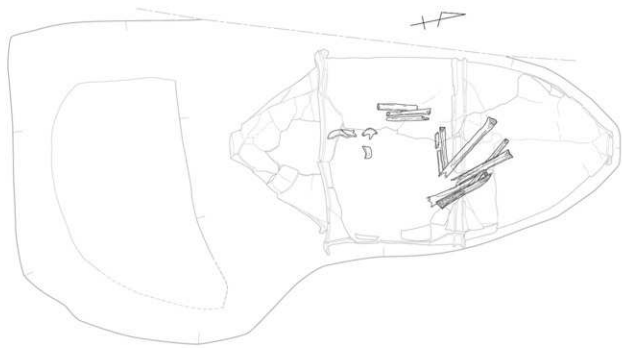


ST27 人骨

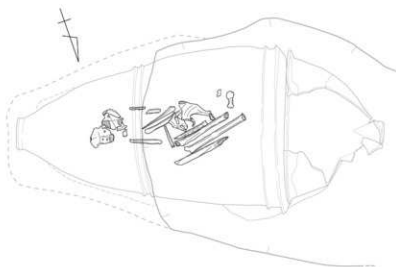


第50图 25・27号墓棺出土人骨实测图 (S=1/15)

ST31

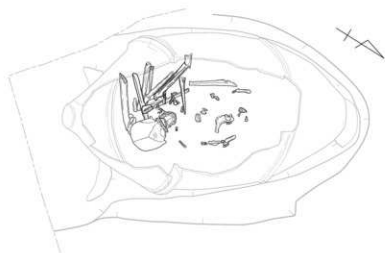


ST32 人骨

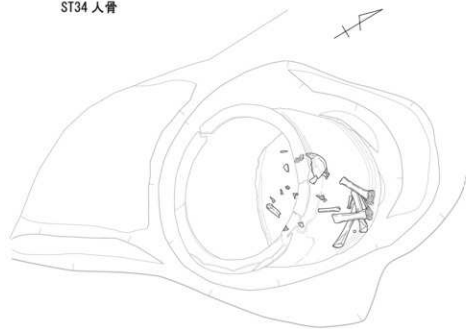


第51图 31・32号甕棺出土人骨実測図 (S=1/15)

ST33 人骨

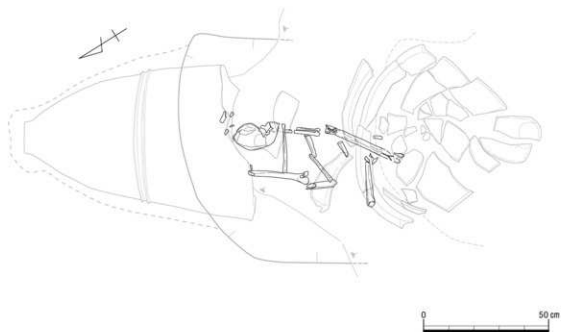


ST34 人骨



第52図 33・34号墓棺出土人骨実測図 (S=1/15)

ST39 人骨



第53图 ST39号墓棺出土人骨实测图(15)

第5章 調査成果の分析

津古牟田遺跡7次調査では、KⅡb式～KⅢa式(橋口1979)の甕棺墓が検出された。KⅡb式～KⅡc式は列埋葬の傾向があり、KⅢa段階ではグループに分かれて密集する。KⅢa式の甕棺墓が最も多い。

KⅡb式:	ST10	ST13	ST16	ST27	ST28	ST33					
KⅡc式:	ST07	ST11	ST20	ST29	ST30						
KⅢa式:	ST12	ST19	ST14	ST23	ST24	ST25	ST31	ST32	ST34	ST39	ST41
KⅢb式:	ST04										

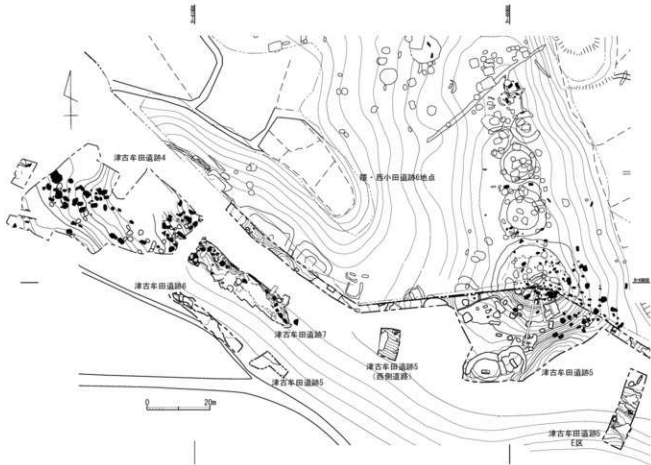
墓地変遷については、隈・西小田遺跡も含めた検討を将来の課題とする。第54図で、これまでの津古牟田遺跡で確認された甕棺墓群と隈・西小田遺跡で確認された、既公表全体図から抽出した弥生時代の甕棺墓・石棺墓・木棺墓・土槨墓を黒塗りで示した。津古牟田遺跡4ではⅡa期～Ⅲb期を中心とした墓域の展開、津古牟田遺跡5では、Ⅲa期～Ⅳa期を中心とした墓域が展開している。紙幅の関係もあり、ここでは甕棺墓の発掘調査方法に関する分析を示すことにする。

1. 16号甕棺墓墳の掘削

墓墳は南西側から階段状に掘削している(第13図)。残存深さ1m程度の1次墓墳があり、それ以下で階段状となる。標石が残存していた31号甕棺墓(第19図)を参考にしても約1m下への掘り込みがまず行われるだろう。残りが良い7号甕棺墓(第6図)も1m程度の掘り込みでそれ以下が階段状となる。

次に甕棺設置用の横穴の掘削を行う。ここに時間的経過がどれほどあるのかわからないが、甕棺自体の大きさに合うように掘削が行われていることから、甕棺設置と近い時期の掘削が考えられる。

横穴の掘削痕は、縦断面では上方から下方へ 10° ～ 20° の角度で斜めに入り込んでおり、刃を持つ利器で棒状の柄があるものを用いて、突いて下へ落とすような掘り方が考えられる。突いた痕跡が10cm程度残り、そこから 130° の角度を持って、下に落としている。刃はそれほど広くなく、刃自体のカーブはない。現状で6cm程度の刃先痕跡が確認でき、掘削痕が連続するため、6cm以上の刃先を持つものといえる。正面観では、



第54図 津古牟田遺跡・隈・西小田遺跡群の甕棺墓の分布 (S=1/1200)

やや内側から入り込んで外側へ掘削し、その後掘削痕が外側から内側へ折れ曲がる。本例よりも時期はやや新しくなるが、現在調査が進められている佐賀市七ヶ瀬遺跡の甕棺墓や土甕墓の一次墓壇壁面にもストロークの長い掘削痕が連続して確認されている。長さ20cm程度、幅7cm程度か。

横穴部の天井部の断面形状は階段状に3つに分かれ、上の方から順に数段階で横穴を掘り進めていったことが窺える。一番奥の掘り込みや底面部分は設置された甕棺に合わせて掘り込んでいることから、甕棺のサイズ・原形が分かった状態まで掘削しているだろう。これが、どの段階であるのかが問題である。16号甕棺は2次墓壇自体が甕棺形状に合わせて掘られており、甕棺と墓壇底の空間はわずかである。なお、合口部の北東部分では、甕棺の口縁部形状に合わせて地山を削り出して、地盤にはめ込んでいる状況も見られた。このことから、設置段階で若干の掘削調整が行われた。甕棺下の堆積層は1cm程度で、横穴部掘削時に落ちた土を最終的にならしたものであるうか。地山は黄褐色味の砂質土で、その上に礫を含む赤褐色味の砂質土が薄くのっている。詳しく接口部分の粘土貼り付け状況を確認すると、上部の貼り方とは異なっており、下甕口縁部の側にはあまり広がっていない。おそらくは下甕を設置した状態で手前から粘土を押し当てる。上甕がくる部分にもあらかじめ粘土を敷いて接口を行う。

2. 16号甕棺墓の入棺

入棺時には階段状の墓壇形状が足場となり、掘削行為と入棺行為は同方向性といえる。入棺時には下甕があらかじめ、設置されているだろう。遺体の安置状況は、合口甕棺の下甕から頭蓋骨から骨盤まで、上甕から下肢骨が出土しており、復元できる。人骨出土状況の詳細な観察・記録から、合口甕棺の下甕に仰向けで頭から挿入され、上肢は、右肘を屈し右手を左胸骨あたりにのせ、左肘は屈屈した状態で手を肩にのせ、下肢は立膝の状態であったと考えられる。埋葬姿勢は仰臥屈葬と推定される。左右ともに膝を立てた状態で埋葬され、軟部組織の腐朽に伴い左側に倒れたと考えられる。足先も左右をそろえた状態が窺えた。また、頭蓋骨に関しては軟部組織腐朽に伴い、甕棺の傾斜に沿って前方に転じたものと考えられる。

遺体の挿入には、1次墓壇が作業スペースとなる。16号甕棺の場合は、甕棺の両側と正面部分にテラス状の平坦面があるので、2人、もしくは3人が1次墓壇に入ることが可能である。埋地角度は水平(0°)である。上甕に遺体を安置したのち、一次墓壇内正面テラスまで入ると遺体の確認は出来る。

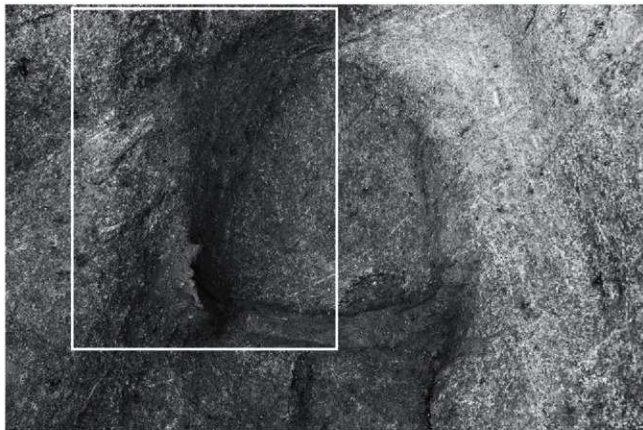
その後、上甕に下肢が収まるように下から覆いかぶせる。下甕の接口部北側は、甕棺口縁の突帯形状に合わせて地山を削っており、下甕設置時に調整して掘削していることがよくわかる。その際、底を合わせて、接口部を粘土に乗せて確定させ、天井側の接口をして閉じる。合口部の下部から側面、側面から上面にかけて黄褐色粘質土で目貼りをしている。天井側は下甕部分に6~8cm、幅広く粘土が充填されている。上甕は4~5cm幅。ただし、断面で見ると下甕10cm幅、上甕7.5cm幅で、上甕のほうに厚く貼っていることがわかる。掘削段階では目貼り粘土の状況をうまく検出することが難しいが、土層断面で確認すると粘土が土より厚く、そして広く分布していることが窺える。

3. 16号甕棺の墓壇埋め戻し

粘土で上下棺を固定したあと、どのように埋めているのか、土層を確認しており推測が可能である。16号甕棺墓の土層堆積状況は甕棺の上位に淡褐色シルト~砂質土がのっている。その後も、数回に分けて砂層主体の堆積がみられ、一気に埋めたものではないことが看取できる。16号甕棺墓では、淡褐色~淡黄褐色の砂質系土の埋土が連続する。その砂質系土に含まれる赤褐色粘質土ブロックの濃淡で幾重にも積層されている。甕棺部付近やその上位には砂質系土がみられ、1次墓壇や墓壇上部には、礫や赤褐色粘質土が多く混じる層が堆積している。

他に10号甕棺墓(第8図)では、土層堆積状況は甕棺の上位の一部にきめの細かい淡赤褐色シルト(8層)や淡黄褐色砂層(7層)が薄くのっている。その後も、何段階かに分かれて水平堆積がみられ、必ずしも、一気に埋めたものではないことが看取できる。10号甕棺墓では、赤褐色系土(4・6・9・12・14層)と淡褐色砂層(3・5・7・10・13層)が大きく互層となっている特徴がある。甕棺の傾斜角度でも特徴が異なると思うが、どの甕棺墓もまず、甕棺墓の直上にくすくす土をかぶせており、その後、一度に埋めていくのではなく、数段階に分けて埋めていることが分かる。

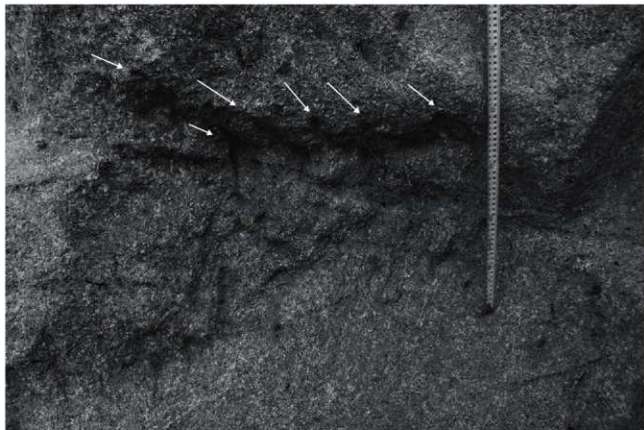
甕棺墓の墓壇掘削、入棺儀礼、墓壇埋め戻しの埋葬行為を遺構から復元してみたが、他にも当時の精神生活を表す事項が観察できた。ST12とST17では、異種胎土が上甕、下甕双方に用いられており、焼成後の色調に変化が表れている(巻頭図版3)。いずれも接口部分に異なる胎土を用い、焼き上がり異なる色調となっている。これは、密閉粘土とも関係するような精神性を示すもの可能性はないだろうか。類例の探索を含めて、今後の課題としたい。また、甕棺製作技法について、興味深い事象も明らかになった。津古半田遺跡7で確認された大形棺(上・下)の口縁部接合については、Aタイプ(上に粘土をのせて、その下部に貼り付け粘土を足すもの)と、Bタイプ(肥厚する擬口縁の両側に粘土を貼り足して水平口縁とするもの)の大きく2者が存在した。そしてその違いは、焼成にも関係しており、Aタイプは淡褐色系の甕棺でBタイプは赤褐色系の甕棺である。甕棺の製作や流通に関しても残された課題は多い。



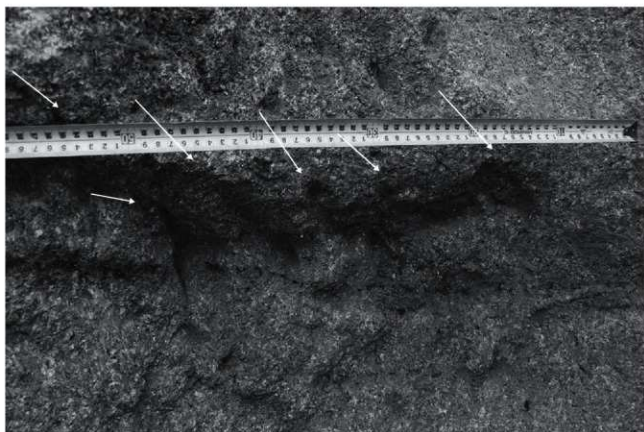
16号墓棺墓横穴部西側掘削前（写真編集：コントラスト強め）



16号墓棺墓横穴部西側掘削痕（左：正面観 右：斜め方向）
（写真編集：コントラスト強め）



16号墓棺墓横穴部西側掘削痕側面観（写真編集：コントラスト強め）



16号墓棺墓横穴部西側掘削痕詳細（写真編集：コントラスト強め）



津古牟田遺跡7全景（南東から）



津古牟田遺跡7調査区全景（上空から）



津古牟田遺跡7調査区
西側甕棺群（上空から）



津古牟田遺跡7
ST10・ST16（上空から）



津古牟田遺跡7調査区
東側甕棺群（上空から）

図版3



①1号壳棺墓（北から）



②1号壳棺墓人骨出土状況（北から）



③2・3号壳棺墓（東から）



④4号壳棺墓（東から）



⑤4号壳棺墓人骨出土状況（南から）



⑥4号壳棺墓供献土器（南から）



⑦5号壳棺墓（南から）



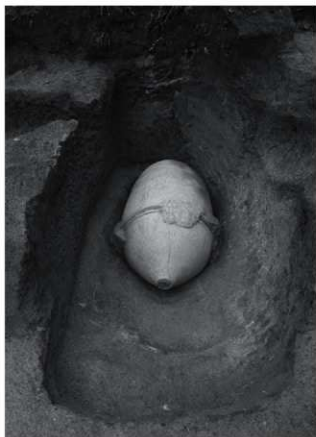
⑧6号壳棺墓（南西から）



①7号甕棺墓土層（南から）



②7号甕棺墓土層詳細（南から）



③7号甕棺墓検出（北東から）



④7号甕棺墓人骨検出（北東から）



⑤7号甕棺墓上甕粘土固定（北東から）

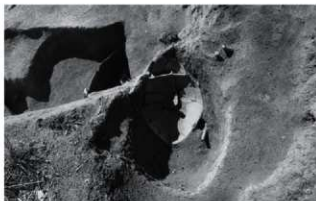


⑥7号甕棺墓人骨出土状況（南西から）

図版5



①8号甕棺墓(東から)



②9号甕棺墓(北東から)



③10号甕棺発掘作業風景(北東から)



④11号甕棺墓(南西から)



⑤12号甕棺墓(東から)



⑥12号甕棺墓人骨出土状況(西から)



⑦13号甕棺墓(南西から)



⑧13号甕棺墓人骨出土状況(北東から)



①10号甕棺墓土層（南西から）



②10号甕棺墓土層詳細（西から）



③10号甕棺墓（北西から）



④10号甕棺墓粘土検出（北西から）



⑤10号甕棺墓（東から）



⑥10号甕棺墓粘土詳細（北西から）

図版7



①14号甕棺墓土層 (南東から)



②14号甕棺墓接口部分詳細 (北西から)



③14号甕棺墓人骨出土状況 (西から)



④15号甕棺墓 (南西から)



⑤17号甕棺墓 (北東から)



⑦18号甕棺墓土層 (西から)



⑧14号甕棺墓人骨実測風景 (南西から)



①16号甕棺墓土層 (南東から)



②16号甕棺墓横穴部検出 (南東から)



③16号甕棺墓人骨出土状況 (南西から)



④16号甕棺墓横穴部土層 (東から)



⑤16号甕棺墓下層 (南東から)



⑥16号甕棺墓接口部下層粘土 (南東から)



⑦接口部下層地山掘り込み部 (南東から)

図版9



①19号甕棺墓土層（南東から）



②19号甕棺墓横穴部土層（南から）



③19号甕棺墓人骨出土状況（北東から）



④19号甕棺墓人骨出土状況詳細



⑤20号甕棺墓（西から）



⑥22号甕棺墓（東から）



⑦23号甕棺墓土層（西から）



⑧23号甕棺墓（北から）



①23号甕棺墓人骨出土状況（北から）



②23号甕棺墓粘土検出状況（北東から）



③24号甕棺墓（北東から）



④25号甕棺墓（北西から）



⑤25号甕棺墓人骨出土状況（北西から）



⑥27号甕棺墓（西から）



⑦27号甕棺墓人骨出土状況（西から）

図版11



①28号甕棺墓（南西から）



②28・29号甕棺墓（北西から）



③29・30号甕棺墓（北から）



④30・29号甕棺墓（西から）



⑤29号甕棺墓下層粘土（西から）



⑥31号甕棺墓土層（東から）



⑦31号甕棺墓（南東から）



⑧31号甕棺墓人骨検出状況（北東から）



①31・32・34・19号壳棺墓（北東から）



②32号壳棺墓土層（北から）



③32号壳棺墓（南西から）



④33号壳棺墓（北東から）



⑤32号壳棺墓人骨出土状況（東から）



⑥33号壳棺墓（北西から）

図版13



①34号甕棺墓（北東から）



②34号甕棺墓上蓋出土状況（南西から）



③34号甕棺墓人骨出土状況1（南西から）



④35号甕棺墓（北西から）



⑤34号甕棺墓人骨出土状況2（北東から）



⑥36号甕棺墓（東から）



⑦37号甕棺墓（東から）



①38号甕棺墓 (南東から)



②40号甕棺墓 (東から)



③39号甕棺墓 (南から)



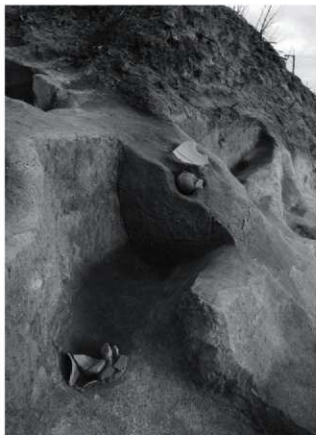
④39号甕棺墓人骨出土状況 (南西から)



⑤31号甕棺墓土層 (南東から)



⑥41号甕棺墓 (南から)



①1号溝土層（北西から）



②14号土坑・2号溝（南東から）



③2号溝土層（南東から）



④2号溝土器出土状況（南東から）



①2号溝土器出土状況（南東から）



②2号溝土器出土状況（南東から）



③2号溝（南西から）



④3号溝（南東から）



⑤14号祭祀土坑上層（南西から）



⑥14号祭祀土坑下層（南西から）



⑦8号土坑（西から）



⑧9号土坑（北東から）

図版17



ST04



ST07



ST10



ST11



ST12



ST13

大形棺①[ST04・ST07・ST10・ST11・ST12・ST13]



ST14



ST20



ST16



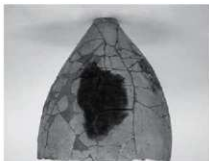
ST19



ST23



ST16



ST23



ST24



ST25



ST27



ST28



ST29



ST30



ST31



ST32



ST33



ST34

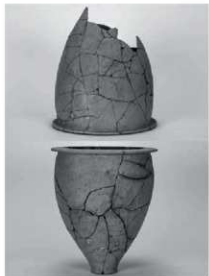


ST39



ST41

大形桶④[ST31・ST32・ST33・ST34・ST39・ST41]



ST01



ST02



ST03



ST05



ST06



ST08



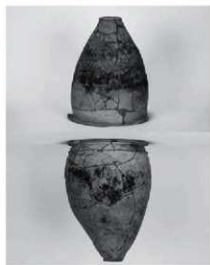
ST09



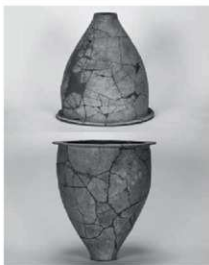
ST15



ST17



ST18



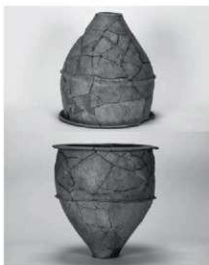
ST22



ST35



ST36



ST37



ST38



ST40



ST 4 共献

中形棺・小形棺②[ST18・ST22・ST35・ST36・ST37・ST38・ST40・ST04共献]



SD01 (37-1)

SD02 (37-4)



SD01 (37-3)

SD02 (38-10)

SD02 (38-9)



SD02 (37-6)

SD02 (37-7)

SD02 (37-5)



SD02 (37-8)

SD02 (38-14)

SD02 (38-15)



SK14 (41-3)



SK14-2 (41-4)



SK15 (41-6)



SK15 (41-8)



SK15 (41-7)



SK15 (41-11)



SK08 (42-2)



SK15 (41-5)



SK15 (41-9)



SK08 (42-1)



SK08 (42-3)



SK15 (41-10)

土坑出土土器[SK08·SK14·SK15]

報 告 書 抄 録

ふりがな	つこむたいせき							
書名	津古牟田遺跡7							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	山崎 頼人(編)							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 Im0942-75-7555							
発行年月日	令和3年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
津古牟田遺跡7	福岡県小郡市津古	40216		33°15'10"	130°20'10"	2018.10.9 ～ 2019.2.9	746.06㎡	宅地造成(道路)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
津古牟田遺跡7	集落跡 その他の墓	弥生時代		甕棺墓 溝 土坑		甕棺 弥生土器	人骨の残りが良く、埋葬状態がよくわかる。	
<p>津古牟田遺跡は小郡市北部に広がる丘陵地帯に位置し、隣接して筑紫野市隈・西小田遺跡群第6地点がある。当遺跡はこれまでに6次の調査を実施し、弥生時代から古墳時代の墓地在形成されていることが分かっている。西側の4次調査から続く弥生時代中期の甕棺墓列(2列)とその外側に祭祀溝・土坑が位置しており、北部九州弥生時代中期墓制の典型例である。人骨の残りも良く、埋葬方法や精神世界を復元できる調査となった。</p>								

津古牟田遺跡7

小郡市埋蔵文化財調査報告書第340集

令和3年3月31日

発行 小郡市教育委員会

小郡市小郡255-1

出版 アイフィールド有限公司

小郡市祇園2-7-2

